

修士学位論文

「田舎」における国民意識の形成
—トルコと日本の近代小説の比較研究

Formation of National Consciousness in the “Countryside”——A Comparative
Study of Modern Turkish and Japanese Novel

2004 年度

東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻

31-26023

ギュヴェン・デヴリム・チェティン

GÜVEN Devrim Çetin

目次

はじめに	5
第Ⅰ章「よそ者」の分析—「田舎」空間における国民意識、戦争の問題.....	6
はじめに	6
I. 1. 「よそ者」に対する現在までの主要な評論アプローチ	6
I. 1. 1. 1960 年以前（1930 年代～1950 年代）の「よそ者」論 — 農村問題と政治的な 討論の対象としての「よそ者」	7
I. 1. 2. 主人公を中心にした 1960 年までの評論、「国民」として村人の問題.....	15
I. 1. 3. 1960 年以降期の「よそ者」論—「よそ者」の現実性を中心に文学評論的なア プローチの開始.....	16
I. 1. 4. 「よそ者」の仏訳の前書き —— 二人の「異邦人」としての「ムルソー」とア ヒメト・ジェラル.....	20
I. 1. 5. 1960 年以降期と以前期の「よそ者」に対する評論の類似点・相違点概観....	23
I. 2. オスマン帝国の国家構造、国家と社会の関わり方と国民意識の形成.....	24
I. 2. 1. 「よそ者」における知識人・士官というプロトタイプと「トルコ人としての国 民意識」の形成における士官の進歩性	27
I. 2. 1. a. オスマン帝国近代化過程における「士官」の位置	27
I. 2. 1. b. 「よそ者」に登場するチャナッカレ戦争とアヒメト・ジェラル	31
I. 2. 2. 「トルコ人としての国民意識」の萌芽と「士官」の役割	32
I. 2. 3. 「よそ者」において、「国民意識形成」の先駆者としての士官と国民意識を持 たない村人の対立.....	33
I. 3. 「よそ者」におけるイデオロギーの問題.....	37
I. 3. 1. 村人のイデオロギー的立場	37
I. 3. 2. 「村人」とアヒメト・ジェラルのイデオロギー上の関わり方、キリスト教的な 記号の正当性.....	38
I. 3. 3. 「よそ者」の村人は復古主義というイデオロギーを持つのか？	43
I. 4. 「よそ者」の構造一覧.....	48
I. 4. 1. 知識人階級に宛てられた手紙としての「よそ者」	48
I. 5. 「よそ者」の歴史的な記号—敵軍としてのギリシャ軍と救国戦争	51
I. 5. 1. ヨーロッパのギリシャ文化に対する懐古的な態度と「トルコ観」	51
I. 5. 2. 「アナトリアのギリシャ化」におけるギリシャ人通訳の役割	52
I. 5. 3. 「よそ者」におけるギリシャ軍という記号.....	54
I. 5. 4. ギリシャ軍に対する態度においてトルコ人としての国民意識の萌芽と「よそ 者」の村人	54
I. 5. 5. ギリシャ空軍のビラに見る歴史的背景とナポレオン・ボナパルトのエジプト 占領	57
第Ⅱ章『南小泉村』と『よそ者』における都会人としての語り手と村人としての農 民の対立	60
はじめに	60
II. 1. 「中央」としての都会と「地方」としての「田舎」、都会人の「文明人」としての 上位性.....	61
II. 1. 1. 「南小泉村」の時代の都市と地方	61
II. 1. 2. 「よそ者」のオスマン・トルコにおける「都市」と地方	63
II. 3. 「暗黒」の空間としての「寒村」	64
II. 3. 1. 「南小泉村」でスラムと同定される農村.....	64
II. 3. 2. 「よそ者」の「農村観」	66
II. 4. 身体的健康という基準.....	67

II. 4. 1. 「衛生」という基準	68
II. 4. 2. 「よそ者」における「衛生」という問題	70
II. 4. 3. 健康／病気という基準	71
II. 4. 3. a. 病の温床としての「南小泉村」	71
II. 4. 3. b. 病や身体障害の場として「よそ者」の農村	72
II. 4. 3. c. 「富」／「貧」の上下関係からみる「病」	73
II. 5. 1. 「南小泉村」における農民の外観による価値化—動物比喩	74
II. 5. 2. 「よそ者」における「動物比喩」と「美観」	76
II. 6. 中央の特権化手段としての「標準語」	78
II. 6. 1. 「南小泉村」における「都会人化」の手段として「標準語」	78
II. 6. 2. 「よそ者」における言葉の問題	80
II. 7. 結論：ナショナルアレゴリーとしての「農村小説」	81
第 III 章「田舎教師」と「よそ者」における戦争と、それに対する「田舎」住民の 態度—メディアと教育から見る両国における国民意識の問題	85
はじめに	85
III. 1. 2. 「田舎教師」と「よそ者」に見られる「メディア」と「田舎」住民の相互関 係	85
III. 1. 2. a. 清三の反戦的の態度の変化	86
III. 1. 2. b. 日露戦争の戦争報道の言説について	89
III. 1. 2. c. 広瀬の死について	90
III. 1. 2. d. 従軍記者として「原 杏花」 ^{はらきょうか}	91
III. 1. 2. e. 戦争報道によって形成される「田舎」住民の新型共同体	93
III. 1. 3. 「よそ者」に見られるメディアと「田舎」住民の相互関係—「田舎」における メディアの消極性	97
III. 1. 3. a. 「よそ者」におけるメディア—オスマン帝国における「印刷」の歴史的背 景	97
III. 1. 3. b. オスマントルコにおける印刷の萌芽	98
III. 1. 3. c. オスマン帝国における印刷の発達による混乱	99
III. 1. 3. d. 最初の「トルコ人」の印刷者	100
III. 1. 3. e. オスマン帝国におけるマスメディア	100
III. 1. 3. f. アブデュルハミトの在位の時代のメディアと出版物に対する検閲政策 (1876-1909 年)	101
III. 1. 3. g. 新聞記者と政府の関わり方の一例	102
III. 1. 3. h. 出版物の発展	103
III. 1. 3. i. オスマン帝国におけるメディアの役割と効果範囲	105
III. 1. 3. j. 「よそ者」におけるメディア	105
III. 1. 3. k. 「よそ者」における「新聞」の位置と二つの変化	108
III. 1. 3. l. 宗教的要素	115
III. 1. 3. m. 「メディア」としてイマーム	116
III. 1. 3. n. 「田舎教師」の和尚と、イマームの比較や「よそ者」の農民の出版物に対 する迷信	117
III. 1. 4. 結論：戦争を正当化する手段としての新聞—国民の支援を目指す新聞と外交 的な新聞	118
III. 2. 「田舎教師」における学校教育と国民意識形成	121
III. 2. 1. 学校教育における天皇制と国民意識	123
III. 2. 1. a. 戦争とナショナリズムの中心地としての学校	124
III. 2. 1. b. 戦争に関して校長の指導的立場と教師たち	125
III. 2. 1. c. 軍国主義的な儀式と学校の関係	126
III. 2. 2. 「よそ者」と同時代作品における学校教育の位置	128

III. 2. 2. a. 学校教育の質	128
III. 2. 2. b. 村人の自己表現不足とコミュニケーション不足という問題—村人の無教育の問題.....	129
III. 2. 2. c. 教育の画一性.....	130
III. 2. 2. d. 教育と軍国主義.....	135
III. 2. 2. e. 「よそ者」におけるミリタリズム—教育者としてのアヒメト・ジェラル	138
III. 2. 3. 結論：国家による制度的なナショナリスト教育と個人的、恣意的な教育によるナショナリズムの注入.....	141
第IV章 終章	142
民族・文化的同質性	142
言語の問題.....	143
王朝の古さ、民族的同質性.....	145
「夷人」の侵入に対する国防的連帯感と、国際的規準に基づく国防の確立.....	145
宗教的要因.....	147
ドイツのナショナリズムとフランスのナショナリズムから見た「南小泉村」、「田舎教師」の日本と「よそ者」のトルコ	147
参考文献	150

はじめに

本論では、トルコと日本の近代小説の比較から、両国における国民意識の形成に伴って、都市と「田舎」がどのような文学的表象を与えられたかを検証することを目的とする。トルコ共和国創立前の救国戦争を背景とするカラオスマノールの *Yaban* 「よそ者」(1932年)を軸に、日露戦争を背景とする田山花袋の「田舎教師」(1909年)と、東北の農民の生活を冷酷に描いた眞山青果の「南小泉村」(1907年)によって、大規模な国民動員を伴う戦争の影響を比較検証し、国のあり方の表象としての「中央」と「地方」の関係を分析し、両国の国民意識とナショナリズムの相違を見出す。方法としては、国民意識形成過程における相違を、両国の歴史的長や、メディアおよび教育の役割を検証する。

日本自然主義文学派の主要な作家である田山花袋と眞山青果と、トルコ近代文学の自然主義に大きく影響を受けたヤークプ・カドゥリ・カラオスマノールの農村を舞台にした作品を、国民意識の形成という世界的普遍性を持つ共通の問題を機軸に比較分析する。人生の現実をありのままに描写する文学派でありながら、この三作品の共通点は、ナショナリズムに濃厚に色づけられた主観的姿勢を示すところである。

第一章において、「よそ者」に関する主要な評論的アプローチを紹介し、筆者の分析を加える。第二章では、都市論的な観点から、「中央」と「地方」のかかわりを通して、「南小泉村」と「よそ者」を比較し、双方の主人公の「都会人」としての視点からの農村観・農民観を考える。第三章では、「田舎教師」と「よそ者」を、戦争を背景にした「田舎」において、メディアや教育によるナショナリズムの拡散を分析する。最後に、それらの論を踏まえ、三作品を通じて両国の国民意識の相違を規定する。

第 I 章「よそ者」の分析——「田舎」空間における国民意識、戦争の問題

はじめに

「よそ者」は、オスマン・トルコ帝国の予備役将校であるアヒメト・ジェラルが、第一次世界大戦中に戦場で負傷し、手術で右腕を切断、その後部下の故郷の村へ移り、そこで暮らすようになってからの回想手記形式の語りである。しかしこの小説には、ただ都会人の主人公に馴染みのない農村生活や村人との交際が漠然と語られるわけではない。この小説では、18 世紀初頭以来、西洋化の流れの中でヨーロッパ諸国（主にロシア・イギリス・フランス）の圧迫を脱しようとするオスマン帝国の近代化の試みと、継続的な帝国の危機や衰退を背景に、「田舎」を舞台にした人びとの苦悩、交流と葛藤というパノラマが描き出されている。

＊

この章において、この論文の執筆者によって「よそ者」というタイトルで日本語に翻訳された *Yaban*（1932 年）というトルコ共和国創立降期の小説の発表から現在までのアプローチを紹介し、次にオスマン・トルコ国家において「地方・田舎」の位置や、士官階級において「国民意識」の形成、西洋化の過程においてナショナリストとしての士官階級の展開過程と、作品における「士官」の役割を分析する。救国戦争時期の農村のイデオロギー的ありかたを考察し、農民には「イスラム復古主義というイデオロギー」の存在の有無を検証する。そして「よそ者」の「構造」を、従来の論文を参考にしながら分析し、最後に小説において「敵軍」として登場するギリシャ軍／ギリシャ少数民族のオスマン・トルコ社会でのあり方や、ヨーロッパ諸国とのかかわりを歴史的観点から考え、これらの要素の作品への投影の解釈を試みる。

I. 1. 「よそ者」に対する現在までの主要な評論アプローチ

「よそ者」はトルコ近代小説の主要な作家ヤクプ・カドゥリ・カラオスマノール¹によってトルコ共和国の成立からほぼ 9 年後、そして近代化を目指した改革があ

¹ Yakup Kadri Karaosmanoğlu、作者については、保科真一著『トルコ近代文学の歩み』を参照されたい。

らかた完成した 1932 年に出版された。それ以来約 80 年にわたって、トルコにおいて重要な文学作品の一つに数えられ、フランス語²、ドイツ語³、イタリア語⁴などに翻訳されてヨーロッパで版を重ねている。日本ではこれまで、わずかにその存在が一部認識され紹介されたに留まり、全編の訳書は発表されていない。そこで筆者は、本稿に合わせて日本語訳を完成させた。

保科眞一は、日本で出版された殆ど唯一と言ってよいトルコ近代文学概説書である『トルコ近代文学の歩み』の中で「よそ者」を非常にコンパクトに要約し、村人の態度を簡潔にまとめて紹介している。

アタチュルクの救国戦争の際、ギリシャ軍が「アヒメト・ジェラル」の住む農村を占領するが、イスラム教徒で、ただイスラムの信仰やイスラム導師に忠実な村民は、トルコ国民としての自覚がなく、ギリシャ軍の宣伝にだまされ、ギリシャ軍に便宜をはかる。⁵

初版の出版から現在までの 80 年の間に、トルコにおいて「よそ者」がどのように評価されてきたのか、そしてトルコ近代文学においてどんな位置にあるかといった問題点を明らかにするため、1930 年代から現在までにトルコ語で発表された主要な評論や論文の主な論点を概観する必要があると思う。それによって過去 80 年間に「よそ者」が文芸的、あるいは政治的な文脈においてどのように分析・評価されてきたのか、またそのアプローチはどのようなものであったのかを確認する。その際、1960 年以前と以降で評論の質的な変化が現れるので、この年を境にそれ以前とそれ以降という枠組みを設定した。

I. 1. 1. 1960 年以前（1930 年代～1950 年代）の「よそ者」論 —— 農村問題と政治的な討論の対象としての「よそ者」

この時期に著された評論や論説は概して二つのグループに分けられる。第一のグループは、「よそ者」を、トルコの農村・「田舎」における問題を現実的に、正面から扱って社会に衝撃を与え影響を及ぼしたもので、「村人」の知識人に対する否定的な態度について論じるものである。対して第二のグループは、「農村」や「村人」の

² Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Un Roman Turc de Yakup Kadri Karaosmanoğlu, Yaban*, Besnillian, Mireille (trad.), éditions Cent pages/Unesco, Paris, 1982. Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Yaban: l' étranger*, Ferda Fidan (trad.) Centpages/UNESCO, Paris, 1989.

³ Karaosmanoğlu, Yakup Kadri, *Der Friemdling*, Max Shcultz (übersetzung), A.H. Payne, Leipzig, 1940.

⁴ Kadri, Yakub, *Terrra Matrigna*, Scalero, A. (trad.), Mondadori, Milano, 1941.

⁵ 保科眞一、『トルコ近代文学の歩み』、叢文社、東京、2001、121～122 頁。

描写が非現実的であり、村や村人の否定的な側面だけが主観的に強調され、しかも誇張されているとして批判する。

最初に第一のグループの評論を見てみよう。

カラオスマノールと同時代で同じ学派（国民文学派）の主要な小説家であるレシヤト・ヌーリ・ギュンテキンによる非常に文学的な論説では、アヒメト・ジェラルを、村人を「啓蒙」し「文明化」する目的で来た使者と解釈する。そしてアヒメト・ジェラルの動機を受け入れた上で、彼は二つの点で失敗したとする。すなわち彼は、村の従来の機構を崩すような行動を取ったこと（これは実はアヒメト・ジェラルではなく、村人を批判している）と、彼が村人に対して「論理の言語」を用いたこと、換言すれば使命を果たすにはアヒメト・ジェラルの態度が「生ぬるい」と指摘し、下のように言っている。

もし彼らと同じような空間に育った者がこの使命を帯びたのだったら、彼らを救うためには強引なやり方しか方法がないと覚悟したことだろう。⁶

ギュンテキンは「よそ者」の内容だけでなく、文体や写実性についても解釈をする。彼によればこの作品は「文芸の法則からすれば、最もぞんざいに書かれた」ものではあるが、その衝動性や感激といった印象的な雰囲気は非常に感動的だと言う。読者に衝動や興奮を与える文体を称賛し、作家を小説家というより「偉大な悲劇作家」と定義する。

ウェダト・ネディム・テョルは「よそ者」を普遍性のある最初のトルコの小説と定義する。当時までに見られた、農村や村人に関する楽観的で娯楽小説的な見せかけの雰囲気のマスクを剥ぎ取ることに成功したと述べている。

ヤクブ・カドリ・カラオスマノールは数世紀の腐敗菌と膿汁で一杯になった大きな腫れ物をランセットで切り開いた。従来、トルコの農村と、トルコの村人に被せられた「文学のマスク」を雄々しくも取り払ったのだ。（中略）トルコの村から心地良い鳥の鳴き声、陽気な歌、カワル⁷の音、緑や涼しい川や泉のオアシスがそぎ落とされ、不快感を与えるかもしれない。⁸

⁶ Güntekin, Reşat, Nuri, “Yakup Kadri Bey’in Yeni Eseri”（「ヤクブ・カドゥリ氏の新しい作品に関して」）, *Hakimiyet-i Milliye*（『国民による支配』）, 1932年1月14日号. 引用は“*Türk Edebiyatında Yaban*”, *Yaban*, 225頁.

⁷ トルコの伝統的な笛。

⁸ Tör, Vedat Nedim, “İşte Bir Roman Yaban”,（「これは本物の小説だ——「よそ者」について」） *Kadro*, 1933年4月16日、第16号. 引用は“*Türk Edebiyatında Yaban*”, *Yaban*, 227~28.

テョルは「よそ者」に対する批判に対して、ヤークプ・カドリを、イブセンの『民衆の敵』の「医者」になぞらえ、二人とも現実をありのまま表現するので攻撃されると述べる。また「村人を否定的に捉えること」を批判するグループに対して、「私の悲しい祖国よ！あなたを愛せずあなたを欺く者どもよ、恥を知れ。」というアヒメト・ジェラルがトルコのインテリを批判するモノローグを引き、テョルは頻繁にトルコのインテリを非難する。

生意気でろくでなし、デカダンのトルコのインテリの顔面への平手打ち：「よそ者」。⁹

その一方でアヒメト・ジェラルが実は村人を愛することを主張するが、そういった論を支える引用文もまたアヒメト・ジェラルの当時のインテリや官僚を批判するような内容の箇所である。

シェヴケト・スレイヤは、アヒメト・ジェラルを肯定的に、農村や村人を否定的に解釈する。そして村人の性格が非常に薄いと言い、実は小説の作中人物は三人しかいないと主張する。

もはや彼は、この不毛な空と、厳格な大地の間に消滅したこの黒い大草原と、そして一部の大草原の村人たちと共に、天井の低い狭苦しい部屋の中で人生を過ごすことになる。(中略) この小説には作中人物は三人しかないのである。アナトリアの高地、そしてこの野生の只中で窮^つ迫し、見捨てられた暗い人間の塊であるアナトリアの村人と、アヒメト・ジェラルである。¹⁰

そして小説の焦点である知識人と村人における文化的な相違を次のように表す。

「よそ者」においては、トルコ国民である知識人と村人が直面して、対立する。トルコの村人は知識人と親しめず、彼を「よそ者」扱いする。両者の間には数世紀にわたって培^{つちか}われ、しかもいまだに無くならない、恐ろしい溝があるからである。この相違は彼らの言語、信仰や考え方を区別させたわけである。¹¹

⁹ Tör, Vedat Nedim, “İşte Bir Roman Yaban”, 227 頁.

¹⁰ Süreyya, Şevket, “Yaban”, (「よそ者」をめぐって) *Kadro*, 1933 年 6 月号、第 18 号. 引用は “Türk Edebiyatında Yaban”, *Yaban*, 229 頁.

¹¹ 同前、230 頁.

スレイヤは村の成金や聖職者の敵軍との協力をも批判する。

なぜ空を飛ぶ敵の空軍の戦闘機や地平線を揺らすほどの敵軍の大砲の轟音に対して、ベキル軍曹はこんなに無感情なのだろうか。（中略）なぜこの情けないイマームと卑怯なペテン欺師のサーリー・アーガーは敵軍を先導するのだろうか。¹²

キヤーズム・ナーミ・ドウルも、知識人と村人の相違、隔絶の問題に触れ、その原因を問いたすが、満足できる答えには到達しない。

トルコの村人は、ヨーロッパやアメリカのどこからトルコに来て彼の村に立ち寄る「外国人」をも「よそ者」とはしない。アラビアの砂だらけの砂漠から来た（中略）アラブ人をも予言者の系統の者だと崇拝する。なのになぜトルコの知識人を「よそ者」とみなし、彼を疎み、怖がるのだろうか。なぜ自分と同じ言葉話す知識人の彼を相手に長々と不幸な身の上話をしないだろうか。¹³

ブルハン・ウミト・トプ拉克はヤークブ・カドリが現実を歪めていると主張する。一方的な、ハムレット気取りの「パシヤの息子」の目を通してしか見ていないこと、しかもトルコの村人を一般化していることを彼は批判している。小説の内容だけでなく、文体をも批判し、「小説というよりはむしろエッセイに似ている」としている。

この呪われた土地はどこにあるだろう？そしてこの人たちは何者だろう？その下には幾つかの文明がある、賢者や英雄の血で練られたアナトリアの土がこれほど恩知らずになれるとはとても信じ難い。無論、ヤークブ・カドリ氏は、小説というよりはむしろエッセイに似たこの作品を印象的なものにしようとして書いたわけではない。彼はただトルコ国家¹⁴の重さを背に負っているトルコの村人の苦痛と、彼らと知識人の間における溝に焦点を絞るためにこの作品を著したわけである。¹⁵

といって、ヤークブ・カドリ・カラオスマノールはこの作品を知識人と村人の相違に注意を引くために執筆したのであり、奇を衒^{てら}った作品を目指したのではないとして、ギュンテキンのアプローチを否定する。

ヤークブ・カドリは医者のようにトルコの中部アナトリアの村の病状を診断し、

¹² 同前。

¹³ Duru, Kazım, Nami, “Yaban”, *Ülkü*, 1933 年、第 3 号。引用は “Türk Edebiyatında Yaban”, *Yaban*, 231~32 頁より。

¹⁴ ここで指摘されるのはトルコ共和国でなくオスマン帝国のことである。

¹⁵ Toprak, Burhan, Ümit, “Köylü ve Münevverler”（「村人と知識人」）, *Varlık Dergisi*, Sayı 4, 1933. 引用は “Türk Edebiyatında Yaban”, *Yaban*, 232~33 頁。

トルコのインテリたちに使命を帯びさせる。だが、トルコの村人の現状については、それが歴史的な問題の結果であることを無視し、一方的な、村人に対して不公平な立場に立脚しており、トルコの村人の名誉を傷つけ、彼らを軽視していると批判する。

（中略）小説全体を通じて、村人を叙述するのに、肯定的な、好感的な文章が見当たらないだけでなく、これらの気の毒な人物をしきりと蟻の群、ビーバー、泥まみれのカリフラワー、あるいはオークの樹幹になぞらえるのである。（中略）トルコの村人は暮らすことも、愛することも、信仰することも知らない、（中略）取るに足りない欲求、ペテン師、けち、卑劣、恨みと困窮で成立した塊だという。ヤークプ・カドリ氏の、あるいはアヒメト・ジェラルのこういった記述をどうして信じるのが出来るのだろうか。アヒメト・ジェラルあるいはヤークプ・カドリ氏の記述する村は、名もない小説の中だけの村なのだろうか？あるいは、彼はこの村の構想をアナトリアの村落全てに適用するのか？（中略）自分の食糧を切り詰めて国府の健康のため税金を払ってきたために、医者をも、そして教育のために教師を（中略）利用できなかったのなら¹⁶、誰に責任があるのだろうか。¹⁷

次の引用文では、アヒメト・ジェラルの態度を、国に大した貢献をしたわけでもないのに村人に感謝されて当然と思い、自分を「パシヤの息子」として上位に位置づけていることを批判し、オスマン帝国国家によって搾取され続けてきた村人には、知識人・村人の隔絶の問題に責任がないことを主張する。

村人を恨み、独立戦争の最も逼迫した時期に、腕が不自由という理由で戦闘に参加できず、そして自分の腕を失ったという「献身」に対して感謝・感動されることを期待し、涙垂れのイスマイルの妻を「奪って」一緒に逃げた後、ついに負傷して墓地で死の間際に苦しんでいる彼女をも捨てて、再び去って行こうとする、ハムレット¹⁸を気取るこの「パシヤの倅」こそ悪ではないだろうか。¹⁹

¹⁶ ここで暗示されるのは新しいトルコ共和国政権ではなく旧政権のオスマン帝国の国家である。

¹⁷ Toprak, Burhan, Ümit, “Köylü ve Münevverler”, 233~34 頁。下線は引用者による。

¹⁸ Burhan Ümit Toprakがアヒメト・ジェラルを軽蔑的に形容するのに頻繁に用いる「ハムレット」のイメージは、アヒメト・ジェラルが砲兵隊の士官たちと話し合っ、彼らが村を去ったとき、彼らについて行かなかったことについて「行かないでよかった」と結論し、彼らについて行ったとしたら同情される（苛められ役のびっこの下男、せむしの片思いの恋人、弱虫の爺に例えられる）邪魔者のように扱われるだろうから、不自由な邪魔者というよりは（生命を悲劇が上演される劇場に、そして自分をハムレットになぞらえて）彼のように行動すべきと決断するモノローグに由来するものである。

「私ははるか青春時代からというものの、徐々に、ゆっくりと、静かに悲劇のあらゆる段階を経験してきた。まるで自分自身を観る、自分自身のために演じる沈黙の俳優、悲劇の俳優だった。ちょうど今最後の幕を演じようというところに、役を変えて、他人になろうというのか。

いや！ハムレットの如く始めたわけだから、ハムレットの如く終わりたい。これは私にとっては自分のキャリアに関わる問題である。突然黒黄色の顔の化粧を落とし、苛められ役のびっこの下男、せむしの片思いの恋人、弱虫の爺の化粧にし直すわけにはいかない。」（「よそ者」、153）

¹⁹ Toprak, Burhan, Ümit, “Köylü ve Münevverler,” 234~35 頁。下線は引用者による。

そして彼はある農村を訪れた知人から聞かされた逸話を披露し、トルコの村人のあり様を提起する。

アブデュルハミトの立憲君主国の時代²⁰に徴兵された年寄りの村人と世間話をした。老人はある時、「イギリス軍はもうイスタンブールから出て行ったのかい？」と聞いた。
「もちろんだよ。もう 10 年も前のことだよ。あんたは知らないの」と答えると、
村人は一瞬考えた末に、
「それじゃ、あんた達はここで何してるんだい」
「この老人の問いかけは数世紀にわたって打ち捨てられてきたトルコの村人の全ての苦痛、嘆き、不満と知識人に対する反応を表している」²¹

この逸話の老人が村にきた知識人を外国人と同一視することによって知識人と村人の隔絶の問題の大きさを表している。

ブルハン・ウミト・トプラクと同様に「よそ者」を否定的に批判するイスマイル・ハビブ・セヴクは、小説がドイツ語に翻訳されたことや独訳版の前書きに掲げられた翻訳者の解釈を基盤にしながら、ヤークプ・カドリの技法の分析をする。まず *Der Fremdling* というタイトルの独訳版の翻訳者マックス・シュルツの解釈から引用する。

「小説のトポスは一村でありながら、村の設定は全ての国民に一般化する力を包含している。(中略) 深い感動に値するほどの写実主義をもって、全く臆することなく、しかも厳格な、残酷なまでの正直さを示しながら、トルコ国民の一部に存在する国民意識の欠陥を叙述したのである。」²²

セヴクは共和国創立直前には文学においてアナトリアの村と村人はこういったイメージで描かれたかを次のように述べる。

昔はアナトリアの村と村人というと、ロマンティックなイメージが浮かんだものだ。緑に埋もれ、点在する白い家々、垣根で囲まれた広い中庭にバラ色の頬の娘たち、純粋な牛乳、加工していないヨーグルト、もちろんクリーム、そして家の中には雪のようにきれいな座布団の上に座っている天使の

²⁰ オスマン帝国史においては二つの立憲君主国のエピソードがあった。第一立憲君主国の確立は 1876~1880 であり、第二の立憲君主国の確立は 1908~1923 である。

²¹ Toprak, Burhan, Ümit, “Köylü ve Münevverler,” 235 頁。

²² Sevk, İsmail, Habib, “Yaban”, *Cumhuriyet* (新聞)、1940 年、第 5704 号、第 5714 号。引用は “Türk Edebiyatında Yaban”, *Yaban*, 236 頁。

セヴクによれば、ヤークプ・カドリの技法というのはこの楽天的なイメージを逆転することである。しかし、以前の極端に肯定的な村人・農村のイメージがロマン主義的である一方、カラオスマノールの技法による農村・村人も同様にロマン主義的なものであると言う。

彼（ヤークプ・カドリ）は写実主義の先端を行こうとしたが、結局、逆の方向へ、ロマン主義の先端に走ったわけである。²⁴

セヴクはアナトリアの農村と村人に対するアプローチが双方とも対極に極端で不適切であると主張し、アナトリアの農村は多種多様であり、カラオスマノールの想定は客観的でないと述べる。彼はアナトリアの想定を誤り、間違ったイメージを植えつけていると批判している。そして評論第一章の終わりに、ドイツ語の訳者シュルツを相手に、「よそ者」の論点は間違っていることを伝える。

（カラオスマノールを相手に）あなたはアナトリアをよく知っている我々ではなく、（中略）知らない人たちだけを誤り導くのですよ。ほら、これは「よそ者」の独訳によって明らかになった。（中略）親愛なるマックス・シュルツさん！もしアヒメト・ジェラルが語るアナトリアの村が現実だったら、独立戦争自体、起こり得たのだろうか。²⁵

その二章では、トルコの「田舎」を誤った技法をもって主観的に規定しているとする「よそ者」に対して、「田舎」の肯定的な側面も否定的な側面も客観的に表す作品としてハーリデ・エディプ・アドゥワル著「あの阿婆擦れを殺せ！」（*Vurun Kahpeye*, 1926）を指し示している。

一方、ナスーヒ・バイダルは「よそ者」が「事実を歪め」る点や農村の否定的な側面だけを強調しているといった批判に答え、この小説はトルコの農村の経済開発や啓蒙化過程に直面する問題を勇敢に表している作品だと定義している。彼は初めて、「知識人と村人」という問題規定を、「都会人と村人の問題」として規定し直している。

²³ 同前、236~37 頁。

²⁴ 同前、237 頁。

²⁵ 同前。

村人はその気持ち、言葉などを理解できず、自分の生活条件と相容れない都会人をよそ者として定義し孤立させてしまう。しかし、都会人にとっても同じ理由で村人は「よそ者」である。その責任は誰にあるのか。村人を感情が単純で、考えが遅れた、言語が発達していない人びととするなら、彼らをそのように形作ったのは、ずっと無視してきた都会人ではないだろうか。²⁶

バイダルは、責任は村人を自分の多様な仕事に利用し、しかし農村の教育、健康などの問題に無関心な態度をとってきたオスマン帝国政府と都会人にあるということをも主張する。「都市と農村」と「都会人と村人」の相違・隔絶といった「真実」が誇張されロマン主義的に取り上げられることは、こういった都会人の無関心や、オスマン帝国政府の故意の「反啓蒙主義」といった政策の結果、ノラマを強調するという機能を果たしていると述べる。彼も「よそ者」の写実主義には多少欠陥があることを指摘する一方、小説に設定される農村・村人は十分現実的であると論じる。

ヴェジュディ・ビュリュンは独立戦争時代のインテリの心情に焦点を当てている。アヒメト・ジェラルを、戦争、帝国の崩壊などの大きな衝撃の中で孤独に陥った障害者と定義する。²⁷国の崩壊の危機に直面して、祖国の市民の一部は国民意識を持ち救国活動に献身する一方で、それに反対あるいは無関心な態度を取る人びとに対して主人公が恨み、嫌悪を抱いて、悲観的になるのは当然だと述べる。そして彼が「自分に襲い掛かる、殺そうとする人物に対して片腕で平手を打つ」シーンには、トルコの立ち直りを象徴的に見出している。ビュリュンは小説の構造については、アヒメト・ジェラルは作家の干渉によって操られ自由を奪われていると主張し、これは写実主義のルールに適切ではないと述べる。他方、他の作中人物の写実性を高く賞賛する。

ニハド・サーミ・バナラルは主人公を中心に、「よそ者」の事実性を検討する。

「よそ者」は第一次世界大戦で右腕を失ったので、社会全体と、そして生命そのものと関係を断ち、無目的な、意志の力を失った人物の目を通して見たトルコの村人の小説である。トルコにおける「都会人と村人の不和」には、経済的、社会的、宗教的、言語やまた歴史的な原因がある。(中略)『よそ者』はこういった歴史をきちんと調査する必要性を考慮しないまま書かれたもので、村人に対

²⁶ Baydar, Nasuhi, “Yaban”, *Yücel*, 1942 年、第 85 号、引用は “Türk Edebiyatında Yaban”, *Yaban*, 239 頁。下線は引用者による。

²⁷ Bürün, Vecdi, “Yaban”, *Çınaraltı*, 1942 年、第 49 号。引用は “Türk Edebiyatında Yaban”, *Yaban*, 240~41 頁。

して敵意の眼差しを向けたような作品にならざるを得ない。²⁸

バナルルは「よそ者」が国における「農村問題」に社会の注意を集めたこと自体がこの小説の長所だとする一方、その「農村」の取り上げ方は誇張的、厳酷であると言う。

この作品では、野性状態と言えるほど原始的で、人間らしい条件、感覚と感情に縁がない、特に都会人に対して敵意に溢れた村人の生活が語られている。この村人には「良い、肯定的な」側面が一つもないのである。²⁹

バナルルはアヒメト・ジェラルが精神病を病んでおり、一貫したインテリとしての価値を持たないと主張し、次のように述べる。

農村をこのような人物の目から記述し、こんなに「打ちのめす」ことにどんな意義があるのだろうか。³⁰

上記の引用文でも他の箇所でも、作家を「我々自身を打ちのめす敵意の感情の持ち主である」と批判する。そして小説に登場する農村は中部地方の不毛の村であるがゆえに、トルコの農村全体に一般化できないことを主張する。

1. 1. 2. 主人公を中心にした 1960 年までの評論、「国民」として村人の問題

ここまで 1960 年代までに書かれてきた評論を取り上げたが、これらは主に二つの対立する立場を表している。アヒメト・ジェラルという作中人物を支持するグループとアヒメト・ジェラルの態度や性格を批判するグループである。言うまでもないが、アヒメト・ジェラルを支える評論家等は小説に描かれる「農村」の想定が現実的であることを主張し、反対のグループは小説の呈する農村のイメージやその否定的なイメージの国全体への一般化という態度を否定するのである。したがって両方の評論家のグループの規準は小説そのものというよりその一要素、すなわち主人公

²⁸ Banarlı, Nihat, Sami, *Resimli Türk Edebiyatı Tarihi*, (「トルコ文学史絵本」) MEB, Ankara, 1983, 395 頁。下線は引用者による。

²⁹ 同前。下線は引用者による。

³⁰ 同前。

であるわけである。

わずかに小説に向けられる文学的な批判の一つは、両方のグループに一致する「よそ者」の文体や技法が写実的な作品と言うより、むしろロマン主義的な印象を与えるというものである。

ここまで取り上げてきた評論にも明らかに見られるように、ヤークプ・カドリ・カラオスマノールが執筆した「よそ者」という小説は 1932 年の出版以来、幅広い議論を引き起こしたのである。ところがこれらの議論は文学的なものでなく、政治的な議論の形を取ったわけである。これは当時、オスマン帝国やそれに属するあらゆる機関や組織の崩壊、救国戦争によって敵軍等を国から払拭、その末の共和国の創立などがもたらした「興奮」だけでは説明がつかない。

評論家の「よそ者」をめぐる議論は、二つの対立するテーマを繰り返してきたように見えるが、実は新しい共和国における大きな問題の解決という枠組みがあったからである。その問題はオスマン帝国時代とは違って、トルコ共和国の基礎をなすべき「国民」に関する問題である。オスマン帝国の独特な専制的構造や経済的な条件などにより、トルコにおいては西洋的な意味での「国民」は成立していなかった。のみならず、類似の要因によって労働階級やブルジョワ階級も成立し得なかったである。

つまりこの小説をめぐる議論は、実は当時のトルコ固有の条件において、西洋風の政治制度にふさわしい国民が「存在しない」構造に、その西洋風の政治制度の導入やそれに適応し一致できない庶民の問題が常にテーマの基底をなすのである。したがってこの議論において、小説における農村・村人の設定は実状と一致すると信じ、アヒメト・ジェラルの態度を支持する評論家等は、農村に対する現行の政策が生温く、国民意識形成と農村生活の全般的な向上を目指して、より厳格な、強制的な政策を実行すべきという立場に立脚する。他方小説において描かれる農村・村人は事実に合わないと主張し、アヒメト・ジェラル（あるいは作家ヤークプ・カドリ・カラオスマノールその人）を批判する側は、こういった政策に反対の立場を取り、換言すれば政府の当時の農村に対する政策方針を支持するものであると言っても良い。

1. 1. 3. 1960 年以降期の「よそ者」論——「よそ者」の現実性を中心に文学評論的なアプローチの開始

ニヤージ・アクは『Yakup Kadri Karaosmanoğlu』というカラオスマノールの伝記で「よそ者」の著作の背景を説明する³¹。ヤクプ・カドリは（小説のプロローグに登場する）被害調査員会に半官半民の立場で参加し、1921年の調査巡回の際、20話ほどの短編小説や多数のエッセイを書いた。その中で「よそ者」のテーマとなる「農村問題」や「村人と知識人の不和の問題」などを扱ったのである。それらが「よそ者」の基盤となり、「よそ者」にはそれらの内容的な影響や転用などが明らかに読み取れるのである。またアクによれば、著者は「よそ者」で提起した問題に次の小説『アンカラ』において答えを出そうと試みるのである。

ヴェダト・ギュンヨルは「よそ者」における村人の描写の現実性を賞賛し、その画期的な点に触れる。すなわち、「我々をまさに村に入り込ませることに成功したのである。（中略）我が国の文学には「よそ者」や「あの阿婆擦れを殺せ！」の以前にも幾つか村や田舎町を扱ったものがあるが、それらは現実性や生命力を欠き、「よそ者」をもって初めて、魂のある、考えを持って生き生きした、（現実的な）村人の描写に成功したと位置づけている。村人の孤立の理由は、人里寂れた大平原の只中という環境的な要因によるのではなく、社会的な意識の未成立という問題であると論じる³²が、詳細には分析していない。

フェトヒ・ナージは1971年に出版された『トルコ小説十作』という著書において、「よそ者」に描かれるインテリ像は実際のトルコのインテリとよく合致していると述べている。

我が国のインテリはアヒメト・ジェラルによく似ていると思う。一方では自分が勝ち取るべく戦っている理想を庶民に理解して欲しいと感じ、他方では庶民のあらゆる点における停滞に対して罪悪感を抱くのである。社会的構造はマスによる運動より、知識人の努力や前進を必要とする国々の鍵はここにあるのかもしれない。³³

そしてナージは「よそ者」の「村人と知識人の不和」の扱いについて次のように解釈する。

³¹ Aki, Niyazi, *Yakup Kadri Karaosmanoğlu—İnsan, Eser, Üslup*（「ヤクプ・カドリ・カラオスマノール——人間、作品、文体」）İletişim Yayınları, İstanbul, 2001, 120~121頁。

³² カラオスマノール、ヤクプ・カドリ、「よそ者」、160頁を参照。

³³ Naci, Fethi, *On Türk Romanı*（「トルコ小説十作」）, Ok Yayınları, İstanbul, 1971. 引用は Kudret, Cevdet, *Türk Edebiyatı'nda Hikaye ve Roman*,（「トルコ文学における短編小説および長編小説」）İnkılâp Yayınları, İstanbul, 1970, 152~153頁より。

それにもかかわらず、ヤークブ・カドリがエミネから僅かの愛を受けただけのアヒメト・ジェラルに「トルコの村人と知識人との悲劇的な衝突は水に流されたことになっていた」と言わせるのは認めがたい、単純過ぎる結末のような感じがする。しかし最後に、エミネを捨てざるを得なくなったアヒメト・ジェラルが（中略）一人で歩き続けることは、「知識人たちはまた道を独りで歩まなければならない」という象徴的な、悲観的な暗示である。³⁴

ラウフ・ムトゥルアイは『100 問でトルコ近代文学』³⁵で、オスマン帝国皇帝が農村問題について責任を追及されていないことや、皇帝が共和国政府を指導するような姿勢が見られないことに触れつつ、「よそ者」は画期的な農村文学であり、またトルコの農村問題の規定において重要な役割を果たしたと論じる。

アイテキン・ヤカルは「トルコ小説に見る国民による独立戦争」という著作で、カラオスマノールが「よそ者」の軸としたのは「国民による独立戦争」そのものでなく、「遅れた、国府に見捨てられた農村の『病』を抽出することである」と述べる。そして次のように著している。

1919~1923 年³⁶の国状に関するデータを基にして作られたように見え、1932 年に出版された「よそ者」は、実は 1923 年から 1930 年にかけて新しい社会構造が構築されようとしていた改革の時期の、革命に対する社会の抵抗や不一致に対する失望感が投影している。（中略）これは著者の「エルゲネコン」というエッセイ集にも認められる。³⁷

ヤカルによれば、「よそ者」は、「片腕を祖国とともに失った精神状態」にある人間の目を通して語られると論じる。しかしこの身体障害者の精神状態という要素は、主人公の悲観的農村観を醸成するために工夫されたわけではない。この要素は、村人を自分の国民の一部だと信じて、彼らのために戦った際負傷し不自由になったにもかかわらず、自分の献身に対して無関心で不遜な村人の態度に対する主人公の失望感の深さを強調する上で使用される。

評論家セリム・イレリによれば、「よそ者」は独立戦争を対象にする他の小説と

³⁴ 同前。

³⁵ Mutluay, Rauf, *50 Yıln Türk Edebiyatı*, (「過去 50 年トルコ文学」) Türkiye İş Bankası Yayınları, İstanbul, 1973, 552~553 頁および Mutluay, Rauf, *100 Soruda Çağdaş Türk Edebiyatı* (「100 問で分かるトルコ文学」) Gerçek Yayınevi, İstanbul, 1973, 114~117 頁。

³⁶ ヤカルの「1919~1923 年」という位置付けは誤っている。「よそ者」は物語内容の時間からするとアヒメト・ジェラルがチャナッカレ戦で戦うことで始まり、サカルヤ戦の直後に終わるということを考慮すれば、1915 年から 1921 年 9 月直後までの期間にわたっての設定になっている。

³⁷ Yakar, Aytekin, *Türk Romanında Milli Mücadele* (「トルコ小説における民族解放闘争」), A.Ü.D.T.C.F. Yayınları, Ankara, 1973 を参照。

幾つかの共通点を持ちながら、作家ヤークプ・カドリの農村問題を取り扱う唯一の作品である。

ヤークプ・カドリは「半インテリ」の主人公の（農村や村人の状態に対する）驚きや悲哀を語る一方、不思議なジレンマを強調する。それは一方では国家的な独立の問題に無関心な村人と、その無関心の原因を理解できないアヒメト・ジェラルである。（中略）小説が回想手記という設定になっているが、シャイフ・ユスフ、（狂気の）スレイマン、ジェンネットなどの作中人物の冒険が語られ、これらの話は小説の一貫性を崩さず、語り全体に活気を与えている。こうして小説の筋立ては厳格なルールから解放される。小説の典型的な筋立ての順序も崩され、小説全体に散発的に広がりを見せている。ヤークプ・カドリはエッセイのような自由さを以って村生活を考察する。あえて言うならば、独立戦争という要素さえも、社会科学的な態度を以って作品に取り入れている。彼のこういった分析は、小説の構造の独特さによって完璧に語りと一致する。³⁸

ヒュセイン・アルトゥンヤは、「よそ者」における「田舎」風景の記述は現実的でなく、抽象的な考えを元に語られると評している。³⁹会話に見られる方言やアクセント、習慣など、地域的な情報も事実と一致していないとする。かつまた小説の主人公も現実的な人物像を獲得するに到らず空想の域を出ないとしている。またアルトゥンヤは、作品は観察や研究に根拠を置かず、抽象的なアイディアによって創り上げられていると論じる。

アドナン・ビンヤザルは、「よそ者」と、農村を対象にした他の小説との関係を取り上げる。彼によればこの小説は『カラビビック』⁴⁰（1890）の42年後、『キューック・パシャ』⁴¹（1910）の22年後に書かれ、「アティッラ・オズクルムルも

³⁸ İleri, Selim, “Türk Romanında Kurtuluş Savaşı Özel Sayısı”, (トルコ小説における救国戦争特集)、*Türk Dili*, 1976、298 頁。

³⁹ Altunya, Hüseyin, “Yabancı Olunan Bir Konunun Romanı: Yaban”, *Türk Dili*, 5 月号、1977、306 頁。

⁴⁰ 『Karabibik』(1890)は Nabizade Nazım の小説。

トルコ南部のアンタリア市のベイメリック村に住むカラビビックは、父譲りの田園の4デョニウムを隣人に売り、残りの8デョニウムはヨストウロールに奪われそうな状況に戦っている。奪われてしまうと、彼と、幼くして母親に先立たれた30歳を超し美人でもない彼の娘フーリは飢餓に直面することになるのだ。その年カラビビックは重い病に伏し、病み上がりであった。コジャ・イマームの息子にフーリを嫁がせてイマームの牛を利用できるという彼の期待は実現しなかった。彼は隣村テムレ村の雑貨屋のギリシャ系のヤニに用立てしてもらい牛を買って畑を耕すことが出来た。他方ヨストウロールもカラビビックとの確執を水に流し、フーリと自分の甥の結婚を提案する。カラビビックは喜んで受け入れる。フーリは結婚し、カラビビックは以前の病が再発しかけているが、この結婚で幸福である。

⁴¹ *Küçük Paşa* (リトル・パシャ) (1910)は Ebubekir Hazım Tepeyran の小説。1887~1896年のストーリーである。

中部アナトリアの村のアリはイスタンブールで徴兵されると、サドゥラーザム（オスマン・トルコの宰相）スアト・パシャの大邸宅に仕える同じ村出身の友人に会い、スアト・パシャの兄弟の妻の出産に際して乳母を捜していることを知って、アリは出産直後の自分の妻を連れてくる。彼女も生ま

指摘するように、他の農村小説と比較すると非現実的な夢の国のように設定されてきた農村文学を崩壊させたものである。」しかし彼によればヤークブ・カドリ・カラオスマノールの村に対する態度は否定的で、偏見的である。「迷信、不自由な人間、泥の川に規定される原始的農村が故意に選ばれている」のである。しかも「小説の作中人物は、現実的というより、モデルの印象を与える」。

ビンヤザルは「よそ者」を以下のように否定的に批判する。

（中略）「よそ者」は罪深いインテリの話である。「よそ者」（アヒメト・ジェラル）の村に対する眼差しは被害調査委員会の眼差しである。所々ストーリーが背景になり、自己批判が前景になる理由もここにある。興奮したモノログがそこそこに見られるこの小説は、実は随筆なのである。（中略）トルコのインテリは、イスタンブールの郊外がなぜ「田舎」と呼ばれるのかを理解していないのである。⁴²

1. 1. 4. 「よそ者」の仏訳の前書き —— 二人の「異邦人」としての「ムルソー」とアヒメト・ジェラル

在仏トルコ人小説家ネディム・ギュルセルは、「よそ者」の仏訳に前書きを寄せるにあたり、この小説をカフカやカミュらの視点を導入している。「人生・世界の無意味を発見した主要な近代小説家の一人であるカフカ」がこの「発見からモダンな・残酷な悲劇を醸成した」としたら、（特に「異邦人」の著者としての）アルベル・カミュは「この悲劇の只中に置かれる人間の行動の分析を試みたわけである。」ギュルセルはカミュの「異邦人」を、個人としての人間の人間世界からの *Etrangeté*（隔離）と位置づけ、この小説の主人公ムルソーを「この世の異邦人」と定義す

れたばかりの息子サーリヒも邸宅で好意的に迎えらる。子供のないスアト・パシヤは、サーリヒを息子のように扱い、サーリヒをリトル・パシヤと呼ばせ、サーリヒにパシヤの服を着せる。7年の兵役を終え、アリは妻と共に故郷の村に帰るが、サーリヒは邸宅に残る。村に帰ってから、アリは誤って妻の不貞を疑ったため、離婚して他の女性と再婚し、妻も隣村の男性と再婚する。スアト・パシヤは肺病で死に、パシヤの妻は自分の不妊症を印象付けているという理由でサーリヒを村に追い返し、若い男性と再婚する。サーリヒは父のもとで暮らすようになるが、馴染みのない村の生活にショックを受ける。父は再び入隊となり、継母の嫌がらせを受けるようになり、泉の水汲みや異母きょうだいのおむつ換え、家畜の世話などの家事をやらされる。彼はある冬の夜に咳き込み、怒った継母に打たれて咳が止むまで外に追い出される。寒さを逃れるためにイマームの馬小屋に非難する。一方、パシヤの妻は懐妊し、不妊のコンプレックスから解放される。彼女はその夜、スアト・パシヤの夢を見る。彼は、妻のせいで今リトル・パシヤがどんな目に遭っているかと非難する。彼女は罪悪感に苛まれてヒステリーになり、夫にリトル・パシヤを引き取るように説得する。夫は庁舎に電報を打つが、妻は発狂寸前になる。返信の電報は、リトル・パシヤは3日前の夜に村で狼の群に食い殺されたと伝える。

⁴² Binyazar, Adnan, “Türk Romanının Bugünü”, *Milliyet Sanat Dergisi*, (文芸・芸術雑誌) 第234号, 1977を参照。

る。

その上でギュルセルは「よそ者」と同じタイトル *L'Etranger* である「異邦人」を「従来のインテリ的な冒険を把握する上で欠くべからざる作品」とし、フランス現代文学の主な作品に「現代のトルコを把握するために不可欠な作品である *Yaban* を思い起こす」と述べている。ここで、「よそ者」についてヤakup・カドリ・カラオスマノールにインタビューされた際「*Yaban*」というトルコ語のタイトルの仏訳として「*L'Etranger*」はふさわしいかというインタビュアーの問いに対するカラオスマノールの答えから一部引用している。

それはちょっと物足りないね。*Yaban* は更に広い意味を持っているんだ。古代ギリシャ語の「*Barbarous*」(野蛮・原始人)のような軽蔑的なコノテーションもあるし。この語は意識される世界に疎遠なすべてを象徴している。また不信や敵意を規定するものでもある。イタリア語なら *Terra Matigna*⁴³が妥当だと思うね。これはなかなかいいタイトルだね。要するに、私は「よそ者」において、アナトリアとは *Terra Matigna* であることをほのめかしている。しかも *L'Etranger* はどうしてもカミュを連想させるし、しかも *Yaban* は *L'Etranger* より前に書かれたものだから、トルコ語のオリジナルのタイトルをそのまま使った方がいいと思う。⁴⁴

他方ギュルセルは、アヒメト・ジェラルの手記の形式である、語りは恋愛を軸に構成され、そしてギリシャ部隊の村への侵入、続いて彼が愛した若い村人エミネの死⁴⁵で終わると論じる。この話は一部の箇所を除けば、都会人のインテリとアナトリアの村人の間における衝突に還元される。アヒメト・ジェラルは「オスマン帝国政府によって、何世紀にもわたって見捨てられた」農村という「未知な、哀れな」な世界における自らの観察を日記に写すが、これは客観性を欠く当時の学識教養のあるオスマン・トルコ人の個人的・主観的なアナトリア・「田舎」社会の発見である。

彼はアヒメト・ジェラルの心情を「自然、村や村人に拒絶され、エミネまで彼を見捨てるのである。彼は『異邦人・よそ者』とみなされ、不信感をもたれる。孤独が彼の唯一の味方であり、彼は敵の世界に生きているのだ」と記述する。他方、疎

⁴³ 継母の・邪険な母親の地。

⁴⁴ Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Yaban: l'Etranger*, Traduit du Turc par Ferda Fidan, Préface de Nedim Gürsel, Centpages/UNESCO, Paris, 1989 を参照。

⁴⁵ ギュルセルの「エミネが死ぬ」という指摘は明らかに超解釈 (over-interpretation) である。なぜなら、小説の結末で、腰を撃たれ墓地で一晩休息を取り、アヒメト・ジェラルと共にそれ以上逃げられない状態に陥るが、物語上彼女が死んだことを示すような表現は一切ないのである。

外感に満ち溢れ不条理・無意味な世界に置かれ、自分の死に直面した時でさえ途方に暮れるムルソーと、ポピュリストのインテリであり、農民と新しい世界を作ろうと理想を抱くが結局彼らから疎外されるという苦々しい事実を突きつけられ挫折したアヒメト・ジェラルを比較する。アヒメト・ジェラルは他者が接近・接触不可能な世界においてただの異邦人である。

ギュルセルは、「よそ者」では農民の国民意識不足という問題が誇張されていると述べる。そしてその原因はカラオスマノールが当時の*Kadro*という運動の熱心な支持者であることを指摘し、1923年から小説の出版（1932年）まで政府の左翼グループによって行われてきた継続的な改革は、トルコ国民の大半を占める農民に完全に受け入れられなかったことを批判するところに作家の真の意図があったと主張する。つまり、ギュルセルは、農民は救国戦争には十分協力的であったはずだ、農民が救国戦争に献身的に参加しなかったなら国の独立を守ることがかなわなかったであろう、と言う。その上で、農民層は共和国創立以降の社会改革に抵抗感が強く、そのことにカラオスマノールの批判の矛先が向けられたのだと解釈するのである。彼によればカラオスマノールの態度はいかにも官僚的であり、庶民を意識化する上で、宗教⁴⁶と無知を主な障害と考えていると言う。⁴⁷

ギュルセルはまた、「よそ者」がトルコの農村文学において先駆的な位置を占めることに触れる。「よそ者」の宗教指導者であるイマーム、村の地主であるアーガー、そして村長は単純な善悪論に基づいて作り上げられている。この鑄形のキャラクターは、後期の農村をテーマにする小説においても頻繁に見られるようになる。また特にイマームとアーガーに挑み、彼らに対抗する主人公の姿は普遍的なポジティブなイメージを持つのである。

小説の自然描写は一見目的もない描写のように見えるが、実際は主人公の精神に浸透し、彼の極端な不安感が自然風景に転移されるということを指し示している。またギュルセルによれば「よそ者」はただ一人の知識人の目を通して見る「田舎」でなく、主人公の「何世紀にわたってインテリに見捨てられた」「田舎」という積み

⁴⁶ ギュルセルは「宗教」という言い方をするが、よそ者においてイスラム教そのものに反対する態度は見られず、「イスラム復古主義」という極端な、保守的なものや、村人たちの実は宗教と縁がない迷信に対する批判的な態度が見られる。これ全部を「宗教」に還元することは深刻な歪曲である。

⁴⁷ 実はギュルセルの先のパラグラフでの、論は、この論文にも取り上げるベルナー・モランの“*Yaban'da Teknik ve İdeoloji*”でのアプローチとほぼ同じである。参照符はないが、明らかにモランの論が利用されていると思う。

重なった罪悪感に苛まれる人物の眼差しである。アヒメト・ジェラルは知識人と農民の隔絶の問題の歴史的背景を掘り起こすことはせず、オスマン帝国のインテリゲンツァの罪だと考える。ケマリストの革命以降のトルコは、産業の後進性もインテリと村人の間の溝に起因すると考え、断固としとケマリストであるカラオスマノールは、いずれ村人に「よそ者」でないことを証明すると誓うのである。⁴⁸

またギュルセルは最後に、「よそ者」のイデオロギー的アプローチとトルコの従来の歴史的展開の対照性を規定する。新政権の確立後、外国資本の国への導入、米国化やそれに伴うアメリカン・ウェイ・オブ・ライフへの憧憬などによって国民の役割も自ずと変化し、カラオスマノールの支持するポピュリストのケマリズムを駆逐することになったのである。彼は、トップ・ダウン式にケマリズムを庶民に浸透させようとするカラオスマノールの論は、共和国創立 23 年後にして選挙権などの権利を国民に広めた「社会的多元性」に基づく民主主義への移行によって挫折したのだと結論している。また筆者は、これによって、アヒメト・ジェラルに代表されるトルコのエリートインテリ階級も、村人・農民に対する「歴史的な原罪」から解放されたと分析する。

ギュルセルが指摘し、カラオスマノールも認識する通り、この作品は農村社会や農村問題を社会科学的に取り上げるのではなく、あくまでアヒメト・ジェラルの主観的な考察である。現在一般に農村文学とされるこの作品は、しかし本来は救国戦争当時の農民の行動に対する社会心理的な考察なのである。

I. 1. 5. 1960 年以降期と以前期の「よそ者」に対する評論の類似点・相違点概観

1960 年代以降から 1983 年にベルナー・モランが『『よそ者』における技法とイデオロギー』という論文を発表するまでの時期に著された評論は、それ以前のアヒメト・ジェラルを中心とした政治的立場からの分析から多少解放され、トルコ近代小説の中でのこの小説の位置づけを試みる方向に向かったようである。しかし以前と同様、やはり二つの主要なグループの存在が著しいのであり、これらは従来同様、小説に描かれる農村と村人の光景が現実的であるかどうかを検討の要にしている。

⁴⁸ ギュルセルのエッセイにはまるで「よそ者」の主人公のアヒメト・ジェラルと作家は同じものであるような色合いが見られる。

また 1960 年代以前と以降の評論は共通して「知識人と村人の隔絶」の問題を取り上げている。

「よそ者」においても、上記の引用の評論等においても「村人」が国民意識を欠くことで、あるいはアヒメト・ジェラルに代表される「知識人」が農村に対して長い間無関心であったことで非難されている。それにも関わらず、ここで見逃される点は、知識人と村人の間における隔絶の問題、村人における国民意識の欠陥、国民的な救国戦争に対する無関心などといった問題の責任は知識人たちも、村人も、アヒメト・ジェラルもしかオスマン帝国の権威者にも責任を追及することが正しくないのである。本当の原因はオスマン帝国の独特な構造や「伝統」を重視するたてまえである。これらのような要因はオスマン帝国の近代化的な改革を実行する過程で効果を得られないことにも影響を及ぼしたのである。

「知識人と村人の隔絶」の問題や「田舎空間における国民意識の欠如」などの問題を取り上げるためには、まずオスマン帝国の独特な国家構造、社会のあり方や国家と社会の関わり方を概観しなければならない。これをニヤージ・ベルケス⁴⁹の『トルコにおける近代化』という著作を通して見てみよう。

I. 2. オスマン帝国の国家構造、国家と社会の関わり方と国民意識の形成

近代化の試み以前のオスマン帝国の国家構造は、未だに明らかでないところが多い。一般には封建的構造、または神権政治的構造、あるいはこの二つの融合した構造と推測されるが、ベルケスは実はこれらの推測の誤りを指摘する。

封建的な構造を持った西欧の国々では、絶対君主（Monarch）と封建的階級の闘争の過程において「国民」の結末が生まれ、それを基礎に立憲政権が発生した。それに対して、オスマン帝国の近代化過程は異なる方向に進んだのである。例えばマフムト二世（在位 1808~1839）やエジプトの州知事メヒメト・アリ（在任期間 1805~1848 年）などは西洋的君主（Monarch）のように見えたとしても、両者とも東洋風の専制（Despotic）君主であり、「国民性」を持つ社会も、その社会に成立するブルジョワ階級も想定してはいない。

従って、オスマン帝国の構造は封建制度ではないのである。他方よく論じられて

⁴⁹ Niyazi Berkes (1908~1988) トルコ人社会科学・歴史の研究者。

きたように、これは神権政治（Theocracy）でもない。神権政治の例としてあげられるローマのカトリック教皇政治は、当時の王国、現代の資本主義政権と利益を一致させる限り生き延びるのである。つまり教皇は純粋に宗教的な権力を、世俗的な国家に対して保てないわけである。

オスマン帝国も、封建的経済にも資本主義経済にもよらないという意味では教皇政治と共通している。オスマン帝国のスルタン・ハリーファ⁵⁰政権でも、宗教的権力が国家の世俗的権力に従属的であり、宗教的な地位にある「家臣グループ」が権力を行使し得たのは、政府による政策的指導があったためである。オスマン帝国においてイスラム国家としてのイデオロギーが政策を決定するということは一度も見られなかったものであり、宗教権威者が国家の政治に干渉しようとした場合も、政府はこれを無視したのである。

しかしオスマン帝国の国家構造は西欧のモデルとは一線を画す専制政治（Despotism）であった。国家の源泉は、占領と征服や庶民の支配による権力継承にある。イブン・ハルドゥーン⁵¹によると、この政治的モデルの要は、政治的権力が、非社会化、疎遠化された奴隷⁵²の群集の支持によるのである。これは古代ギリシャの伝統にも、西欧の伝統にも一致しない。

オスマン帝国政権の構造は宗教的と言うよりむしろ「伝統的」なものである。この概念は「宗教」（イスラム）、スルタン・ハリーファ統治、東洋的な専制政権のすべての要素を包含するものである。

第一の要素は、オスマン帝国の伝統的な考え方による秩序（政治制度）は神によって創られた普遍なものであり、しかもそのまま変更を加えずに維持すべきものである。それを維持できれば帝国は永続するというもの。第二の要素は、この政治制度を神によって創られたという理論によって正当化するものである。しかしイスラムにとってこのような国家は正統的なものではない。オスマン帝国全史にわたってイスラム教の専門家はこのような政治権力に宗教的観点からの正当化を提供することができなかったわけである。なぜならオスマン帝国の政治的機構は、権力的、政

⁵⁰ Halife アラビア語で「後継者」「代理者」の意味。ムハンマドの後継者として、全イスラム教徒の指導者であり、教徒の共同体の政治的支配者でもある。ハリーファ制は13世紀半ばに崩壊し、後にオスマン朝トルコ国王（スルタン）の称号として1924年まで使用される。

⁵¹ Ibn Haldun, Ibn Khaldun (1332~1406) アラブの歴史家・社会理論家。

⁵² ここでは使われる語はイスラム教の神と人間を定義する時に使う Kul ということばである。これはキリスト教の（無限の精霊、神の影像という意味の）Man とは違い、神の奴隷の群集を指す語である。信者。

治的、軍事的伝統の結晶だからである。それでも名目上、神の創造物としての制度として、宗教的裏づけを得ていたわけである。第一、第二要素の結果としての第三の要素は、マックス・ウェーバーが指摘する父方世襲（Patrimonialism）である。すなわち神は社会秩序を提供して、それを守り実行するためにスルタンを選び、彼を己の代理人として任命したと考えるのである。従ってオスマン帝国のスルタンは、予言者のハリーファではなく、神のハリーファなのだ。

オスマン帝国において重要なのは、スルタン自身ではなく、その地位である。そして神によってその地位に任命されるがゆえに、その位の正当性が帝国の全史にわたって疑問や議論の対象にはならなかった。スルタンの地位はこの信仰に基盤を置くものであり、スルタン自身に対して攻撃的な行動は見られても、スルタン個人の権力が失墜した時でさえ、位そのものを打倒するような勇ましい動きは、トルコ共和国創立時まで見られなかった。

神は社会の全てを分別して、各々の区分ごとに地位を与えた。この社会は「群」と称され、神が選任した代理人あるいは神の「影」が、その群の羊飼いとなる。この構造を貫く法則は、変化（改革）ではなく秩序である。理想的なのは、変化や進化、進歩ではなく、バランスである。このバランスを正当化するのは正義である。それに反する全てのことは「革命」であり、無秩序とされる。なぜなら変革は腐敗（革命）をもたらすと考えられるからだ。バランスが崩れた社会は崩壊の一途を辿る。神によって付与されたスルタンの責任は社会の秩序を維持することであり、そのために彼には家臣が必要である。家臣とは国家の家臣であり、軍事と実務を司るエリートの兵士の集団である。

オスマン帝国におけるこうした国家と社会の関わりは、西欧のそれと明確に異なり、しかも近代化過程を複雑なものにする最たる要因であった。オスマン帝国のスルタンの家臣グループは社会的階級の代表者ではないこと、国家が社会から成立するものでないこと、国家が社会の経済的利益に基づかないこと、政治的支配は社会と無関係ということ、つまり「国家は神によって社会より上の位置に置かれる」といった理念に根ざす構造は、西欧の国家・社会の位置や関わり方と対照的である。

オスマン帝国国家に仕える集団は社会から集められるものの、彼らは階級、経済的利益、宗教や人種に関わらず、社会から最も隔たり、最も疎遠化し易い群集から選ばれ、特別な教育を施すことによって国家最高の政治権力に仕える階級に育て上

げられた。このグループは「カプクル」⁵³と称されていた。カプクルはスルタンの権力に無条件に、絶対的に属する一方、その権力を行使することで無条件に、絶対的に自由である。納税などのような義務も免責されている。公務員でもなければ市民でもなく、何の社会的、経済的な役割も持たず、ただひたすら、スルタンに仕え政治を行う、特別なエリートのグループである。それがゆえにカプクルは軍事的な階級と定義されてきた。軍隊に属さない者も「兵士」と称され、だからこのグループを定義するには軍事的という形容詞がふさわしいのである。

オスマン帝国の近代化が 18 世紀初頭から始まるとしたら、16、17 世紀には、社会変化によって、社会から孤立した家臣グループ⁵⁴はスルタンの権力の無条件な、絶対的な奴隷としての特質を失い、しかもその一部は社会と関わるようになった。⁵⁵

1. 2. 1. 「よそ者」における知識人・士官というプロトタイプと「トルコ人としての国民意識」の形成における士官の進歩性

1. 2. 1. a. オスマン帝国近代化過程における「士官」の位置

前章ではオスマン帝国における国家と社会のあり方を取り上げたが、こういった構造の中で初めて知識人階級を形成していった士官たちは、特に帝国末期において、全般的な近代化の上でも、政治においても重要な役割を果たしたのである。「よそ者」の主人公アヒメト・ジェラルが士官の地位にあることは偶然ではない。

オスマン帝国において、アヒメト・ジェラルのような「トルコ人」としての国民意識を持ち、しかも西洋風な知識人の現れたのは比較的遅く、アブデュルハミトの独裁的な政権が終焉し、憲法に基づく国家に戻ってからであり、しかも一時的に自由な環境をもたらした第二立憲君主政権の直後であると思われる。そういう意味では、「よそ者」において、知識人階級が「何世紀にもわたって」農村を無視した、あるいは無関心だったと言うが、実は「何世紀も」前でなく僅かに十年ほど前にしかもまだ不明瞭な形でしか成立していなかったトルコの知識階級に対する批判は根拠が薄弱だと言わざるを得ない。従ってオスマン帝国において、「トルコ人としての国

⁵³ Kapıkulu, kapı は門という意味で kul は仕えるもの、家臣、奴隷という意味。日本語の「門下」に当たるか。

⁵⁴ Yeniçeri というスルタンの軍隊の兵士が示される。

⁵⁵ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma* (「トルコにおける近代化」), Yapı Kredi Yayınları, İstanbul, 2003、24～34 頁。

民意識を持つ」知識人の発生やその中における士官の役割を再確認する必要があると思われる。

オスマン・トルコ社会における知識階級の成立は、西洋的近代化の方面での改革の試みの過程の中で始まる。オスマン帝国の西洋化改革の「試み」はフランス文化に対して関心を持つスルタン・セリム三世(在位 1789~1807 年)の時代に軍事・軍隊の範囲に限って始まったが、この改革は失敗し、腐敗しはじめた当時の軍隊「イエニ・チェリ軍」の反乱によってスルタンは殺害される。しかし、セリム三世の息子マフムト二世(在位 1808~1839 年)、父の改革の試みを慎重に実施し、軍事だけに限らず広範囲にわたる西洋化改革、特に「教育」において改革を推進し、知識階級の発生を促した。

マフムト二世はイエニ・チェリ軍を廃止し、西洋風の軍隊を確立した。そしてこの全く新しい軍隊の要請にこたえて三つの学校(大学)、すなわち工学部、医学部、士官学校を開校したのである。

士官学校の確立はオスマン帝国やトルコ共和国の近代化過程において最も重要な意義を持つ。トルコの 19 世紀以降の歴史の展開を把握する上で、士官学校の教育が及ぼした軍事的、思考的な影響、政権に対する態度、そして卒業生が軍隊や政界で獲得した地位などを考慮する必要がある。士官学校は、マフムト二世の西洋化の改革以後の新政権による国家と社会をつなぐ架け橋となる一方、国家と社会の間における絆が断絶しかけた際には、「国民の統一」の成立のために大事な役割を果たしたのである。他方、オスマン帝国国家やそのスルタンに対する忠義の絆は、この学校で育った学生の一人であるムスタファ・ケマルによって断たれた。そして士官学校と軍隊は、トルコ国民の統一と独立のために、自ら国家との絆を断った最初の機関である⁵⁶。

1839 年のタンズィーマトの改革⁵⁷以後、ヨーロッパの列強はトルコ国内のキリスト教徒少数民の権利保護を目指して圧力をかけ、トルコは 1856 年に「改革の布告」⁵⁸を余儀なくされた。これに対して士官たちのグループや官僚の一部はクーデターを企てるが、失敗に終わる。この事件は極めて機密的に進められ、その資料は余りにも少ないので、クーデターを計画したグループのイデオロギーや目的に関して様々

⁵⁶ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 194 頁。

⁵⁷ トルコ語では Tanzimat。

⁵⁸ トルコ語では Islahat Fermanı。

な推測があり、一致した見解は今のところ存在しない。

その主張の一つは、これを革命主義的な試みであるとし、「タンズィーマトの改革」よりも一層進んだ西欧風のリベラルな民衆を代表する権利のある議院制度の確立を目指したとしている。またこの事件を復古主義的な試みと捉え、タンズィーマトの改革に替わってイスラム原理主義／復古主義的な政権の確立を目指したものであったとするアプローチもある。第一の解釈によると、クリミア戦（1855年）を通じて仏軍や英軍の将校と交流したトルコの将校にはリベラルな傾向が見られた。他方このクーデターの首謀者の一人と目されるヒュセイン・ダイム・パシャは、1848年のハンガリーの革命鎮圧後にトルコに亡命したハンガリーの革命家に影響を受けたとも言われる。トルコに亡命したハンガリーやポーランドの革命家の中にはオスマン帝国軍に入隊し、司令官にまでなった者もいたのである。1859年に発生したこの事件は、軍隊が政治において権力を掌握しつつあることを示すものである。⁵⁹

そして1908年以降には、知識階級には主に二つのタイプが見られた。トルコの啓蒙化過程においての重要な役割を果たした「教師」と、「士官」である。アブデュルハミトのパラノイア的なあらゆる監視活動やスパイなどの活動にも関わらず、革命家のタイプはこの階級から出た。当時士官たちはドイツ風の軍事教育を受けるだけでなく、国状や世界の動向を把握するような知識を獲得していった。トルコの立憲君主時代の知識階級のほぼ半数は士官たちで占められていた。もう一つの知識階級は医者であった。当時の伝統的なイスラム教の教授による初等学校教育と西洋風の科学的中等学校教育の著しい相違は、学生に非常な混乱をもたらす結果となった。大学に到るとこの混乱や衝突は更に激しくなり、政権に対する最初の反発はこれらの医学大学と士官学校によるものであった。最初の革命主義的な集団化も、最初の革命主義的な政党もこの環境から成立したのである。1889年以降の時期にはアブデュルハミト政権に対抗する三つの集団が成立した。一つ目は医学部・士官学校、二つ目は軍人でありながら軍隊以外の環境をも含む秘密組織、そして三つ目はパリ、ジュネーヴやカイロのような都市における知識人の集団である。政権は彼らをスパイ活動によって監視したが、それは逆にこれらの集団のコミュニケーション、相互連帯を強めたのである。そして（士官階級による）政党も、アブデュルハ

⁵⁹ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 271~275 頁。

ベルケスによればこのグループには1848~1868年のヨーロッパの革命、リベラール、議院制度を求めるグループとは一致せぬものであり、この試みは共和国建設よりは当時の政権の改善を目的とした。

ミト政権の軍隊に対する様々な抑圧的政策が裏目に出た形で発生したのである。アブデュルハミトはバルカン半島に発生したゲリラ活動を鎮圧するために士官学校に育った参謀たちをマケドニアに転任させた。マケドニア地方はヨーロッパ諸国の圧迫下であり、ロシア、イギリス、オーストリアやフランスの部隊も同じゲリラ鎮圧にあたってこの地域に駐屯していた。そのためもはやアブデュルハミト政権はこの地域をコントロールできなくなった。オスマン帝国政権はマケドニアの問題をブルガリア・ギリシャ・セルビア系民族集団の山賊活動と捉えていたが、この地域に派遣された士官たちはこの定義は間違っていることを知ったのである。これらは民族主義の色合いはない（トルコ語では I.M.D.O. という）「マケドニア内部革命集団」といったロシアの「汎スラヴ主義」に対して戦うナロドニック派に由来する無宗教の社会主義的な革命ゲリラ集団だったのである。オスマン・トルコの士官たちもこの影響を受け、徐々に自らゲリラ集団を組織するようになっていった。そしてサロニカ⁶⁰の公民的な官僚、公務員などによって作られた地下組織とこれらの士官によるゲリラ的集団が団結する。総合中心部がサロニカに成立したこの反政府集団は「団結と向上」⁶¹と称されるのであった。

「団結と向上」は第二次立憲君主政権の確立に直接関与し、オスマン帝国末期のアブデュルハミトによる独裁政権の終焉を見た。1908年7月24日、アブデュルハミトはマケドニア地方に派遣され山中でゲリラ化した士官の集団から「最後通牒」^{つうちょう}の電報を受ける。それは彼にカヌーニ・エサーシ⁶²という憲法を再び実施することを要求するものだった。彼はこの要求を即座に認めた。これはオスマン帝国内でもヨーロッパでも意外な決断として驚きとともに歓迎された。「向上と団結」という進歩主義的知識人・士官のグループによるこの成功は、オスマン帝国社会において非常な歓喜を巻き起こした。しかし当時のオスマン帝国社会では、国の過半数を占めるトルコの村人たちはこの政治的な動きに関わりを持つことはなかった。そして「向上と団結」は組織としてのイデオロギーも社会的基盤も依然不明瞭であった。当初この運動に身を投じたムスタファ・ケマルは、回想記の中で、組織のその欠陥に気がついたことを述べている。

⁶⁰ （トルコ語では Selanik）現在のギリシア北部、マケドニア地方の市・港町。ムスタファ・ケマル・アタテュルクの出身地。

⁶¹ トルコ語では İttihat ve Terakki。

⁶² トルコ語では Kanun-i Esasi。

1908年の事件がもたらした重要な結果の一つは、この組織が一年後に半正式な政党になったことによって、オスマン帝国において初めて「政党」が成立したことであった。1908年の「革命」によって伝統的な「専制的」政権は衰微し、「団結と向上」の政治組織化によって、皇帝以外の階級の人間も積極的に政治に参加できる権利を獲得したのである。1909年に政党の形式を取った「団結と向上」は、同年に行われた選挙に勝利し、立憲君主政権の形での政府が組織されることになったのである。この運動は当時までのあらゆる宗教的傾向を持つ運動とは異なり、オスマン帝国において最初の純粋に政治的な運動であった。「革命」のもたらした第二の結果は、オスマン帝国において初めて「トルコ人としての国民意識」の兆候が見られるようになることである。また第三には、従来の軍隊の高位軍人の間に、スルタンに対する忠誠と共に国民に対する忠誠という二重性が現れてきたことが挙げられる。スルタンに対する忠誠が薄れる一方で、士官たちは国民に対する忠誠を発見していたのである。ムスタファ・ケマルはその傾向の最もラジカルな例であった。⁶³

1. 2. 1. b. 「よそ者」に登場するチャナッカレ戦争とアヒメト・ジェラル

こうした事情を踏まえると、予備役の将校でありながらも高位士官たちの環境に育った主人公アヒメト・ジェラル大尉には、上述の政治的な影がはっきりと読み取れるのである。彼がいつ入隊したのかは推測し難いが、第一世界大戦において 1915 年のチャナッカレ戦で戦ったということは、彼の政治的、社会的な立場、態度について十分な情報を与えてくれる。

チャナッカレ戦は、第一次世界大戦中イギリス軍とオスマン帝国の間で戦われた最も激しい戦闘であり、それは予想に反してトルコの勝利に帰した。ロシアはアナトリア東方への攻撃計画を簡素化するために、イギリスにオスマン帝国軍の食い止めを依頼した。イギリスは、オスマン帝国にとって地政学的に最も重要なマルマラ海とエーゲ海を結ぶダーダネルス海峡と、マルマラ海と黒海を結ぶボスポラス海峡の欧亜両大陸間の二つ海峡を占領し、オスマン帝国軍の無力化を図った。両国軍の最初の海戦で敗退した英軍は、次にニュージーランドやオーストラリアの兵士からなる陸軍をもって陸上戦を試みたが、またしてもオスマン帝国軍の決定的な勝利で終わった。この戦争でイギリス軍からは 20 万人以上、オスマン帝国軍からは約 12 万人

⁶³ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 389-393 および 401~405 頁.

の死傷者が出た。この敗退のせいで後に首相となるW. チャーチルは、上院議員の地位を剥奪されたのであった。

右腕を切断したアヒメト・ジェラルもこの 12 万人の死傷者の一人であったわけだ。この戦闘では、オスマン帝国軍の近代化に尽力したドイツ人士官フォン・ザンダーズと、第二次の戦闘である陸上戦でニュージーランドやオーストラリア兵からなる敵部隊に対して軍隊を指揮したムスタファ・ケマルが主要な司令官であった。小説においては大尉のアヒメト・ジェラルとムスタファ・ケマル司令官は面識がないことがわかるが、両者ともオスマン帝国に対する忠誠を放棄し、代わって「国民」に対する忠誠を自らのイデオロギーの基盤にしたという重要な点を共有している。

1. 2. 2. 「トルコ人としての国民意識」の萌芽と「士官」の役割

従って、「よそ者」においてアヒメト・ジェラルは「トルコ人としての」国民意識を持つ知識人として登場する。「トルコ人としての」国民意識を持つということは、当時にあっては依然極めて反体制的で、オスマン帝国の伝統に不適切なアイデンティティであった。オスマン帝国はトルコ民族によって創立したが、その庶民は全体的にオスマン人として捉えられていた。オスマン帝国庶民をカテゴライズする場合は主にイスラム教徒と非イスラム教徒に二分していた。すなわち国家は、国の大多数を占めるトルコ民族に、国民的なアイデンティティよりはむしろ宗教的なアイデンティティを認めていたのである。オスマン帝国の近代化がなかなか捗らなかった根本的な原因は、このような独特な機構にあり、特にフランスにおける 1789 年の革命の影響で、帝国内の民族主義的な独立運動に対して効果的な抑え込み政策を実施できず、自国民を定義できないという状況を生んだ。

オスマン帝国の衰退に伴い、フランスやイギリス、ロシアなど、特権⁶⁴を与えられていたヨーロッパ諸国の圧力により、オスマン帝国内のキリスト教徒には様々な特権が与えられていた。同様にヨーロッパ諸国の圧力による 1856 年の「改革の布告」の結果、帝国のキリスト教徒の間に国民化と政教分離の運動が見られるようになった。またオスマン帝国はそれらヨーロッパ諸国への依存度が高まり、結果ヨーロッパとの貿易などによって帝国内のギリシャ人、アルメニア人のマイノリティがブル

⁶⁴ トルコ語では *Kapitülasyon*。語源はフランス語の *Capitulation*。

ジョワ階級を形成していった。一方イスラム教徒⁶⁵・トルコの民衆の間からはブルジョワ階級は形成されなかった。政府に対して民衆を代表し、彼らの仲介役となるブルジョワ階級が成立しないことは、トルコ社会、特に農村・「田舎」の退廃を招き、国民的な共同体の成立が阻まれることにつながった。こうしてオスマン帝国において1839年と1860年に実施された西洋化の改革にも関わらず、国家の政治、経済、文化的な基盤となるべき国民が成立しなかったのである。近代化を目指す一方で、オスマン帝国は衰退の一途を辿った。「団結と向上」運動は国民意識の発芽を促したが、トルコ国民主義はイデオロギーに到達せず、帝国内の一民族としてのトルコ人の存在が更に明らかになったのである。「団結と向上」は、トルコ人以外の民衆からの支持を得ることはできなかったにもかかわらず、「帝国民の共同体」という架空の実態を信じたのであった。

1908年の革命に端を発したトルコ人ナショナリストのグループは、1913年以降のバルカン戦争の過程において、「トルコ政府」および「トルコ元首」という用語を用いるようになった。従って具体的な形での「トルコ人としての国民意識」の発生は1908年の革命を以って実現し、1912~13年のバルカン戦争以後に明確化した。しかし一貫した「トルコ人としての国民意識」の確立は共和国創立前後まで待たなければならない。

1. 2. 3. 「よそ者」において、「国民意識形成」の先駆者としての士官と国民意識を持たない村人の対立

「よそ者」の士官という作中人物は、進歩的なイメージを持っている。士官たちはただ知識人としてのみならず、アヒメト・ジェラルと同じイデオロギーを持つ。つまりトルコ国民意識と強い連帯感を持つのである。例えば、94頁に、士官たちは下記のように描かれている。

たまに兵士や士官の派遣隊が私の住む村を通過することがある。彼らの一部を村でごちそうしたり、泊めたりすることがある。

これらの士官たちは、もはや私が軍人であった第一次世界大戦の頃の士官とは異質だ。彼らには昔の雰囲気は全く感じられない。今時の士官は、国の軍隊の平凡な軍人というより、まるで何かの宗派の先駆者のようだ。第一次大戦の時の士官はよく文句言ったり、国の政策を批判したりして、疲

⁶⁵ オスマン帝国のイスラム教徒はトルコ人だけでなく、アラブ人、クルド人、アルバニア人などというマイノリティも存在した。

れて諦めたように見えたものだ。しかし今は、士官の見解は統一され、議論も認めなくなってきたらしい。彼らは「必勝確実」などと言っている。（「よそ者」、94）

ここで士官たちは国民意識を共有して敵軍に立ち向かうという決意を持っている。その上、この士官たちの叙述は様々な比較によって強調される。一つは時間的な比較である。すなわち、数年前にオスマン帝国のスルタンに従属し、忠誠心を持って戦った士官たちと、現在「トルコ国民」のために戦っている士官たちである。この比較では、士官という地位は同じであるが、時間の経過によって守るべき、あるいは忠誠を誓うべき対象が変化している。もう一方の比較は、平民（民衆）であり、徴兵される兵士として登場する村人たちと、士官階級の比較である。アヒメト・ジェラルの描写によって戦争を支援する村人も、実際に戦場に出る兵士も皆、村人（民衆）は幽霊になぞらえ否定的に生成される。国民として戦闘に参加する兵士も、士官と村人という二つの範疇に区別されているのだ。

この独立戦争において、士官たちが指揮するのは、この血の気の引いた、骨と皮の、目の光の失せた幽霊どもなのだ。（「よそ者」、94）

しかしこれは村人を軽蔑するというよりは、むしろ士官たちの優越を誇示するために用いられる比較であろう。

他の箇所には、知識人と政治的指導者の代表としての士官対村人の対立が見てとれる。これはある砲兵隊の士官たちである。そして引退した大尉であるアヒメト・ジェラルは、ここで将校としてのアイデンティティを以って発言している。会話の中で、少佐が村人はなぜ姿を見せないのか理由を問うと、砲兵隊の若い大尉は次のように答える。

「居るはずですけど、どこかに隠れているんでしょうよ。こいつらは「チャルックを履いた軍幹部」と呼ばれているんですよ。」

少佐は大きい体を揺らして大笑いし、「いずれ近いうち、ここに最後の審判の日が訪れた時にゃ、本当にチャルックを履いた軍幹部かどうかははっきりするだろうよ。」と言った。（「よそ者」、150）

これは、スルタンと絆を断った庶民のために戦う士官たちが国民を自分のイデオロギーの基盤にするにもかかわらず、面倒に巻き込まれるのを嫌って彼らを回避しようとする村人に対する怒りである。村人と士官の一般的な対立は、アヒメト・ジ

ェラルの上に繰り返されており、彼の村人に対するアプローチやその位置づけにその対立構造が現れており、アヒメト・ジェラルは進歩的な士官と意見が一致していることが伺える。アヒメト・ジェラルは自分を士官階級と同一視する一方、身体的な不自由のためにこの救国戦争に献身できないことで自責の念に駆られ、自分を人間以下の動物になぞらえさせる。彼が村の中で孤立していることを士官たちが知ったなら彼らと行動を共にするように誘ってくれるだろうが、彼らの足手纏いになるだろうことを懸念し、その際に自らを「不自由な獣」そして犬と例えている。

もし私の秘密を知ったら、私を無理にでも連れて行こうとしたに違いない。私を戦線後方の一隅に、不自由な獣のごとく隠して守ってくれたと思う。(中略) 砂漠に居た時、尾を切られた連隊に犬がまとわりついていて。我々がどこへ移動しても付きまとい、追い払ってもどこ吹く風といった調子で、一瞬たりとも離れない。いつも私たちの足元を徘徊し、後ろを走ったり、陣地の中に下りたりして、夜になると、誰かのテントの前で見張りをしていた。この犬を憐れに思い、射殺することが出来なかった。(「よそ者」、152)

ここで自分を殺されずに生きながら同情される動物に例えることによって、彼が身体障害に罪悪感を持つほど国への想いに溢れていること、そして彼の高い国民意識が強調されている。評論に指摘されるように、小説的写実性よりは悲劇的な要素を強く打ち出していると言えよう。そしてまた、士官たちの肯定的、好意的な描写の後に、自分はこれほど国民に対する愛情や責任感に溢れているのに、その「国民」である村人は彼の遺体さえも敬わないであろうと推測している。

なぜならこの村人どもは私を吊ってくれるものか、川に投げ捨て、鳥や野良犬の群の餌とし、遺骨をも牛糞の燃料で焚きつけた火にくべるだろう。(「よそ者」、153)

この直後に、十数年にわたって兵役に就いて各地に派遣され、捕虜にもなった経験を持ち、自分の故郷付近を通過していることさえ気づかなかった兵士が登場する。部分的に記憶を失い、妻も他の男と再婚してしまい、娘には忘れられた兵士を登場させることで、オスマン帝国の徴兵制度の厳しさを物語っている。この曹長が自分の指揮すべき部隊の後尾について村に入ってきた場面は、次の通りである。

この男は、まるで迷子のように道の真ん中で立ち止まったり、周囲を見回したり、そしてまた二、三歩歩くという具合だ。

曹長であることが分かったこの兵士は、自分の位にしてはまさに奇妙な様相である。酔っ払いかと思うほど道を蛇行したりしている。ほら、また立ち止まった。また左右を見回している。止まった所でメヴレヴィー派のダルヴィーシュのようにくるくると回っている。これがベキル軍曹の癪に障った。（「よそ者」、155）

シェリフ曹長というこの「男」がベキル軍曹の旧友であることは偶然ではない。二人とも腐敗したオスマン帝国政権の国民意識を欠く古いタイプの兵士である。他方、彼らはただオスマン帝国を象徴する兵士として登場するばかりでなく、小説における上位の士官階級を肯定的に映し出すための対照として扱われる。シェリフ曹長とベキル軍曹が友人であることは小説において意図された意味を持つと同様に、シェリフ曹長がエミネの父親であることにも意図が見られる。アヒメト・ジェラルは、父に会いに来たエミネについて次のように考察する。

もしエミネに聞くものなら...（中略）なんで私に対してだけ、あのようにつり立てられる野生動物のようにびくびくした態度になるのだろう。（「よそ者」、160）

この兵士がエミネの父であることは、彼の村人としての身分を強調する役割を果たす。そして彼の登場のタイミングは、アヒメト・ジェラルがベキル軍曹の妻を通してエミネにプロポーズするものの「よそ者」のため断られた後のことである。アヒメト・ジェラルの知識人／士官というアイデンティティは、村人を無知な群衆として対象化する。ストーリー的な時間軸では物語の最後となるプロローグにおいて、被害調査委員が村人たちが手帳の持ち主に対して示す無関心に憤る場面の対話を引こう。

「どうということなんだ。同じ村にずっと暮らしていた人の行き先や人柄など当然知っているはずだろう」

村人は感情を害したようにぷいと遠ざかった。若いのか年寄りなのかわからない、背の低い、やせた一人が振り向いて、

「ああ、あいつも君らのような妙なよそ者だったな、」と言った。（「よそ者」、32）

こうして「よそ者」には知識階級と村人／庶民の衝突が投影される一方、特にアヒメト・ジェラルと士官のグループに代表される知識階級は、進歩的であり、国民意識を持つという肯定的な特質が強調され、対して村人は国家の変革に暗いとして

否定的に扱われる。それは村人を常に蔑視し、あら捜しをするというのではなく、むしろ彼らの無知や無知に由来する消極性を強調することで対象化を図っているであろう。

＊

次の章では、農民としての村人と士官の間における隔絶の問題を、村人のイスラム原理主義イデオロギーに帰して論じる『『よそ者』における技法とイデオロギー』を取り上げ、村人の態度における政治色の有無を検討する。

I. 3. 「よそ者」におけるイデオロギーの問題

I. 3. 1. 村人のイデオロギー的立場

モランによれば「よそ者」に描かれる「農村像」は現実的なものでなく、作家の政治的な態度に影響された主観的なものである。カラオスマノールは小説家の他に、共和国創立後の新政府の主要な官僚の一人であり、トルコの文化的、産業的発展を目指した改革を熱心に追及する立場にあった。だが国民の大半を占める農民はこの進歩的な改革に対して反感を表した。共和国創立から「よそ者」の発表に至るほぼ10年の間に、改革の効果は現れなかったわけである。官僚的な意識を持つカラオスマノールはこの結果を、庶民のイスラム原理主義に固執し復古主義的な性格に原因があると見た。彼によれば、農民はアタテュルクの改革を受け入れず、それに対して国家は救国戦争の意義を把握した改革主義の官僚グループによって改革を断行すべきとしているということである。そして、カラオスマノールが主催する

「Kadro」という機関誌も全般にこれと同様の立場を取っている。モランは「よそ者」において村人が否定的に扱われる理由を次のように解釈している。すなわち、

専制的な政権によって改革の実践が続けられ、深刻化されそれによって新しい国民が作られるのである。ヤークブ・カドリ・カラオスマノールが「よそ者」において指摘するように、新しい国民を、『サーリー・アーガー、ゼイネップ婆さん、イスマイル、スレイマンなどの間に、最初から構築しなければならない。』、そしてその構築が知識人の官僚に任されるなら、この政治階級は使う材料を現実的に認識すべきのである。⁶⁶

⁶⁶ Moran, Berna, “Yaban’da Teknik ve İdeoloji”, *Türk Edebiyatına Eleştirel Bir Bakış I*, (「トルコ文学への批評的な眼差し(1)」) İletişim Yayınları, İstanbul, 2001, 218 頁。

ベルナー・モランは、「よそ者」における農村や村人像が、現実と一致するものではなく、カラオスマノールの個人的なイデオロギーを投影するために創り上げられたものであると論じる。モランは小説の村人の国民意識の欠如や救国活動に対する無関心が非現実的であると言う。実はむしろ共和国創立後の村人の態度が保守的なのであり、そういう意味で作家は自分のイデオロギーを正当化するために、執筆時の農民の有り様と救国戦争時の有り様とを入れ替えているのだと言う。他方、モランは次のように述べる。

「よそ者」の農村は実際のアナトリアを表象するものではない。むしろ 1930 年代の知識人の官僚⁶⁷の頭にあったアナトリアを表象するものである。⁶⁸

従って、この小説に登場する士官たちやアヒメト・ジェラルによって構成される知識階級は、モランが指摘する「改革主義の官僚グループ」を象徴すると言えるのではないだろうか。他方、モランの論文のタイトルからもわかるように、要をなすのは小説のイデオロギーという問題である。彼によれば、「よそ者」には二つの対立するイデオロギーが存在すると言う。

知識人と村人の隔絶」がこの作品の論点であると論じる評論家等は、この隔絶をオスマン帝国の宮廷と庶民の文化という、二つの異なる文化⁶⁹の成立に由来するものと位置づける。しかし「よそ者」において指摘される対立はむしろ国を救うために戦う進歩的な知識人と救国戦争を信じない（イスラム）復古主義的な立場に立脚する村人たちの間の隔絶である。⁷⁰

1. 3. 2. 「村人」とアヒメト・ジェラルのイデオロギー上の関わり方、キリスト教的な記号の正当性

ベルナー・モランは、カラオスマノールの「よそ者」や、「ソドムとゴモラ」のような他の作品にも、キリスト教の聖書からの影響が色濃く見られることに触れている。イエスがユダヤ教徒の群集に対してキリスト教の普及に努めたことを比喻に、救国戦争において国民を救う任務に従事するムスタファ・ケマルとその支持者を描

⁶⁷ カラオスマノールを指す。

⁶⁸ Moran, Berna, *Türk Edebiyatına Eleştirel Bir Bakış I*, 218 頁。

⁶⁹ 宮廷環境の文化と田舎（アナトリア）の庶民文化。

⁷⁰ Moran, Berna, *Türk Edebiyatına Eleştirel Bir Bakış I*, 205 頁。

いていると述べる。ムスタファ・ケマルとイエスの比喩関係は、「羊飼い」というイメージを通してなされている。ルカの福音書やヨハネの福音書から引用しつつ、「羊飼い」が多くの西洋文芸作品においてイエスの象徴として登場することを説明する。「よそ者」にも同じ記号が用いられているわけである。

羊飼いはどこにいるのだろうか。羊飼いはアンカラの険しい岩の上に立って声を上げ、群を集めようとする。あなたに挨拶を送ろう、神聖なる羊飼いよ。あなたの神聖なる戦いに祝福あれ。しかしあなたがいつか自分の群を集めた時、私はその中に入ることができるのだろうか。この村はそこにあるのだろうか。（「よそ者」、128）⁷¹

モランによると、ケマリストの士官たちも、ムスタファ・ケマルに対して、イエスに対する使徒の役割を果たしている。

国の軍隊の平凡な軍人というより、まるで何かの宗派の先駆者のようだ。（「よそ者」、94）

イエスが彼を磔刑に処したローマ人を許したように、アヒメト・ジェラルは彼を孤立させた村人を許すのだということが暗示される。

アヒメト・ジェラル自身もケマリストではないだろうか。彼を信じない人々も、イエスを信じない人びとがイエスを殺したのと同様に集団暴行によって（アヒメト・ジェラルを）殺したかったのではないか。そしてイエスが自分を十字架に張り付けにした人々を許したように、（中略）アヒメト・ジェラルも敵軍が村を焼き討ちしたり、残虐行為を行う際、『あの最後の審判の日』において許したという。「一人たりとも自分が何をしているのかわかっていないのだから。」⁷²

ベルナー・モランは、キリスト教に基づいて解釈している。しかしカラオスマノールはその 85 年の生涯の三分の一以上をオスマン帝国政権下に過ごしたことを無視することはできない。その意味で、「よそ者」をキリスト教的視点で見るのではなく、オスマン帝国国家の伝統的な文化を考慮すれば、羊飼いが別の特別なコノテーションを持つことがわかる。すなわち、オスマン帝国の最後のスルタンであるメヒメト四世ワヒデッティン・ハン（在位 1918~22 年）は、1922 年 10 月にアンカラの政府でムスタファ・ケマルが権力を拡大しつつある中、「一つの民衆がある、羊の群、そこ

⁷¹ 同前、Berna Moran の引用は 207 頁。

⁷² 同前、207~208 頁。

には羊飼いがいる。それは私だ」⁷³と言明し、帝国における最高権力者であることを誇示した。羊飼いの比喻は、スルタンの文学的な想像力の賜ではない。すでに指摘したように、オスマン帝国の伝統的な国家においては、「神は社会の全てを分別して、各々の区分ごとに地位を与えた。この社会は「群」と称され、神が選任した代理人あるいは神の「影」が、その群の羊飼いとなる」⁷⁴のである。

ベルナー・モランが主張するように、村人からなる庶民を、進歩的な知識人である官僚グループによって専制的に治めるべきというのが「よそ者」のイデオロギーであるなら、群衆を専制的なやり方とは全く違う「慈悲」や「愛」といった方法によって宗教に誘うイエスよりは、むしろ庶民を無知で消極的な群集つまり「群」と想定するオスマン帝国に伝統的な観点の方が、カラオスマノールの論に適切ではないだろうか。この観点をもってすれば（ベルナー・モランの論にとっては）カラオスマノールのイデオロギーは、自分が反対するオスマン帝国の政治の方法と非常な類似性を示していることは見落とせないのである。

またオスマン帝国の国家の歴史的構造では、群と定義される「田舎」の民衆が国民意識を共有することは困難であった。これは西洋的な意味での封建階級の成立条件を欠如したためというのは先述の通りである。それにも関わらずベルナー・モランは、「よそ者」の村人にイデオロギーがあり、それは救国戦争に反対するイスラム復古主義であると主張する。しかし語りの考察からは、「よそ者」の村人には救国戦争に反対する一貫したイデオロギー的な態度を示す証拠は見つからない。

＊

ベルナー・モランはアヒメト・ジェラルをイエスに、村人をイエスを磔にしたローマ人に例え、次のように述べている。

アヒメト・ジェラル自身もケマリストである。イエスを信仰しない人びとが彼を磔刑に処したように、アヒメト・ジェラルを信じない人びとは彼を私刑により殺害したかったのではないか。⁷⁵

これは小説において頻繁に繰り返されるテーマである。アヒメト・ジェラルは村人に攻撃されていると何度も主張する。これと類似するような指摘はヴェジュデ

⁷³ Berkes, Niyazi, *Türkiye’de Çağdalaşma*, 504 頁。

⁷⁴ 同前、31 頁。下線は引用者による。

⁷⁵ Moran, Berna, *Türk Edebiyatına Eleştirel Bir Bakış I*, 208 頁。

イ・ビュリュンの評論にも「自分に襲い掛かる、殺そうとする人物に対して片腕で平手を打つシーンには、トルコの立ち直りを象徴的に見出している」⁷⁶というように評されている。この主張は、アヒメト・ジェラルの主張をそのまま信じ、彼と同一化し、彼の視点で語りを見る場合正しいが、先述の通り、語りは彼に対する村人の攻撃を必ずしも示唆していない。例えば、アヒメト・ジェラルによれば、彼がシャイフと議論したせいでシャイフが村の訪問を中止することになって以来、村人は彼に対して敵意を抱くようである。

シャイフは村を去るには去ったが、村に自分の毒を残して行った。しばらくは彼の口臭が漂っているようだった。(略) 村人はもう私を恨んだり、私に腹を立てたりすることがないようだ。私を永遠の断罪を受けた者が死刑囚のように見下して、ただ憐憫するだけである。(略) シャイフの天罰を受けるであろうこの惨めな男はこれからどうなるのかしら。(「よそ者」、66)

ここには村人の主人公に対する不満が明らかだが、彼が語るような敵意は、先入観による彼の過敏な思い込みではないだろうか。先に触れた、アヒメト・ジェラルがサーリー・アーガーを殴るシーンでは、村人はこれから私刑を加えようとするかのように彼を取り囲む。しかし彼らには、サーリー・アーガーをイデオロギー的な動機で援護しようという気配も、アヒメト・ジェラルを寄ってたかって殺そうとする気配も見られない。

そこへベキル軍曹が近寄ってきて、

「先生、やめてくださいよ。こんな奴と関わる価値もないでしょう。あなたらしくもない」と言った。(「よそ者」、187)

もしアヒメト・ジェラルの言うように彼らが本当に「敵」であるなら、ベキル軍曹はなぜ自分の村仲間であるはずのサーリー・アーガーを軽蔑しているのか、しかも主人公を説得して喧嘩の仲裁をする必要があるのか。アヒメト・ジェラルがふとサーリー・アーガーを殴る手を止め、イスマイルやその家族の目の前でエミネと言葉を交わした際、「この瞬間、村の全員が私にとっては敵の包囲のようなものである」と言っている。イスマイルの妻に親しげに話しかけるという「無作法」に出たにもかかわらず、村人は彼に改めて憤慨する様子さえ見せていない。

⁷⁶ 本論文 13 頁を参照。

特にサーリー・アーガーを殴った日を境に、私に対する恨みや敵意が一層強くなった中、なぜ今まで集団で暴行^{リンチ}されていないのか、不思議なぐらいだ。それまで彼らに襲われなかったのは、私が武器を持っていることが知られていたからだろう。敵軍の兵士たちが私の武器を奪った日から、私は彼らの目の中で、全ての力や価値を失ったのである。(中略) これは彼ら一人一人の目に読み取れる。

(中略)「小人」のイスマイル、バセドー氏のイスマイルまで、時には私の前に立ちはだかつて、挑戦的な態度を取るのには驚いた。(中略) 災いさえ、私たちを団結させることができなかったばかりか、私と彼らの間の溝を一層深めたのである。ベキル軍曹だけは、利害関係のために私に対して忠実だった。また、エメティ婆さんだけは、習慣として私の面倒を見てくれるほどには親切であった。そして小さいハサンだけは、無意識の直感で、私と友情を結んだ。私の話し相手になってくれたのだ。

(「よそ者」、191)

上記で、アヒメト・ジェラルは相変わらず、なぜそれまで村人に襲われなかったのか考えている。その理由として、村人が彼の武器を恐れていたのだと結論している。しかしそれは彼のこじ付けに過ぎない。なぜなら彼の武器がギリシャ軍に没収された後にも、彼に対して身体的な危害は加えられていないからだ。従って、彼の身体障害、常に彼を孤立させるよそよそしく、敵軍に対して無関心な村人の態度、敵軍による占領、戦争という厳しい特異な条件の下で、アヒメト・ジェラルはパラノイアに陥っている可能性が高い。このことについて、ニハド・サーミ・バナルルは「村人をこんなに卑劣と捉え、こんなに恨む者は(中略) ある種の精神病を患った、神経の弱い、優柔不断な、未熟なインテリである」⁷⁷と指摘する。

アヒメト・ジェラルに対して、村人の集団による暴行、私刑といった攻撃が企てられたことはない。かえって攻撃的な態度を取るのは彼自身である。

まるで墜落するのが彼らの兄弟のように身近なものであるかのように・・・私は激怒し、怒りで落ち着かなくなる。もしちゃんとした銃を持っていたなら、このでたらめな「プロペラ野郎ども」に向けただろうが、私は持っているのは二連銃一丁とブラウニングの短銃ぐらいだ。(「よそ者」、170)

墜落しそうなギリシャ空軍の戦闘機に興奮する村人に対して、アヒメト・ジェラルの態度には彼の攻撃性が見える。初めて飛行機を見た村人たちが素朴な驚きを表す一方で、主人公は自分の不安感から来るパラノイアのために、それを単純に受け取らず、イデオロギーを持ち出して、銃の力で村人を抑えようとする彼の攻撃的な

⁷⁷ Banarlı, Nihat, Sami, *Resimli Türk Edebiyatı Tarihi*, 395 頁。下線は引用者による。

傾向が伺える。

1. 3. 3. 「よそ者」の村人は復古主義というイデオロギーを持つのか？

しかも、「よそ者」の村人たちに見られる唯一の宗教的活動は、村を訪れるシャイフ・ユスフの説教を聴くことだけだ。これは宗教的活動と言うよりも、カリスマに対する迷信的な信仰である。また、シャイフは彼らに対して意識的にイデオロギーに基づいたプロパガンダを説くわけではない。彼はムスタファ・ケマルの活動に対して否定的な発言をするところがあるが、村人に政治的意識を目覚めさせるには到底到らない。彼はただただ、彼の説教が村人の経済的利益と一致する限りにおいて熱心に受け入れられているに過ぎない。村人の生活の中で、それ以外に政治色のない文化的活動と言え、イスラム教の教えにも関わりのないような、原始的な儀式程度に留まっている。他方、村の宗教権威者であるイマーム（そしてサーリー・アーガー）は、ギリシャ軍を導くという最も政治色の濃い行動をとることを語り手は指摘する。

サーリー・アーガーとイマームは十日目に村に戻ってきた。私は彼らに憎しみを抱く一方、彼らと話しをしないでいられなかった。心にある好奇心に屈し、この卑劣な二人のところに行ってしまった。しかし、二人とも口を利かない。サーリー・アーガーは提供した藁や大麦の代金を払ってもらえなかったし、イマームは 5 クルッシュ⁷⁸だか 10 クルッシュの心付けを貰えなかったことを悩んでいるらしい。（「よそ者」、185）

村人たちは戦闘機を初めて見て、感心して空を見上げる。1920 年代の条件を鑑^{かんが}みれば、これも反救国戦争の感情から出た行動ではなく、純粋な好奇心に過ぎない。そして村に駐屯するギリシャ軍の兵士に生活用品を与えたのは、ギリシャ軍に対する協力ではなく、彼らの言葉を信じて金銭が払われることを期待したからである。つまりその動機は経済的利益であった。無論、村人の国益に対する無関心は、自己の利益を優先し、四カ国によるトルコの一部占領を許したスルタンの無関心と根本では同種のものである。このことを考察するとき、村人の唯一の行動規範は、スルタンに対する曖昧な忠誠心であることを考慮すべきである。しかしこの小説において村人のスルタンに対する忠誠を示す述懐はない。また、先述の砲兵隊の士官

⁷⁸ Kuruş トルコの通貨単位。1/100 リラ。

たちとアヒメト・ジェラルの会話を引用する。少佐は、村人がギリシャ空軍のばら撒いたビラを信用している状況を冷静に解釈する。

ビラを手にとって、少佐はさっと目を通すと、何気ない顔つきで、

「でも、ここら辺りは今まで、敵軍の侵略を経験したことがないんです。それを考慮してやらなければ」と言った。少佐は続けた。「あなた方、ルメリアへ行って外国の軍隊を支えたり外国の支配下に入ることを支持するようなことをほのめかしてみなさいよ。そこの人たちは、あなた方を裏切り者とは言わないまでも、狂っていると思うはずですよ。でもこいつらは...」（「よそ者」、151）

ここで村人の国民意識の欠如や、外国軍による占領を経験していないことがその理由として挙げられている。オスマン帝国史において、村人は政治と縁がなく、イスラム復古主義的な態度で救国戦争に反対する態度を取った村が実際にあったとしても「よそ者」の村にはそのような意識的な態度は見られない。

サーリー・アーガーとアヒメト・ジェラルの間の対立も、イデオロギーの対立ではなく、サーリー・アーガーの利己的な経済的利益追求に始まったのである。後の条件やサーリー・アーガーの罵りの内容によって、イデオロギー的な色合いが伺えるようにもなるが、アーガーの態度には一貫した政治的態度はない。しかも、彼が略奪した土地は、アヒメト・ジェラルが借りたもので、本来はゼイネップ婆さんの所有地である。次のシーンは、アヒメト・ジェラルがギリシャ軍を先導したイマームとアーガーにギリシャ軍の連隊の様子を聞き出すところである。イマームが連隊に不安気な雰囲気が出ていることを伝えると、アーガーはそれを中断し、

「違うよ。あのトルコ語をしゃべる奴が俺にこう言ったよ、『だいたい二日以内にはアンカラに入るぞ』とね。」（「よそ者」、186）

それによってアヒメト・ジェラルと議論が始まり、喧嘩に発展する。しかし実はここでサーリー・アーガーの態度にも、彼を守ろうとする村人の態度にも、イデオロギーの闘争というところはない。村人は「（サーリー・アーガーの）襟を掴み上げ、木の枝にぶら下がった腐った果実のように地面に叩きつけ」、「それでも気が済まず、倒れた彼を蹴り上げる」アヒメト・ジェラルの激しい攻撃から隣人であるアーガーを守るだけである。アーガーのギリシャ軍への支援も政治的な動機でなく、先述の

ように他の村人と同様に最も多い生活品を売ったのでその代金を回収することを目指しているのである。従って彼とアヒメト・ジェラルの間の対立はアヒメト・ジェラルのケマリストとしてのアイデンティティに関しての対立ではない。

トルコ国民文学派の救国戦争に反対するイスラム復古主義というイデオロギーの問題を扱った二つの作品と比較すると、「よそ者」の村人は無邪気で消極的である。例えばハーリデ・エディプ・アドゥワルの「あの阿婆擦れを殺せ！」⁷⁹では、女性教師アリエは、イマームと町の成金の陰謀で町の人びとにリンチされる。他方、レシヤト・ヌーリ・ギュンテキンの「緑夜」⁸⁰では、更に複雑なイデオロギーに関する構造があり、元はメデレセの生徒であったシャーヒン校長は信仰を失い、町の進歩的な知識人と共に、町のイスラム復古主義グループに挑戦する。これらの小説はある

⁷⁹ *Vurun Kahpeye* (1926、「あの阿婆擦れを殺せ！」)

女子師範学校を卒業したアリエは、理想や愛国心に燃えて誰も行くことのないアナトリアの片田舎の町に教職につくためにやってきた。1919年、ギリシャ軍がイズミルを占領している。国の独立闘争のために武装集団を組織したトスンは、アリエが働く町に立ち寄り、彼女が滞在しているオメル氏の家に客として泊る。トスンは彼女に一目惚れし、彼女もトスンの勇敢さに惹かれ、二人は婚約する。独立闘争に反対する町のイマーム・ハジ・フェッター氏はアリエを狙っている町の成金のフセイン氏のために、周辺の町を占領したギリシャ軍の連隊を襲撃しようというトスンの計画を連帯の司令官ダミヤノスに密告し、敵軍に協力する。ダミヤノスは町を占領し、アリエに近づこうと、甘言や脅しで画策する。トスンや「国民の武力」を支持するオメルを二度にわたって逮捕し、アリエを手に入れるため取り引きしようとする。オメルはギリシャに追放され、ギリシャ軍は彼の土地の一部を略奪して、それをイマームにあてがう。一方、圧力や陰謀にも負けないアリエの強さに触れ、ダミヤノスは単なる肉体的欲望ではなく、彼女に恋愛感情を抱くようになる。ある日イマームはトスンがアリエの所にいと密告し、家はギリシャ軍に包囲される。トスンは「国民の武力」に敵の武器倉庫爆破を任命されていたが、包囲されてその場を動けなくなる。アリエは彼を救うため、指令本部に赴き、ダミヤノスの結婚の申し込みを受け入れるとうそをつき、引き換えに包囲を解かせる。トスンの武装集団は橋を爆破し、ギリシャ部隊を乱れさせる。アリエは自分を犠牲にしてダミヤノスと一夜を共にする。彼女は町の宗教原理主義者によってリンチを受ける。

国の独立の直後、「独立裁判」によってイマーム・ハジ・フェッターやフセインはアリエがリンチされた広場で絞首刑となる。町に松葉杖をついてやってきた人物がある。武器倉庫爆破で自らの半身の機能を失ったトスンである。彼は犠牲となって死んだ恋人アリエの墓参りをする。彼は教師だったアリエのように、この国の啓蒙のために戦う決意で歩き出す。

⁸⁰ *Yeşil Gece* (1928、「緑夜」)

この作品は、第二立憲君主政権(1908年)から共和国創立(1923年)後までを舞台とする。シャーヒンの父は彼をイスラム教のシンボルである緑色の旗の旗手にするために(イスラム教の支持者にするために)オスマン帝国のイスラム伝統校であるメドゥレセに通わせる。彼には才能や展望があると教師は気づき、彼をイスタンブールのメドゥレセに行かせ、彼は4年間教育を受ける。彼はイスラム教的世界観を創造するという理想を持って入学したが、結局失望し、信仰を完全に失って退学する。その後師範学校に入学し、卒業とともに教職に就き、イスラム原理主義者と戦うためにイズミル周辺の原理主義色の強い町の小学校で主任となる。権力を握る町のイスラム風の学校長などのイスラム原理主義者は、シャーヒンが町に近代的な学校をもう一つ作ろうとするのを妨害するが、彼を支持するエンジニアのネジップや警視の協力で学校は建設される。ギリシャ軍がイズミルに侵入し、トルコ軍の士官を手伝うシャーヒンはギリシャに追放される。シャーヒンが共和国創立の直後に町に戻ると、以前敵と内通していた原理主義者は皆、髭を剃って西洋風の帽子を被り、近代化と共和国の支持者になっている。シャーヒンは心外なことに敵軍の協力者であるとみなされ、町で孤立する。オスマン帝国のスルタンの時代に共和国時代の教師のような活動した彼は、現状に不満と失望を感じ、それを伝えるためにアンカラに行くことにする。

程度社会的階級が成立した町空間をトポスにし、従ってイデオロギー的な機構が形成した環境である。

下記の引用では、まるで「よそ者」前に書かれたこれら二つの小説の空間を表しているようである。

今はどうだ。アナトリア・・・敵軍に告げ口をするムフティ⁸¹、敵軍を導く村のアーガーや来る敵ごとに彼らと協力して自分の隣人の物品を略奪する町人、脱走兵を懷に隠す淫乱な女、梅毒で鼻が溶けたソフ⁸²ども、モスクの中庭で少年を追いかける男色のソフタ⁸³ども、これらはここから発生したのではないか。

ここでは口髭を鋏で切ったというだけで、知識や希望で一杯のトルコ人青年が石で頭を叩き割られた。敵軍と対決する我が国の尊い戦士たちが、自分たちの守るべき人々に裏切られ殺された。ここでは、国民のシンボル、わが国の独立の象徴⁸⁴は何度も妨げられ、彼が住む町の辺りは何度も反乱する者どもの武器で取り囲まれたのだ。ここでは、私は母国愛、国民愛に狂い、ここでは、戦争で障害を負ったベテラン、アヒメト・ジェラルは孤独である。（「よそ者」、129~130）

アヒメト・ジェラルは、髭を鋏で切るという行為が西洋的であるとされ、イスラム法によって処罰された例を挙げて、メデレセの進歩的な生徒たちが学校の復古主義的な権威者によって圧迫されていることを指し示して射るのだと考えられる。それはまるで戦後に書かれたような印象を与える。他方、救国戦争に従事する人びとに対するイスラム復古主義者による妨害は、ハーリデ・エディプの「あの阿婆擦れを殺せ！」における空間を連想するものである。その上メデレセに関する部分は、「緑夜」（1928年）が扱うテーマを髭髻^{ほうふつ}とさせる。つまり、「よそ者」に転移されるこの雰囲気は「よそ者」の空間ではなく、それ以前の作品のトポスであるアナトリアの一部の復古主義的な「田舎」町村のパノラマである。

先の引用で連想される「よそ者」前の小説には、イデオロギーの対立に発する具体的な衝突や殺戮が見られるが、これに対してアヒメト・ジェラルは自分を「孤独」と言い、精神的に追い詰められていることがわかる。そこには政治色は薄く、村人からの彼に対する身体的な攻撃は見られず、彼らの対立は心理的なものである。構造的に見ると、イスラム復古主義の妨害やギリシャ軍との協力を取り上げ「あの阿

⁸¹ Müftü（イスラム）法の解釈について意見を述べる資格を有する法学者。

⁸² 厳格な宗教家。

⁸³ メドレセというイスラム寺院の宗教活動に関係する人、特にイスラム神学研究の初心者)

⁸⁴ ムスタファ・ケマル・パシャのこと。

婆擦れを殺せ！」と、メデレセのあり様を描いた「緑夜」の二つの小説の空間が、「よそ者」において主人公の村に移植・転移され、まるでこの村も同様の反救国戦争の状態にあるように描写されている。しかし、アヒメト・ジェラルが自分をただ「孤独」と定義することによって、語りが作ろうとしている「イデオロギー的な攻撃的空間」は、語りの要である主人公自身によって否定されることになる。つまり、語りと主人公の間に矛盾が生じているのである。

従ってこれはアヒメト・ジェラルが自分自身の中に抱える矛盾に見える。結論から言えば、「よそ者」には、実は語り手が二人いるのである。第一の語り手は、日記の筆記者「私」／主人公のアヒメト・ジェラルであり、彼は小説のプロローグ以降を語り進める。そして第二の語り手は、この作品の元になった手記に基づいて、全体を物語る語り手である。「よそ者」の語りはこのように二重構造になっていることがわかる。第二の語り手はアヒメト・ジェラルの手記をそっくりそのまま写したわけではなく、第一の語り手の姿を借りて小説全体にわたって物語に干渉するような箇所が見受けられる。そう解釈すれば、アヒメト・ジェラルがこの手記を書いた時点では事実関係が不明な事柄を、彼が完璧に把握し、予言に近い予測という形で解説しているというような原因が明らかになるのである。しかし、第二の語り手の語りへの干渉は、先述の引用のように、歴史的にアヒメト・ジェラルがモノローグの形式での経験し得なかったことや、概観的な解説の箇所に限られている。例えば、宗教権威者やアーガーが敵のギリシャ軍に協力するくだりが手記に登場する以前に、彼はそのような行為（「よそ者」、186）を予言的に示唆するのである（敵軍に告げ口をするムフティ、敵軍を導く村のアーガー（「よそ者」、129）。このように、小説の全体を把握する第二の語り手は、共和国創立以降にアヒメト・ジェラルによる語りを再構築したことを示唆しているのである。

＊

「よそ者」の語りに焦点を合わせて見た結果は、主人公の住む農村には、一定のイデオロギーに基づいた思考を持ち、アヒメト・ジェラルを「救国戦争」の支持者である故に敵と位置づけ攻撃しようとする村人も、そのような目的で集まった集団も一切存在しないことになる。小説においてアヒメト・ジェラルが代表する、オスマン帝国近代化の試みの中で当初から進歩的で権力を持つ知識人からなる士官階級（ある場面においては徴税人をも含めて）と、保守的で弱い立場にある一般庶民と

いうトルコ社会の二重構造がある。士官階級はトルコ人としての国民意識、反帝国主義などのように政治色を帯びたが、アヒメト・ジェラルや、作品の批判的な評論家の一部が指摘するような一貫した政治的態度は、この段階で村人の中には現れていないのである。あえて言えば、「よそ者」の村人は、アヒメト・ジェラルも頻繁に指摘するように（「実は彼らは予言者もハリーファも知らない。」（「よそ者」、171）、「一人たりとも自分が何をしているのかわかっていないのだから。」（「よそ者」、202）、彼らの無教育やオスマン帝国の独特な機構のせいで成立しなかった「国民意識」の欠如に伺える「無知」（国、あるいは世界という単位での世情に疎^{うと}いという意味で）を共通項に持つのだと言えよう。

I. 4. 「よそ者」の構造一覧

I. 4. 1. 知識人階級に宛てられた手紙としての「よそ者」

この小説のもう一つの構造上の特徴は、これがトルコの（特に士官階級を主とする）知識階級に宛てた長編の手紙であることである。しかしこれは小説の初めから手紙という形だったわけではない。

しかしこの日記をつけるのは誰かに何かを語るためではない。いや、いや、そんなことは全く期待していない。私がこの日記をつけるのは、書くことを通して自分と対話するためである。いつか我が国が自由になった暁には、一瞬のためらいもなくこれを焼却処分するつもりだ。そうしないと誰かの手に渡ってしまっは大変だ。（「よそ者」、117）

主人公は当初、日記が他人の手に渡ることを望んでいなかった。その気持ちに変化が現れ、作品が手紙の形式を取り始めるのは、小説の終盤で敗北したギリシャ軍の部隊が村を占領し、そしてアヒメト・ジェラルの家に侵入し、彼の所有物を略奪した時に牧童のハサンが殺された時点からのことである。ハサンの死に続いてギリシャ軍による家々の焼き討ちが始まり、急いで日記帳と鉛筆を掴んで家を出たことや、この国民的大惨事をノートに記録する決意は、語りのスタイルが日記から、読み手を想定した手紙の形に変化する転換点である。

あっという間に、いや、違う、二、三日後には、ここにもトルコ兵のチャルックの音が響くはずだ。隊の一部はきっとこの村にも立ち寄って、この悲惨な瓦礫の山を必ず目にするだろう。その調査

の時にはメヒメット・アリに似た痩せた兵士がこのノートを発見して、自分の上官に持って行き、歯を見せて微笑みながら、(略)「上官、上官、これをちょっとご覧ください。何でしょう、これは」と言うことだろう。(「よそ者」、202)

ここでは、アヒメト・ジェラルは手記を書き終わってノートを石の底に隠し、それが後日、村にやってくるであろうトルコの部隊のメヒメト・アリのような兵卒によって発見され、上官に手渡されることを予想している。その兵士がメヒメト・アリに似ているというのは単なる思い付きではなく、意図された構図がある。メヒメト・アリは小説において純粋な若いトルコの村人を代表していると思われる。村人だから無知だが、兵役に就いている間は国民意識を身につけたように見えた。しかし帰郷するや元の平凡な村人に戻ってしまった。これはアヒメト・ジェラルの最初で最大の失望であった。つまりメヒメト・アリは、主人公が当初理想化していた村人の典型だった。ところが救国戦争が勃発すると—この戦争の意義を理解する知識もなく、他のオスマン帝国の村人同様に、国民意識よりもイスラム世界のハリーフアという特質からスルタンに曖昧な帰属意識を持つ以外は何のこだわりもない—、メヒメト・アリは再び徴兵されるのを嫌う。それに対してアヒメト・ジェラルは、村人たちにプロパガンダ的なスピーチをして救国戦争を支援する。このスピーチで、彼は元部下メヒメト・アリの支持を何よりも期待していた。しかし元部下の反応は彼の期待を裏切るものだった。

「士官殿、私が神に唯一願っていることは、私が再び兵士にならないようにということです。」

この日は彼のこの言葉で終わり、それは私が村にきて以来最も悲しい日になった。(「よそ者」、44)

メヒメト・アリのこの無関心な態度にアヒメト・ジェラルは非常に落胆する。

これ以外にも、メヒメト・アリがアヒメト・ジェラルに村のアーガーや高利貸しであるサーリーに経済的な相談をするように勧めたのは、主人公のもう一つの幻滅となった。小説のタイトルである「よそ者」という定義を(ストーリー上の時間経過の上では)初めてアヒメト・ジェラルに付加したのも、彼が親友と考えたメヒメト・アリである。アヒメト・ジェラルが村の女たちはなぜ彼だけを避けるのか問いただすと、メヒメト・アリは即座に「先生はよそ者だからです」(「よそ者」、52)と答える。

第一次イネニュ戦争の勝利の知らせを受けて歓喜するアヒメト・ジェラルは、村

長とカーヴェで議論となり、また意外にも、メヒメト・アリは再度徴兵されることを心配している。「先生私はまた入隊させられるかな」（「よそ者」、58）アヒメト・ジェラルとメヒメト・アリの間の緊張は次第に高まる。ついにメヒメト・アリが救国戦争のために徴兵されることが明らかになり、憲兵が村にやって来た時、二人の間の緊迫感は頂点に達する。アヒメト・ジェラルは、メヒメト・アリが徴兵に素直に応じるように説得する。そしてその会話を聞いた他の入隊者たちも救国戦争に対して前向きになる。これは二人の関係の転換点となり、これ以降、メヒメト・アリの負のイメージは払拭される。従ってメヒメト・アリは、教育によって善良な国民となり得る村人を象徴していると言える。この意味で、メヒメト・アリに似た兵卒が主人公の手記を発見し、上官に手渡すというのは、上官に象徴される（士官）知識階級と、兵卒に象徴される村人／庶民の間の連帯や団結を表しているのだ。他方では、消極的無知の村人は、国民による国の進展の対象であり、その積極的な主体となるのは、進歩的な士官知識階級である。これはオスマン帝国のスルタンを羊飼いに、民衆を群に例えるような上下関係を支えている。

上官は、このノートの日をゆっくりとめくるだろう。そしてノートの最後に行くに従って、その好奇心は深い興奮に変わるだろう。（略）私は彼に頼みたい。ここで私をよそ者扱いし、私に孤立という永遠の罰を与えた村人に少しも憤らないで欲しい。私は彼らを全員、この小さな牧童の遺体のそばで許したのだ。そして私は、こんな大規模な災いの瞬間において、サーリー・アーガーも含めて皆を許してやる。一人たりとも自分が何をしているのかわかっていないのだから。（略）もしわかっていないなら、誰にその責任を問えばいい。その責任者は、私だ。この日記を読む親愛なる友よ、あなたもその責任を負うのだ。あなたと私は、この村人たちを、何世紀にもわたって、陰しい自然の只中に取り残した、全世界の全てのもの、あらゆる快楽、あらゆる人生の快楽から切り離された一握りの被害者のように打ち捨ててきたのだから。飢餓、病気、孤独が村人を握ってきた。そして彼らの魂は、無知という、四方を壁に遮られた真暗な闇の中に繋がれてきたのだ。この哀れな人々から愛や慈悲、人道などという価値を期待するのは間違いである。（「よそ者」、202）

手記を読み、それに対して同情と怒りを抱くのは士官であり、村人は読み書きが出来ないため、ただ発見したものを手渡すだけである。従って小説は、救国戦争を推進する進歩的な士官階級に宛てられた手紙の形式を取っていることになる。小説のプロローグには上の引用と範列的であると言える。しかしそこには、アヒメト・ジェラルが執筆時に想像していたのとは異なる受け手の気配が見られる。プロローグでアヒメト・ジェラルの日記帳を発見するのは士官に忠義の絆で結びついている

兵卒の村人ではなく、普通の、軍隊教育を受けていない村人である。そして戦争で積極的に戦う「上官」という作中人物の代わりに、「西部地方戦地司令部の派遣した被害調査委員会」の一員（である士官）が日記帳を手にする。この村人は日記帳を調査員に手渡すということで協力的な態度を見せる一方、調査員全員をアヒメト・ジェラルと同じ「よそ者」と罵るほど生意気な姿勢を見せる。

つまりこれらの反復されるイメージに登場する村人は、徴兵される前のメヒメト・アリ（プロローグの村人）と徴兵された後のメヒメト・アリ（アヒメト・ジェラルの想像では上官に日記帳を手渡す兵卒）であると言って間違いあるまい。

I. 5. 「よそ者」の歴史的な記号—敵軍としてのギリシャ軍と救国戦争

I. 5. 1. ヨーロッパのギリシャ文化に対する懐古的な態度と「トルコ観」

啓蒙時代に入って宗教の影響が衰え、人間的な思惟が尊重されるようになったことによって、フランスやカトリックのオーストリア、正教会を掲げるロシア、プロテスタントのイギリスやオランダのギリシャ人に対する否定的な態度は一変した。それまではビザンティン教会に対する宗教的な対立から各国はギリシャに否定的であった。啓蒙主義が台頭してきたことにより、殆どのヨーロッパの国々において、ヘレーン文化に対する愛着が発生した。そのため政治的には対立していたフランス、オーストリア、ロシアの三国は、オスマン帝国に代わるヘレーン帝国建国を創案し、そのためのプロパガンダを開始した。

オスマン帝国は1768~74年の土露戦争に敗北し、1774年の条約によって、黒海、エーゲ海まで南下を望んでいたロシアは、トルコ国内の少数の正教会教徒の保護の確約と商業特権を獲得した。これを受けてヨーロッパの政界では、オスマン帝国が遠からず崩壊するであろうと予測されるようになった。ロシアの勝利は特にフランスに重大な影響を及ぼし、そこではオスマン帝国崩壊は時間の問題という見方に加えて、二つの新しい論が生まれた。一つは、トルコ人はヨーロッパから追放されるべきという見解であり⁸⁵、他方は、オスマン帝国に代わってヘレーン（ギリシャ）帝国を成立させるという見方である。

オスマン・トルコに代わるヘレーン帝国建国論を率先して擁護したのは、「土露

⁸⁵ ルイ 15 世(在位 1710~74)の治世、Marquis D'Argenson は、ヨーロッパにおける最大の「革命」はトルコ人のヨーロッパからの追放にあるとまで主張したのである。(Rene Louis De Voyer, Journal et Memoirs de Marquis D'Argenson Paris, 1857~58)

戦争の考察」⁸⁶を著したヴォルネ伯爵^{はくしゃく}である。一方では、ロシアの南下と勢力拡大を懸念し、トルコをロシアに対する障壁^{バリア}として支持する思想家もいたが、彼は同著によってこれを排している。彼は、ロシアはフランスにとって脅威ではないと考え、最善策はトルコに在住するギリシャ人にヘレニズム（ギリシャ文化主義）を注入することだと主張した。彼はオスマン帝国がトルコ市民実業家に利益の 10%を税として徴収する一方、フランスの実業家に対しては税を 3%とする特権的な扱いを一応評価しているが、これによって利するのはフランス国家ではなくフランス国籍の個人に過ぎないと述べ、フランスはロシア経済の南下を阻止するよりも、かえって応援すべきだと力説している⁸⁷。

ヴォルネはオスマン帝国に代わってヘレーン帝国建国を論の中核とした。これによってアジア全域も活性化すると考えた。彼はその著書でトルコをヘレーン文化の破壊者と解し、その文化や民族に対して非常に攻撃的であった。

この著書は特に啓蒙時代に評判になり、フランス語の知識を持つギリシャ人やフランスのギリシャ人留学生たちによって広く受け入れられたのである⁸⁸。

1. 5. 2. 「アナトリアのギリシャ化」におけるギリシャ人通訳の役割

セリム三世（在位 1789~1807）の治世に、当時までヨーロッパの商人に与えられた商業に関する特権は、オスマン帝国やヨーロッパの商人のために働くキリスト教徒にも与えられた。在トルコの大使などについていた通訳者を雇う特権は、一部の領事にも与えられた。通訳者たちは外国語の知識を持つキリスト教徒の中から選ばれ、大使や領事と同様の経済的な特権が保証された。彼らは時にスパイの役割を果たしたとも考えられている。彼らは特権的な立場を利用して、様々な商業活動を展開することができ、不動産の売買も可能であった。

通訳者は殆どギリシャ人で、彼らはヨーロッパによるアナトリアのギリシャ化政策に大きな役割を担った。各大使館や領事館は、通訳者を一人雇えることになって

⁸⁶ de Volney, Comte Constantin François, *Considérations sur la guerre des Turcs avec les Russes*, Paris, 1788~1789 を参照。

⁸⁷ しかし実際は、当時フランス政府はトルコの近代化を支持し、積極的にオスマン帝国軍の改革に助力した。ヘレーン帝国建国論やトルコ人追放の議論は主に当時の思想家の間で流行したに過ぎず、政治的には直接反映しなかった。

⁸⁸ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 84~86、151 頁。

いたが、アレppo⁸⁹のロシア、フランス、オーストリア、イギリス各領事館だけには、通訳者が合計 1500 人もいた。オスマン帝国政府は対抗策として商業権代を下げることで、多くのイスラム教徒オスマン・トルコ人も商業権を獲得できるように努めたが、かえってギリシャ商人の勢力拡大に寄与する結果となった。

フランス政府は政教分離によって「オスマン人としての国民意識」の確立を勧告し、1867 年にフランスの文部大臣ヴィクトル・ドゥルーにオスマン帝国教育機構の制度化プロジェクト発足を任じた。このプロジェクトによって帝国中等・高等学校であるガラタ・サライ⁹⁰が設立された。フランス語による教育を施すこの学校の設立によって、フランス政府はフランス文化や言語の枠組みで、イスラム教徒、ギリシャ人、アルメニア人やユダヤ教徒を結び付け、オスマン人のイデオロギーを注入することを目指した。

ギリシャは第一次世界大戦直後のムドロス休戦条約締結時になって三国協商側に参加したにもかかわらず、在トルコの多くのギリシャ人の支持を得て、占領国の中で最も広い地域を占めた。ギリシャ人通訳の不動産売買、商業権の獲得やアナトリアのギリシャ化の活躍の影響で、ある意味で啓蒙時代に流行した「トルコ人のヨーロッパからの追放」や「トルコにヘレーン帝国を建国する」というユートピアが現実しかけたような状態となったのである。第一世界大戦後の和平会議ではフランスとイギリスは、イズミルを始めとしてエーゲ海地方をギリシャに与えることを力説した。反対の声も上ったが、ムドロス休戦条約の七条⁹¹に基づいて、救国戦争運動を口実にイズミルをギリシャ軍に占領させることが決議された。

1919 年 5 月 14 日に、イギリス、フランス、アメリカ合衆国からなる艦隊に伴われてギリシャ軍の師団がイズミルに上陸すると、ギリシャ人の群集は歓喜してこれを迎えた。上陸直後にはギリシャ人少数民族の山賊集団によるトルコ人の商店の略奪や、トルコ人虐殺が繰り広げられた。アナトリア中心を目指して進攻するギリシャ軍によるトルコ人に対する暴行や虐殺もあったという。その中で、パリの和平会議においてイズミルとその周辺地域のギリシャによる委任統治が決議されたのである。

92

⁸⁹ Halep シリア北西部の都市。

⁹⁰ トルコ語では Galatasaray Sultanisi。フランス語では Lycée Imperial de Galatasérail。

⁹¹ ムドロス休戦条約第七条：三国協商は自分に対して懸念を感じた場合地政学的な地域を占領する権利を持つ。

⁹² Shaw, J., Stanford; Shaw, Ezel, Kural, *Osmanlı İmparatorluğu ve Modern Türkiye*, (「オスマン帝国と近代トルコ」) E Yayınları, İstanbul, 1983, 407~408 頁。

1. 5. 3. 「よそ者」におけるギリシャ軍という記号

こういった歴史的背景を理解すると、「よそ者」における村の占領の場面が立体的に見えてくるのである。ギリシャ兵が村人たちを広場に駆り集め、家々に放火し、女性をなぶるなどの行為に対し、アヒメト・ジェラルはそれを食い止めるべくギリシャ軍の士官に直談判に向う。ギリシャ軍士官はアヒメト・ジェラルが元士官でありしかもケマリストであることを知ると、彼に対して蔑視的な口調で語るのである。

「進めなかったと思いますか？やろうと思えばできたんですよ。でも私たちの目標は征服ではなく、平和を確立することです。あなたたちトルコ民族は何年にもわたる戦争にもうんざりしないのですか。全世界が平和を求めているにもかかわらず、ただあなた達、ケマリストは、戦闘を続けているんだ」

士官の一人が話しに割って入って、ひどいフランス語で、

「いずれ落ち着いてまじめになるでしょうが、その時では遅いでしょうよ」と言った。

「あなた達が出て行ってからな…」私は言う。

「はい？何と言いましたか？私たちが出て行ってからと？私たちはどこへも行かないぞ。私たちはヨーロッパの主要国の決定で、あなた達を鎮めるために派遣されたのです。この使命を果たさない
うちはどこへも行かぬわけにはいかないです。」⁹³（「よそ者」、205~206）

1. 5. 4. ギリシャ軍に対する態度においてトルコ人としての国民意識の萌芽と「よそ者」の村人

アブデュルハミト政権以来、西洋化という思想に対してイスラム復古主義的な色合いを持つ、予言者のモハンマドの民族であるアラブの文化に対する崇拝が発生した。イスラム主義というこのグループはただ西洋主義に反対するのではなく、トルコ語やトルコの文化までも蔑視するような態度を取っていた。

イスラム主義派によってはトルコ国民という定義はありえなかった。トルコ民族はイスラム教徒なので、彼らにとってはイスラム国民として定義されるべきだった。彼らはアルメニア国民、ギリシャ国民、カトリック国民あるいはプロテスタント国民という定義は受け入れても、トルコ国民は、イスラム共同体の「オスマン国民」

⁹³ 下線は引用者による。

として定義されるべきと主張していたのである。⁹⁴

ベルケスによれば、トルコの民衆を定義するような呼称さえなかった。オスマン帝国内の「非イスラム教徒」の民衆の代表は、自国民のために戦うのに、トルコ人の民衆の代表者たる先駆的インテリたちにはこういった国民の支持基盤を持たなかったのだ。「トルコ人としての国民意識」の発生までトルコ人をトルコ人（仏語 *Turc*, 英語 *Turk*）と呼称／定義するのは、むしろヨーロッパ人であった。⁹⁵

トルコ人という呼称が政界においても盛んに使われるようになったのは、「団結と向上」が政権を握った 1910 年代以来のことである。この時期に、オスマン帝国政府は、「トルコ政府」、スルタンは「トルコのハーン」、軍隊は「トルコ軍」と呼ばれるようになり、その時でも、イスラム復古主義の知識人によってひどく批判された。彼らはまるで違う民族の市民であるように、「トルコ人」という定義を否定し、トルコ民族を幻想であることまで主張した。

トルコ人としての国民意識の形成が完成するのは、共和国創立以降のことである。それがゆえに「よそ者」において、この国民意識が強調され、

トルコ人の国というこの広く寂れた世界（「よそ者」、53）、トルコ人青年（「よそ者」、130）トルコ人知識人（「よそ者」、130）トルコの伝統的な童話（「よそ者」、138）トルコ兵の軍靴（「よそ者」、140）トルコの最高司令官（「よそ者」、161）

など頻繁に「トルコ人」「トルコの」という語が使われる。

だが「よそ者」の村人の国民意識については、アヒメト・ジェラルとベキル軍曹の次の緊迫した会話に最もよく集約されている。ギリシャ軍の侵攻を、救国運動のせいだとする軍曹との激しいやり取りである。

「私は知ってます、先生。あなたも彼らの同志でしょう」

「彼らって」

「ほらケマル・パシャを支持する人たち」

「トルコ人でありながらケマル・パシャを支持しないとは一体どういうことだ？」

「私たちはトルコ人ではないですよ、士官殿」

「ええ、じゃお前等は一体何？」

「我々はイスラム教徒ですよ、エルハムデュリラフ！トルコ人というのはハイマナに生活してい

⁹⁴ 同前、408 頁。

⁹⁵ 同前、404~405 頁。

るものですから」（「よそ者」、173）

この会話はギリシャの敵軍が村を通過する前に置かれている。また、村を通過するギリシャ軍の中に、おそらくアルメニア系かユダヤ系のトルコ人であろう通訳者のたどたどしいトルコ語を耳にしたアヒメト・ジェラルの感想はこうだ；

トルコ語がこのように歪み、稚拙に発音されるのを聞くと、何とももの悲しい感じだ。まるで残酷で悪戯な手が私を掴み上げ、揺さぶっているようだ。私たちの体の最も敏感なデリケートな部分に爪を立て、傷つけるようだ。（「よそ者」、177）

ここで、一方ではトルコ人でありながらそれを否定する村人に裏切られ、他方、数世紀にわたってアナトリアで共に暮らしてきた少数民族であるギリシャ人が敵として攻撃してきたのであり、自国の市民（トルコ人であることを否定する村人と、トルコ民族と共に暮らしてきたギリシャ民族）の双方に裏切られたという彼の心情が見える。

オスマン帝国衰退の要因の一つとなったギリシャ人通訳者も、この小説に登場させられている。この通訳者は、オスマン帝国の外国の大使館や領事館などに雇用され、自分の権利や、スパイとして働いているこれらの大使館の持つ特権を商業権や不動産売買権などで違法に利用したイメージを持ちながら、ここで自分の上官にトルコ語をギリシャ語に翻訳するという役割を果たしている。だが、「よそ者」において、おそらくオスマン帝国の市民である通訳者は歴史的な背景を通して、「詐欺師」として描かれている。

アヒメト・ジェラルがギリシャ兵の女性に対する不正行為を司令官たちに訴えたのをきっかけに、一人の士官が彼を伴って村人に対して聞き取り調査を行った際、士官の通訳は村人を脅したり、事実を歪めて訳している。

士官はまるでまじめに視察を始める担当者のように、トルコ語を話す兵士の通訳をつけて、村人を一々取調べた。彼は質問する者を鞭の先で指して次々に質問を浴びせかけた。

「名前は何？年齢は何？あなたは兵隊に殴られたことがあったのか？あるいはあなたの親戚などに暴力を振るわれたことはあったのか。何か文句はあるか」

通訳がこの妙な質問をトルコ語に訳す度に私の怒りはだんだん強まるばかりだった。取調べられている村人の代わりに、身を乗り出して自分が答えたくてたまらなかった。特に、村人の中で正直に乱暴な行いを説明するのがあると、通訳はその発言を、内容を全く変えながらひそひそと通訳してい

ることが、私の癪に障った。（「よそ者」、207~208）

村人の発言を司令官に伝えるはずのギリシャ人通訳は、勇ましくも兵士の略奪や娘たちに対する暴行を司令官に訴えるゼイネップ婆さんをも脅す。

「いい加減にしろよ婆あ！」と言う。「さっき言ったことを俺がそのまま司令官に伝えたら、ひどい目にあうぞ。いい加減にしろ！」（「よそ者」、207）

19世紀初頭から100年以上もの間、オスマン・トルコ市民であるもののトルコの不利益に働いてきたギリシャ人通訳の伝統の背景が、「よそ者」に投影されている。またフランス語およびフランス文化と、オスマン人としての同一性により、トルコ民族とギリシャ人を結びつけようとしたフランスの19世紀末期の政策は、ただアヒメト・ジェラルと士官たちとの共通語としてのフランス語に現れているようである。啓蒙時代の「トルコ人のヨーロッパからの追放」やアナトリアに古代ギリシャ文明を再構築するという案が現実味を帯びたものだったことが、「よそ者」の語りを通して読み取れるのである。

1. 5. 5. ギリシャ空軍のビラに見る歴史的背景とナポレオン・ボナパルトのエジプト占領

ギリシャ空軍の戦闘機が撒くビラにも歴史的な意味を見出すことができる。アヒメト・ジェラルがゼイネップ婆さんの家が火事になるという悪夢を見た後、ギリシャ空軍の戦闘機が村の上空に現れ、彼らの大義名分を宣伝するビラが撒かれるようになる。アヒメト・ジェラルはそのビラの一枚を拾って読む。

本当にほとんど毎日飛行機が三、四機は上空を行き交う。ある日、その飛行機が余りに低空を飛行したので、翼の下の方まで見えた。別の日にはビラをばら撒いて行った。その一枚を読んでもみると、「エスキシェヒルとキュタフヤを占領した。近いうちにここにも到着する。あなた方は村を去る必要はありません。我々には悪意はないのです。ハリーファ⁹⁶とサルタンが私たちを支援しています。我々はあなた方をケマルのやくざ集団から守るために戦っています」（「よそ者」、145）

⁹⁶ Halife アラビア語で「後継者」「代理者」の意味。ムハンマドの後継者として、全イスラム教徒の指導者であり、教徒の共同体の政治的支配者でもある。ハリーファ制は13世紀半ばに崩壊し、後にオスマン朝トルコ国王（スルタン）の称号として1924年まで使用される。

文字の読めない村人がビラをイマームに読んでもらうシーンもある。

イマームはたどたどしく読み始める。

「親愛なるアナトリアの市民よ、ケマルのやくざ集団はもう崩壊している。我々は徐々に全ての都市や町を占領してきた。今はアンカラの方面に進んでいる。決して我々に敵対的な行動を起こさないでください。我々はハリーファに派遣され、あなた方を救いに来たのです」（「よそ者」、171）

ギリシャのこのプロパガンダは、当時同盟国であったフランスが1798年にエジプトを占領した時、イスラム教徒に対して行ったプロパガンダを髣髴とさせる。セリム三世はフランス政府と友好関係を築き、フランスの支援を得てオスマン・トルコ軍の西洋化に努力した。その中で1798年のナポレオン・ボナパルトの突然のエジプト占領はトルコにとって大きな衝撃であった。これ以降一時的にオスマン帝国とフランスの関係は悪化したが、1801年にフランス軍が撤退したため、その関係は修復した。

ナポレオンはエジプト遠征に際し、エジプトのアラビア人民衆に対して次のような通達を出した。すなわち、彼と彼の軍隊は全イスラム教徒及びハリーファの友人であり、ナポレオン軍の遠征はマムルーク朝⁹⁷の専制支配からエジプトの民衆を救済すること、またイスラム教の敵であるイギリスの支配からインドを救済することを目的とするという通達である。アッラーとコラーンに敬意を表し、人びとの祈祷に干渉しないことを約束した。「ビスミッラヒルラフマーニルラヒム」⁹⁸という題名でフランスの東洋学者に執筆させたこの通達では、十字軍の遠征を組織した教皇たちの権力や、イスラム教徒と争っていた「マルタの騎士団」⁹⁹などを壊滅したことなどを引き合いに、フランスはイスラム教国と近いことが力説された¹⁰⁰。

「よそ者」では、「ヨーロッパ」という女王がいて、「私はあなた達イスラム教徒の問題を全て解決してあげますと言明したそうだ。」（「よそ者」、57）、「村に近づいているのも敵軍などではなく、「ヨーロッパ」という女王が私たちをやくざ集団から救うために派遣した頭に緑色のターバンを巻いた聖者の軍隊」（「よそ者」、141）

「エメティ婆さんは熱心に緑のターバンを巻いた聖者やイスラム教に改宗するつも

⁹⁷ エジプト及びシリアを支配したトルコ系イスラム王朝。1250~1517年。オスマン帝国の侵入により滅亡したが、1811年まで実権を保持。

⁹⁸ Bismillahirrahmanirrahim 「情け深く恵み多き神の御名によって」。

⁹⁹ (トルコ語では Malta Şövalyeleri) Knights of Malta 11世紀末、エルサレムのベネディクト会の巡礼用救護所を本部として創設された騎士修道会。後にマルタ島に本部が移ったためこの名で呼ばれる。

¹⁰⁰ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 121~122頁。

りのヨーロッパという女王の話をし始める。」（「よそ者」、142）というように、村に流れる噂には、ギリシャ軍がトルコの村人の宗教的な感情を利用して占領を進める策が見られるが、これはナポレオンの時代から引き継がれたような印象を与える。

古代ギリシャ文化を崇拝する 18 世紀末のフランスのプロパガンダと、一世紀の後、第一次世界大戦直後の複数の国によるトルコの分割占領時に同盟国の一員であったギリシャのそれとの類似は眼を引くものである。カイロのイブラヒム・パシャという州知事の裕福な家庭に生まれ、中等教育をエジプトで受けた作家カラオスマノールが描く「イスラム教に改宗するつもりヨーロッパという女王」というような寓話的な表現を用いたプロパガンダは、作者がナポレオンの通達にヒントを得た発想だったと考えるのは、根拠のないことではない。

「よそ者」においてトルコ、ギリシャ及びフランスの政治、経済、宗教といった要素の絡み合った歴史的関係のパノラマがここに凝縮していると言ってよいのである。

第 II 章『南小泉村』と『よそ者』における都会人としての語り手と村人としての農民の対立

はじめに

真山青果著『南小泉村』（1907）は、東北地方のある寒村の貧困に直面する農民の姿を、医師出張所の代診の目を通して語る小説である。作家は貧困をきわめる農民たちを「非情な眼で眺め」、彼らの「様々な醜悪な部分を、はばかりところなくえぐりだす」¹⁰¹のである。「農民の否定面が」強調的に「するどくとらえられ」、しかも「野性味をおびた執筆で冷たく写されている。」またこの作品は日本近代文学において、「農村小説中の一典型」¹⁰²である。稲垣達郎はこの作品について先のように述べるが、これらの指摘は、トルコ近代文学の農村小説として重要な位置を占める「よそ者」の否定的な解釈にも当てはまり、実際に「よそ者」について同様な指摘がなされているのである。

百姓ほどみぢめなものは無い。取分け奥州の小百姓はそれが酷い、襦袢かてめしを着て糲飯せひを食って、子供ばかり産んで居る。（『南小泉村』、3）

それに対して人間は何と欠点に満ちていることか。それ故に善悪や、美醜や、有用無用を識別することができない。（『よそ者』、34）（中略）もともとこの村は恐ろしいほど寂れている上に、村人からも孤立させられるという孤独感が私を悩ませる。（『よそ者』、36）

『南小泉村』は語り手が「百姓」と呼ぶ農民を罵るかのような長いモノローグで始まる。この小説は、「農民」に関する否定的な一般化からはじまり、やがて南小泉村に移行、その村人の描写に集中するという形で、枠組みを絞って行く構造になっている。このような一般的な記述から特称的な記述への展開は「よそ者」の展開に類似するが、「よそ者」においては、更に広範な、抽象的な枠組みである「人間性」を出発点にするわけである。

そして、どちらの小説にも共通して「農民」に対する否定的な態度が見られる。特に彼らの不衛生・疾病、原始性・保守性、権威に対する恐れ、彼らの^さ冴えない外見をもってその人間性までも低く評価するという点で、双方の語り手は非常に近い

¹⁰¹ 磯田光一（他 編集）、『新潮日本文学辞典』、増補改訂新潮社、東京、1988、1162 頁。

¹⁰² 同前、1163 頁。

ように思われる。言うまでもないが、農村や農民を蔑視的に取り上げるとき、「南小泉村」のMも、「よそ者」のアヒメト・ジェラルも、「都会」、「都会人」、つまり都会人意識を判断基準として持ち合わせているのである。「文明化」された国民であるという意識の持ち主として、「文明の光がとどこめ暗黒な」空間において、双方の主人公は自分を特権化する。

この章では、「南小泉村」を分析する上で、成田龍一の近代化以降の都市空間を検討する「都市空間の文化経験」を参考に、中央—地方の関わりでその「農村観」を規定し、日本と並行して「よそ者」での農村や農民の捉え方を考察する。

II. 1. 「中央」としての都会と「地方」としての「田舎」、都会人の「文明人」としての上位性

II. 1. 1. 「南小泉村」の時代の都市と地方

周知のように日本はヨーロッパの国々と同様に、封建制度的な構造を持ち、社会構造もそれによって形成されたのである。江戸幕府の崩壊や明治政府の確立によってこういったあり方は変化するものの、これは一気に封建制度を崩壊させるようなリボリューションリボリューション革 命 的な変わり方でなく、エボリューション斬新的な変化であり、封建的機構が近代的国家の再構築の上で利用される。これに関して、成田龍一は次のように述べる。

農村をモデルに構築された近代日本像が、日本社会の「半封建制」と「特殊性」を強調したのに対し、都市をモデルにすることにより、日本近代の「近代的」性格と「普遍性」に比重がかかることともなろう。¹⁰³

日本のこういった二重性は、つまりいわゆる「半封建制」の色合いの濃さは国の人口に関する統計量からも理解することができる。1890年の日本の人口は4096万人であり、そのうち、都市部の人口は561万人で、その割合は13・7%にすぎず、農村部の人口が圧倒的大多数を占めていたわけである。この人口の割合の状況が逆転するのは、ようやく1960年代だった。日本は明治維新、つまり19世紀後半以降、「国民国家を形成し、近代化・産業化を推進する」。だが「従来、この過程はもっぱら農村に基底をおきつつ考察され、ここから近代日本社会の「半封建的」性格が指摘さ

¹⁰³ 成田龍一、『近代都市空間の文化経験』、岩波書店、2003、2頁。

れてきた」¹⁰⁴わけである。

この過程において、「都市」の重要性は増し、「近代の都市のシステムが地理的に拡大・外延化」していく一方、日本の都市は「世界における近代都市のシステムと軌を同じくする」。つまり 19 世紀後半以降期において、「国民国家が都市を内部にくみこむようになり」、そして、「近代都市と国家のこの関係が一九世紀後半以降の都市システムを規定」¹⁰⁵するのである。

1868 年 9 月に、京都から遷都された東京の出生は、「安政末年ごろより「首都失墜」状態であった江戸」¹⁰⁶の、近代国家の「首都」としての「復活・再生」を意味していた。他方、「東京」は、二つの構成要素の加工によって、江戸のイメージアップであったとも言える。そこで成田は、坂本学「都会と田舎」を踏まえて次のように指摘する。

日本の歴史を「中央」と「地方」という観点から考察する坂本学は、(一) 江戸は「先進」ではあったが、京都のもつ「いにしへのみやび」を欠き、唯一の文明ではなかったこと、(二) しかし東京は、江戸の位置と京都の「都」を継ぐこと、を指摘した。天皇と「みやび」が東京に移され、東京は全国を「教化する拠点として」文明の窓口となる。¹⁰⁷

「南小泉村」に戻れば、主人公 M は「東京」の住民ではないにもかかわらず、農村という「地方性」に対して東京の「中央性」やその「全国を「教化する拠点として」文明の窓口」という機能を自負的に意識しつつ「田舎」に向かうのである。その上で、国の人口における農民の大多数性や、「半封建制」の国の進化、経済的発展において重要な役割を果たす農村の勢いを彼は無視している。彼は、国・社会の半封建制より、都市の普遍性を重要視し、あえて「文化」の次元での都会の優位を取り出すのである。

彼は「近代の都市空間」の「文明化」のもとで、「表現や行為の基本としての身体を馴致」され、「精神の鑄型をつくり出」され、文明にふさわしい身体と精神へと「領導」された人物である。したがって、M は、「人びとを伝統社会からひきずり出し、公的・匿名性を特徴とするあらたな空間秩序を形成し」また都会人の人々に、それ

¹⁰⁴ 同前。

¹⁰⁵ 同前、3 頁。

¹⁰⁶ 同前、43 頁。（東京都編、『東京百年史』、第二巻、東京都、一九七二年）

¹⁰⁷ 同前、43 頁。

にふさわしい「あらたな身体と精神を要求する」¹⁰⁸都市空間によって作り上げられた「文化人」である。こういった身体と精神を持たない農民を、自分の文明化によって獲得した特質と引き比べて、低く価値づける。都市空間が自分に要求した特質を、彼は自ら「田舎」において農民に要求し、農村空間において、「中央」に相当するような「同質化・同一化」を求めるのである。

II. 1. 2. 「よそ者」のオスマン・トルコにおける「都市」と地方

19 世紀後半の日本の半封建制や、人口の構成を取り上げたが、「よそ者」の背景となるトルコの構造はどうだったのだろうか。「よそ者」では主に二つの都市が取り上げられる。一つは国の首都であった「イスタンブール」であり、今ひとつはケマリストの士官たちが率いた救国戦争の中心地であり大トルコ民衆議会¹⁰⁹の場となったアンカラである。あえて言えば、当時トルコは二重政府状態にあり、首都を二つもった楕円的世界を形成していたのである。

アヒメト・ジェラルはアンカラに関して「ロンドンやモスクワといった地名が電報に乗って世界中を駆け巡っているが、それらに肩を並べて聞こえるようになった」（「よそ者」、184）と述べ、繰り返しその存在感が強調され、彼は正しく第二の、あるいはイスタンブールに勝るとも劣らない、首都として認識していたのである。

事実、トルコの歴史において、イスタンブール、エディルネ（マルマラ地方のヨーロッパ側にあるトラキア地域に位置する）、エーゲ海地方のイズミル、エジプトのカイロ、現在のギリシャ領サロニカと違って、中央アナトリアの最初の大都市であったアンカラは、救国戦争当時には、ケマリストたちによって地政学的安全性などの理由により選ばれた小さな町に過ぎなかった。アンカラへの遷都は、帝国の崩壊を強烈に印象付けるという意味合いもあったと思われる。

1453 年のメヒメト二世によるイスタンブールの征服は、東ローマ帝国の崩壊を引き起こし、世界史においても「暗黒時代」の閉幕、ルネサンスの始まりという重要な位置を占めたと指摘される。学問や芸術などのヨーロッパ文化の重要な拠点の一つであったこのヨーロッパの都市を手中に収めたことが、帝国の行方に大きな影響を及ぼしたことは言うまでもない。これは（オスマン）トルコの西洋化・文明化と

¹⁰⁸ 同前、48 頁。

¹⁰⁹ 現在でもトルコ共和国の国会議院である Türkiye Büyük Millet Meclisi のこと。

いう長期にわたる変化の過程の出発点となる全く画期的な出来事であった。それよりおよそ 450 年後、「よそ者」の時代のイスタンブールは、帝国の歴史上初めて外国の占領下に入り、独立を奪われたのである。

ここでトルコにおける地方という概念の定義をする必要があるだろう。明治までの日本とは違って、オスマン・トルコの領土・国境は、継続的戦争による侵攻や失地によって常に変化していた。17 世紀まで、ヨーロッパではハンガリー、ボスニアまで、北方ではクリミア、北東でカフカス地方、東方ではイランの一部、南方でアラビスタンと呼ばれたイラク、シリア、サウジアラビア、北アフリカではエジプト、リビア、チュニジア、アルジェリアにまで拡大した帝国は、ついに第一時世界大戦の敗北によって現在のトルコ共和国の国土より若干小さい地域に大幅に縮小したのである。そのような激しい国境、国土の変化にもかかわらず、アナトリアはトルコの歴史上常に「田舎・地方」という見方をされてきた。

1910 年代、おそらく世界で最も多様な民族を抱えた国の一つであったオスマン・トルコでは、民族的に世界で最も均一的な国の一つである日本とは異なり、人口調査の上で「都市」と「地方」という区分はなく、民族分布図が重要視されていた。しかも、長引く戦争や紛争の影響で人口の増減が激しく、また男女の比も不均衡であった。1910 年には人口は 20,706,170 人だったが、第一次世界大戦、救国戦争やその他の紛争等の要因によって、1920 年代には人口はその半分に激減したのである。だが、おおざっぱに言うなら、封建制度が成立していないにもかかわらず、日本と同様に、国の人口の 80%前後は農民である。特に共和国創立前後には、荒廃した国の再建の上で農村の重要さが認識されるようになった。これは農村に対して主観的に非情な見方を示す M とは違って、国民主義の意識を持つアヒメト・ジェラルが農民を重要視していることに現れている。

II. 3. 「暗黒」の空間としての「寒村」

II. 3. 1. 「南小泉村」でスラムと同定される農村

「南小泉村」において、M が赴任する「農村」は、都市空間とは「別世界」であるかの印象が与えられている。都会を全ての判断基準とし、健康不良・病の多さ、衛生観念の欠如、栄養の悪さ醜悪な容貌、迷信などといった要素が、そのような印象を生成する。1880 年代以降というのは、東京の「貧民窟」の問題が話題になり、

新聞記者が「貧民窟」に出かけ、「探訪」「観察」をし、いわば「参与調査」を試み、新聞紙上にその報告を掲載するというのが人気であった。そこで「貧民窟」は「文明の光がとどかぬ「最暗黒」の地とされた」¹¹⁰のである。こういった論説は、都市のスラムを対象にしているが、真山の作品で描かれる「寒村」や彼の「農民」への眼差しは、「農村」を都市空間とは異質な空間と位置づけ、それによって自分を再定義するという点で貧民窟の報告と共通すると思われる。

然し斯う考えるのは、強ちに僕の僻見ばかりでもあるまいと思ふ。親しくかれらの中に立雑つて、深くその生活になじんだら、誰しも然取るに相違ないと思う。僕は誤って余り近寄り過ぎた。(中略)僕は一年以上かれらと一緒に住んで居た者である。(「南小泉村」、3)

成田は当時のスラムに暮らして、自分の感想を新聞に載せるという行為を「ある地域に特別の眼差しを注ぎ、「貧民窟」と特定化し、一般の地域と差異をつける行為」と定義する。他方、作品の語り手としての M は、まず赴任した「農村」の負の全体像をコンパクトに描写し、そしてこれらを主観的想像力による「僻見」によるものではなく、彼自身の実際の経験に基づくものだと主張する。次に、自分を、都会と異なる世界に暮らした者と宣言することで、読者を未知の世界に誘う案内人としての正当性を主張している。

当時人気を博した都市における最暗黒の地の同定やそれに関する論説は新聞だけでなく、著作物としても現れる。1893年に、「都市下層社会」へ変装して入り込んだ松原岩五郎の「探訪記」、『最暗黒の東京』が出版された。だが「最暗黒論」というのは、日本人の著者・記者のオリジナルの発見・発想によるものではない。ウィリアム・ブースが1890年に著した、*In the Darkest England and the Way Out* という作品では、アフリカ探検家のヘンリー・スタンレーの『最暗黒のアフリカ』に描かれる

「最暗黒の地」と同様のマーカー、つまり「^{わいしょう}矮小で非人間化された住民」「苦役」「欠乏と惨状」、さらには「マラリア」に至る「最暗黒」のマーカーがイギリスにも存在すると言った。彼は「大きな失われた国土」と定義するスラムを、アフリカの最暗黒の地と同定し、現実を特別な枠組みに入れて再発見するわけである。それに対して、日本人の記者・作家等は、ヨーロッパのこういった作品を手がかりに自国の都市における再暗黒地を発掘したのだ。成田は次のように指摘する。

¹¹⁰ 同前、11頁。

イギリス／アフリカの関係を、イギリスの内部に移行させ、「暗黒」を創出する手法は、「スタンレーが蛮国探検」（松原岩五郎）、「倫敦の饑寒窟探検者」（桜田文吾）に言及しつつ、(中略)19世紀日本の都市空間——貧民窟に同定される。¹¹¹

再度「南小泉村」に戻れば、最初のパラグラフには次の一文がある——「丁度、その壁土のやうに泥黒い、汚い、光のない生涯を送っている。」主人公が暮らした「寒村」は黒く暗い、そして文明による光も存在しない場として作り上げられているが、「探訪記」などの作家らの眼差しに似た手法である。つまり、ブースがスタンレーのアフリカの「最暗黒論」をイギリスのスラムに適用し、それに触発された日本人記者がブースの論に基づいて日本の都市の貧民窟を再発見したのである。Mは、出版というメディアによって普及した、都会における再暗黒の「未開地」としてのスラム・貧民窟や、都市空間における野蛮人・原始人としてのスラム住民・貧民といった概念を獲得する。そしてこれを「田舎・農村」、「農民」に対する従来の社会的偏見と彼の個人的な偏見とに融合させ、「南小泉村」やその住民である「百姓」に適用しているのだ。そこで、もともと東京の都会人でないと思われるMの語りは、自己を他者化した「探検家」の意識で語られることになる。

II. 3. 2. 「よそ者」の「農村観」

「よそ者」にも「光が存在しない、暗い」農村のイメージが生成されている。アヒメト・ジェラルが部下について初めて村にやって来たのは、「日没の薄明かりの中」であった。「メヒメト・アリが馬車の窓から腕を伸ばして、向こうの方を指差し」村が見えたと伝えると、主人公はその方向に村の曖昧なシルエットを見出し、しかし「明かりはまったく見えなかった」と述懐する。また村に着いて馬車が停車すると、「メヒメト・アリは私に一言も声をかけずに馬車から飛び降り、闇の中に遠ざかって見えなくな」る。

「南小泉村」が、Mの三重構造の「最暗黒地論」つまり、1) イギリス人探検家によるアフリカの「最暗黒」発見→2) イギリス人作家によるロンドンのスラム「最暗黒」の「再」発見→3) 日本人作家による東京貧民窟の再発見)、の日本の寒村への適用であるのに対して、アヒメト・ジェラルの最暗黒論はどうだろうか。

¹¹¹ 成田龍一、『近代都市空間の文化経験』、87頁。

14 世紀以来世界の主要な帝国であったオスマン帝国には、植民地土着の「土人」に対する区別法があったが、その基準はほとんどイスラム教徒・非イスラム教徒という宗教的なものであり、主客・上下関係は意識されたが、植民地の原住民を帝国に同化する政策は実行しなかった¹¹²。植民地においてトルコ語を初めとする強制教育、強制改宗などは実施されなかった。つまり、スペイン・ポルトガル・イギリスやフランスとは植民地化の基準を異にし、オスマン帝国政府の被植民地民族に対する態度は、「無関心」的蔑視だったのである。これは東洋風専制的国家の、「田舎」の住民に対する「無関心」な態度と通じるところがある。

他方アヒメト・ジェラルはオスマン帝国の高位軍人のパシャの息子である。彼の「田舎」に対する蔑視的な態度には、それゆえ、エリート意識が色濃く^{にじ}滲んでいる。それに、彼が尊重されたオスマン帝国軍のナショナリストの士官であったことも、彼の特権意識を強めるもう一つファクターである。こうして、アヒメト・ジェラルの「田舎」に対する態度には、国の貴族階級に属する人物として、帝国の被植民地原住民に対する蔑視的態度が見られる一方、西洋化や、出版物や西洋風の教育のオリエンタリズムの視線も見出すことができるのである。

II. 4. 身体的健康という基準

ひろたまさきによれば「社会のすべての価値は、文明か野蛮かに二分され、野蛮は否定さるべき、排除さるべき価値となった」¹¹³。成田龍一は次のように述べる。

近代日本社会、あるいは近代社会は文明／野蛮の二分割で解明することができるであろうか。文明の価値としての理性・富有・健康は、当初、それ自体を定義し価値を示すのではなく、狂気・貧困・病気という負性をもつものの否定としてたちあらわれる。理性／狂気、富有／貧困、健康／病気が同時に現出し、前者は後者の否定のうえに、後者を反転させた時点にある。（中略）文明と野蛮は対をなし、相互補完的に同一行為の表裏を構成する。¹¹⁴

理性／狂気、富有／貧困、健康／病気という三つの対照的概念や、狂気・貧困や

¹¹² 同化、強制教育などは、キリスト教徒の少数民族の中から選ばれた士官や兵士や官僚の場合は行われた。

¹¹³ ひろたまさき、『日本近代思想体系 22、差別の諸相』、「日本近代社会の差別構造」、岩波書店、1990、471 頁。

¹¹⁴ 成田龍一、『近代都市空間の文化経験』、81 頁。

病気の否定によって文明は自己の位置を規定するわけであるが、ここで特に健康／病気という基準を取り上げて、「南小泉村」と「よそ者」の「文明的」態度への適用の可能性を考察しよう。

II. 4. 1. 「衛生」という基準

都市と「田舎」の対照性を顕在化する要因として、「公衆衛生」の概念がある。公衆衛生の実施は、「清潔」と「不潔」という概念をももたらした伝染病対策に始まり、また、都市システムの形成過程においても転換的現象であった。「南小泉村」の導入部において、（おそらく風雨に曝された）壁土という比喻を用いて、「汚さ」が村人の「生涯」に転移されていることを先に見た。また 5 頁では、「都会人」の立場に立脚する語り手は、都会・町と農村を対立させ、語り手が住む村は「都会」の「老廃物」が垂れ流され蓄積する汚染した場所である。農村を通る川の役割は町・都会の汚物を運ぶことである。

大きな町には、きっと、そこから吐き出す芥川がある。詰り、町の老廃物を排泄するのだ。（中略）南小泉村もやがてその一つである。百姓として独立の百姓ではなく、多くは都会の下^{したずみ}澱になって生活を立てて居る。（中略）丁度其の居まはりの田畠が、町から流れ出る、湯の垢、染屋の紺汁、洗水、^{あくじろ}灰汁、塵埃、に灌^{かんが}漑されるようなものだ。（「南小泉村」、5）

ところが語り手は、この問題において小百姓には、責任がないことや、自分も述べるようにこれは「都会」による汚染であることに少しも触れないことが注目すべき点である。この「川」というイメージは、小説において、醜悪の、病気にかかったような村空間を生成する役割を果たすことに違いない。ここで否定的側面が出されるのは、南小泉という村そのものだけではない。この一節では、町・都会の老廃物が排泄される芥川が記述されるところから、いきなり百姓に移っている。突然百姓の非独立性や都会への依存性の話に転換し、彼らは「都会の下^{したずみ}澱」として生計していることが述べられる。そして再び、村周辺の汚染というテーマに結びつくのである。この百姓と村という二つのテーマを結びつけることで目指されるのは、二つのイメージの同一化であろう。つまり、この汚い環境と「汚い」百姓は同一視され、両方とも都会のごみと位置づけられるのだ。あえて言えば、小説空間において、村

人は生命体ではなく、汚れた環境そのものに還元されるわけである。

さらに、都市対「田舎」、都会人对百姓の上下関係による位置づけは、支配階級と被支配階級に関するファシズム的態度によって支えられている。主人公は、被支配階級の存在を不変的・必然的とみなすファシズムのように、これやこれのような農村が常に都会の下^{したずみ}瀬として機能しなければならないというように受け止めている。

19世紀の都市では多数の市民の死を引き起こしたコレラなどの伝染病が発生し、こういった死亡率の高い病気に対する予防策として、ひろたまさきが「日本において肉体が初めて^{おおやけ}公の場で議論されることとなった時代」¹¹⁵と言う「公衆衛生」の概念の導入とそれに基づく対策が実施されるようになった。患者が出ると、「付近の交通は遮断され、石炭酸による消毒が行われ、患者自身は避病院へ隔離される」という^{やまい}「病」への対策を通じて創り上げられる公衆衛生の制度と衛生観念も、(中略)たちあられ¹¹⁶た。

日本の都市だけでなくヨーロッパの主要都市においても、衛生の始動により都市化システムが作動したのである。衛生の観念化過程において、「不潔」という観念が重要となり、「公衆衛生の開始と衛生観念形成は、「不潔」なものの排除へと向う」のである。公衆衛生が、「不潔」の集約点として「スラム」の存在を「可視化」するのである。つまり、「清潔」観念を「不潔」との対比で認識しており、「不潔」を排除しようとする、意識としても作用している」わけである。¹¹⁷

Mの勤務地であった「農村」も、大きな町の吐き出す芥川、つまり町の老廃物垂れ流される場所として、「スラム」と共通している。Mは都市空間で獲得した「清潔」、「衛生」の場としての都会と、そうでない場として、つまり「不潔」な、「病」に溢れる場としてこの農村を位置づける。

都市の周縁の「スラム存在の「可視化」は、「都市下層社会がそれ自体としてではなく」、負の要因のすべてを引き受け具体化している空間、負の価値の体现者として貧民、といった意味づけによるスラム・都市下層社会の再発見＝創出である。Mの「農村」や農民に対する偏見的な眼差しにも同じような要素が伺えられる。彼は「負の価値をこの地域に見出し、その反転した像を正の価値としたうえで自己の立

¹¹⁵ ひろたまさき、『日本近代思想体系 22、差別の諸相』、48 頁。

¹¹⁶ 成田龍一、『近代都市空間の文化経験』、10 頁。

¹¹⁷ 同前。

II. 4. 2. 「よそ者」における「衛生」という問題

「よそ者」においても、農村が衛生観念の形成していない場として登場する。例えば、村の泉のありさまは次のように語られる。

村内に水がないということはないが、井戸にも泉にも、朝晩問わずいつでも長蛇の列で、水を汲むのはなかなか大変だ。そこに沐浴をする年寄りや、掃除や料理のための水を汲む主婦、想像以上に汚い遊びをする子供たちがいる。時々洗濯しに川まで行くのを面倒くさがって、牛や羊に混ざって溜池で洗い物をする女性さえいる。（「よそ者」、41）

アヒメト・ジェラルは「村の生活でいちばん厄介な、そしてついに解決できなかった問題は衛生面の問題である」と述べている。

公衆衛生の実施されているイスタンブールの都会人としてのアヒメト・ジェラルは「清潔」であり、「不潔」な村人との間に差異をつけるだけでなく、「清潔」を自己定義の上で利用し、これを基準に村人と間に上下関係を築く。主人公は衛生のためエメティ婆さんに鍋や皿を水でなく熱い湯で洗わせせ、さらに彼女に「お前は全然顔を洗わないのかね」とずけずけと質問する。村空間や村人は、「不潔」であるがゆえに、「悪」として位置づけられ、排除意識が働き、「清潔」なものとしてアヒメト・ジェラルは自分や自分に属するものに貴族的特権を与える。彼は自分の母親を回想して、次のように言う。

白い靈魂よ！ここはあなたには似合わない所だよ。あなたはこの小石の上を歩いてはいけない。（中略）この石のベンチに座ってはならない。ここは汚くて、ライソール臭い。あそこのコンロから漂うのはあなたがその名前を諺にだけ聞いたことがあるであろう乾いた牛糞の燃料だ。あなたは何よりも大切だから。常に清潔で几帳面で、石鹼の爽やかな匂いのする母さんよ。あなたをこんなひどい所に置いてはおけない。（「よそ者」、120）

彼女は「白」の象徴する清潔無垢でか弱く、デリケートなイメージで創出される。一方、村は「汚い」、「臭い」、「黒い」というイメージをもって登場し、「乾いた牛糞」と同化されている。主人公の衛生意識は、「男尊女卑的」差別意識の形でもあらわれ、

¹¹⁸ 同前、11 頁。

この意識は彼が恋心を抱くエミネに対して働くのである。彼は彼女を手に入れたら「まず彼女をよく洗い清めたい」と言う。彼女を愛情の対象、同等な結婚相手というより、奴隷のように考えるのである。

＊

都会から隔絶し、工業地域でもない「よそ者」の村には汚染問題は見られない。衛生の問題はほとんど村人の汚さに焦点を集め、兵役へいった経験のあるメヒメト・アリ以外の村人は皆、衛生に対して鈍感と描かれる。こうして主人公はおそらく無意識的に、自分の役に立つものを自分の規準に合わせて改変するというオスマン帝国の伝統的外交手法を受け継いでいるのである。

II. 4. 3. 健康／病気という基準

M は外見に非常なこだわりを見せ、農民を観察している。彼らをを動物にたとえ、また身体的な不健康などを取り出して、彼らを「健康」な都会人と異質な他者と規定する。

II. 4. 3. a. 病の温床としての「南小泉村」

公衆衛生や衛生概念は、当時多数が犠牲となった「コレラ」をはじめとする伝染病の流行を契機に発達した。こうして衛生は都市空間において不可欠になり、それによって「正」の価値である「清潔」と、その対として「負」の価値である「不潔」という概念が発生したことをすでに述べた。帝国主義によって「発見」される「再暗黒」の地は、多くマラリアなど伝染病が発生しやすい土壌であったことも、「最暗黒」という位置づけを促した要素の一である。そしてMによって「南小泉村」に「発見」される「最暗黒」は、まさに病の温床として描かれている。

Mが村に来た5ヶ月目に、「デフテリアが激しく流行し」、患者の数が徐々に増加し、農村の成金である丹野の娘や、貧困を極める農民源作の娘おちうが病死する。またアメリカから治療のため村に戻り、後でMの親友となる「安達の文一」は目の疾患での視力が弱まる一方であり、その上片方の足が悪いという。

丹野は初対面の時、若干酒に酔って、Mに「何です、患者はありますか。悪いものが流行りますね。いや、然ぢやない。君等から見ると好いことが流行るんだっつけ」と軽口をたたく。丹野の指摘はあながち見当はずれでなく、Mの病人に対す

る眼差しは、経済的利益を前提にするものである。主人公は診察簿を見て、村の患者に関して次のように述べる。

孰れ、余り有難い病家ではない。数字は其日々診察料を書付けた控^{ひか}えで、見た所、多くも十銭を超えぬらしい。（「南小泉村」、6）

また、デフテリアが流行したときの患者に関して

何れも村で数えられる貧乏人ばかりだ。病気は治しても薬代は些つとも集まらない。診察料どころか、少し治りかけると薬取りにも来なくなるのが多い。（「南小泉村」、15）

と考える。この代診のアプローチからすると、病だけでなく貧窮もある種の罪である。彼はおぢうの死に際して、屈辱的なやり方で娘の治療費に金を貸そうとする丹野の勧めを断った源作に罪を着せるのである。酔っ払った源作は、「（丹野が）貸すという金も借りないで来たと云ふ」。そしてMに自分のとった行動を代理医師「の顔を窺いながら」弁解する。その直後に「その三日目におぢうは死んだ」という平板な表現で、源作の娘の死が読者に報告されるが、この言動には、突き放した中にも、「貧窮」や貧民に罪を追及する姿勢がみられる。

II. 4. 3. b. 病や身体障害の場として「よそ者」の農村

メヒメト・アリの母親は足を引きずっている。サーリー・アーガーの息子の一人は^{せむし}こ。私は直接見かけたことはないが、村長の妻は、8年前からずっと医学的には説明のつかない奇病にかかって苦しんでいるようだ。そのせいで彼女の腰は曲がり、手足は結び目のように変形して、解くことができない状態だそうだ。目を開いているのでかろうじて生きているとわかる（略）。その他にも、村には間違いが二人と小人が一人いる。（「よそ者」、35）

このように、アヒメト・ジェラルの農村にも病と身体障害のイメージが濃厚である。アヒメト・ジェラルは村のこの状況をその「暗黒」さの証左として捉えるだけでなく、自分の「戦傷者」としての特権性を相対化させる背景として考える。

他方「よそ者」において、農民のみならず「再暗黒」の場としての農村そのもの

も病気にかかったような雰囲気が出される。主人公は、村のポルスック¹¹⁹川と丘陵を次のように叙述する。

川の縁に溜まった濃い黄色の土は、腐ってまるで血栓のように凝り固まっている。川の水に手を浸せば、時間や季節に関わらず、水はいつでも膿汁のように生温かい。(略)それに丘はまるで「腫れもの」である。周囲を地平線に囲い込まれたこの丘陵の光景は、悩み苦しみのた打ち回り、生命を与えられたようだ。¹²⁰（「よそ者」、46）

意図的に嫌悪感を起こさせるメタファーを用いて自然風景が作り上げられている。「腐敗」、「血栓の凝固」、膿汁、「腫れもの」など、人間の肉体や体液に関わるこれらの語によって、怪我や病気を示唆する要素が自然に転移されるわけである。身体の傷つけられる潜在的な恐怖を煽るイメージを植え付けているのである。あるいはその腫れ物を切除し膿を搾り出す手術を受ける直前の患者のように、心細い心情が織り交ぜられていると見ることもできよう¹²¹。病人や身体障害者の多い村人たちと同様に、まるで自然も病に犯されているかのように描写する。そこで「再暗黒」のイメージは、病気の農民と病気の村というように相互補完されているといってもよい。

II. 4. 3. c. 「富」／「貧」の上下関係からみる「病」

文明と野蛮の分割の上での基準のひとつは、富有／貧困であり、富有は文明の価値としてたちあられる一方、貧困は野蛮の特徴としてとらえられていた。「南小泉村」においては、健康／病気、富有／貧困の両方とも都会・都会人に対して農民を野蛮、農村を再暗黒と位置づける上で利用される。先に見たように、貧困と病気の要素は結び付けられ、「最暗黒」の強力なマーカーとなったが、一方、物質主義を「負」とする価値観を持つトルコ文化において、「よそ者」では、貧困は非難・軽蔑の対象とはされていない。逆に悪役は村の高利貸しの成金サーリー・アーガーであ

¹¹⁹ この語は川の名前として「よそ者」の暗い自然空間の設定にふさわしい動物名である。Porsuk はトルコ語の文脈では、「醜さ」などというコノテーションを持つ動物である「アナグマ」である。

¹²⁰ 下線は引用者による。

¹²¹ チャナッカレ戦争で、アヒメト・ジェラルは砲弾の破片で右腕に負傷し、その腕を切断することになる。この手術の恐怖感、右腕を失ったことの悲哀、入院中の憂鬱・・・これらがアヒメト・ジェラルの心情に及ぼした影響が、彼の手記における村の描写にも色濃く影を落としているのは想像に難くない。

る。

「南小泉村」で病は貧困や無知の必然的な結果として捉えられている。「富」が健康や治癒を提供するとして高く評価され、「貧」は治癒に値しないとして物質的ファシズム的貧／富の上下関係の構造が作り上げられる。これをさらに規模を広げると、資本の集中する都市と資本の面で立ち遅れる農村を包摂する枠組みの中で、前者は健康が増進され、後者は傷病の温床として立ち現れる。これは都会の文脈での富－健康と結び付けられる都市空間・都会人と、貧－傷病と結びつくスラムおよびその住人という二項対立構造をモデルにしたものである。それに対して「よそ者」は、健康の問題においては貧富の格差には言及されていない。それよりも、戦争という非常事態を背景にしているため、アヒメト・ジェラルは傷病、身体障害をむしろ戦時イデオロギーの枠組みで捉える。従って、戦争に献身的・協力的態度を取った村人（やその肉親）の傷病や障害は「神聖」とカテゴライズし、非協力的村人（やその肉親）のそれに対しては、主人公は無関心あるいは黙殺を示す。前者の例として、アヒメト・ジェラル自身やギリシャ軍の兵士の暴行で死亡したハサン、後者にはサーリー・アーガーの「セムシ」の息子、ベキル軍曹の盲目の娘、村長の恐ろしい「医学的には説明のつかない奇病にかかっている」妻などが例として挙げられる。

M は立身出生を望み、富者になるということを理想とする。彼のもう一つの夢は、「都会人になること」である。それに対してもともと貴族的であり都会の富者という特権的な立場にあったアヒメト・ジェラルは、富や「都会人」には特別な価値を見出さず、関心を示さない。その上、Mには「富者優先」や都会と都会人を善良とし、それから離れるほど悪という差別化基準が明確であるのに対して、アヒメト・ジェラルは、ケマリズムのミリタリスト・ナショナリズムを差別化の判断基準とするわけである。

II. 5. 1. 「南小泉村」における農民の外観による価値化—動物比喻

「南小泉村」において、外観的美醜も、野蛮な農民像の創出の上で用いられる。その上、否定的コノテーションを持つ動物の特徴を農民へ転移することによって、彼らの外見や行動の「卑しさ」が語られる。

「農村」の住民を「地を這う^{むし}爬蟲の一生、塵埃を嘗めて生きて居」（「南小泉村」

3) るとして^{はちゅう}爬虫類や昆虫に喩え、「からだは立って歩いても、心は多く地を這つて

居る」(「南小泉村」、3)とこれを反復強調する。また彼らの身体的特徴を、好んで昆虫や動物になぞらえる。農民の強靱な胃腸を「牛の胃袋(4)」に、視線を「人を畏れる獣の目」(「南小泉村」、4)あるいは「小さな狐目」(「南小泉村」、12)、そして「^{ひどい}甚い猪^{いのししくび}頸の、脚の短い小男」(「南小泉村」、28)というように、動物の特徴を農民の形容に用いている。外見から主観的に動物の比喻によって農民のイメージを作り上げるわけだが、比較対象は動物だけではない。次のような、人相の出生決定的な発言も見られる——「百姓には百姓の紛れぬ骨相がある。卑しい顔立ちで直ぐ知れる。」

また南小泉の村人はただ身体的な「欠陥」を持つだけでなく、「感激が無い、興奮が無い」といって精神的、感情的にも欠陥人間として描かれる。主人公によれば、「^{ひい}秀でる特徴」が見られないのである。村人の「皮膚が黄色に黄ばんでいる」こと、「大人」の「十人に八人は土^ふ不^ま踏^ずが無い」などという不健康な特徴、は「栄養の不良」や「(栄)養価の低い過食」に由来するという。始めの「壁土」の比喻も「黄ばんだ皮膚」に通じるものである。この他にも、百姓の「口元の^{しだらな}し次無さ」や「鼻付の賤しさ」、そして「土^{トルコ}耳^{ミミ}古」に存在する聞き及んだジプシーを人種差別の引き合いに出して、その卑しい目付きを思い出すという農民たちの茶色い小さな瞳に言及する。

まるで人を畏れる獣の目だ。口元に愚鈍らしい薄笑を浮べて、恐ろしく茶色な小さい目を、始終悪凄さにキョトキョト動かして居るのに遇ふと、僕は毎も^{いつ}多く土耳其にあると云ふ、賤属ジプシイの眼を思出さずには居られ無い。(「南小泉村」、4)

ところが彼は自分が見下し恐れる自分の体に、小百姓と「同じ血が流れて居る」ことを「信じたく無い」のである。「特定」の、つまり自分の価値規準にふさわしい外見を持つ「人種が優秀であるとみな」し、それによって「人間の性質を決定する」¹²²彼は、村人の「醜」という特徴を彼らの生涯に転移し、このパラグラフを次のように結ぶ。

¹²² リーダーズ英和辞典、Racism の定義から。

僕には醜いものを一種の罪惡と咀^{のろ}った時代もある。醜い、醜い、百姓の生涯はその醜い生涯だ。
（「南小泉村」、4）

II. 5. 2. 「よそ者」における「動物比喩」と「美観」

「よそ者」にも人間の外見的「美」が基準とされ、動物比喩も見られる。主人公は占領軍や好ましくない村人を、トルコ語のコンテクストではネガティブなコンnotationを持つ動物になぞらえる。だが、彼自身は村空間において、（自分と同じような救国戦争の支持者、トルコ人の士官などを除いて）人間よりもむしろ動物に親密さを感じるようになる。これはある意味の矛盾であるが、モランの言葉を借りれば、「従来著されたどの小説の中でも、人間を語るのにこれほど多数の動物の比喩が用いられた作品はないだろう。」¹²³

他方、「よそ者」は演繹^{えんえき}的な方法によって展開し、動物の比喩が、一般的な抽象から出発し、特称的に集約してゆくようである。戦争で障害者になったという理由で陰鬱な心境にあるアヒメト・ジェラルの悲観的なモノローグには次のように表現がある。

人間が最も悪く、最も卑しく、かつ最も愛想に乏しい獣であることもよく認識していた。（「よそ者」、34）

そして動物の比喩は一般的、抽象的な「人間」からヨーロッパの所謂文明国の人びとを修飾するのにも用いられる。

（中略）私は見た。文明の偉大なる代表者たちが皆で軍隊の縦列行進をしながら私の前を通過して行ったのを。ラシーヌ、ボルテール等のフランス人、ベーコン、シェイクスピア等のイギリス人や、才能に満ちたイタリア人・・・雷電を征服することに成功した民族の代表者らが、それぞれ自国に独特な制服を身につけ、独特な色使いや話し方や笑い声を上げながら、私の前で軍隊の縦列行進をした。何と不法な、何と忌々しく、醜い奴らだ。まるでゴリラの群れみたいな感じだった。¹²⁴（「よそ者」、34）

そして、動物（あるいは獣）の比喩の範囲は徐々に狭められ、トルコの村人、ま

¹²³ 同前、209~210 頁。

¹²⁴ 下線は引用者による。

たはアヒメト・ジェラルが住む村の村人を指すようになるのである。そしてこの比喻は「村人」という制限された範囲で頻繁に生成されるようになる。

村人は「己の巣の中に隠れているビーバー」（「よそ者」、203）、村人が住む家々は「モグラの穴」（「よそ者」、56）、さらにイスマイルはびっこのヤギ、若いゴリラ、折檻された猫に、サーリー・アーガーは罠にかかったジャッカルに例えられる。さらにサーリー・アーガーの行為に関する、「私の腕に獣のように噛みついたのだ」「密かに、そっと獲物に近づく狐の歩みをみたことがなければ、サーリー・アーガーの歩き方を見るが良い」などのような比喻もされるのである。¹²⁵

アヒメト・ジェラルのイスマイルに対する特別な恨みは、彼を記述する言葉において明らかである。兄であるメヒメト・アリが入隊させられてからの彼について、次のように、生理的な嫌悪感を滲ませる形容がされている。

まるでイスマイルを束縛する呪縛が解けたようだった。または、殻が破れて、中から生まれた未知の生物は、^{かたつむり}蝸牛のように怪しげでぬらぬらした、人目を忍んで動き回っているようなものである。それに触れると固くなり、触覚を伸ばして、最後にあなたの手に粘液をすりつけてゆく。（「よそ者」、96）

また村の「高利貸し」であり、後でお金を狙ってギリシャ軍と協力するサーリー・アーガーの「セムシ」という身体障害を持つ息子が、元兵士で救国戦争に「無関心」なベキル軍曹の盲目の娘を、彼女の不自由を利用して強引に性交に誘うシーンは作品の最も「忌々しい」描写の一つである。彼の行動は「まるで蛇が蛙を飲み込もうとするような、巨大な蜘蛛が獲物の蛾を糸でがんじがらめにするような感じ」（88）である。¹²⁶

＊

こうして、「南小泉村」と軌を一にするかのように、動物の比喻を通じて村人の「醜」のイメージが強化されるわけである。だがこれは村人の一方的蔑視の上で行われるのではなく、「醜い」獣のような村人たちは、エミネとハサンという美しい作中人物の「対」の役割を果たすと思われる。この二人は、個人的・積極的努力によって獲得した特質でなく、主に「美」という「生まれつき」消極的な特質を基準に、

¹²⁵ Moran, Berna, *Türk Edebiyatına Eleştirel Bir Bakış I*, 212 頁.

¹²⁶ 同前。

比較的文明に相応しい人物、として描かれるものである。つまり主人公はこの二人に対する視線はナショナリストのものであり、彼らを近い将来の理想的なトルコ人、トルコ国民にふさわしい「美男美女」の若者として想定しているようだ。つまり彼の「貴族階級的美観」の基準が、ナショナリズムの理想的国民という概念に転移・適用されている。

また「よそ者」には、「南小泉村」と違って、「民族主義」に基づく人種差別の色合いは伺えない。多民族的空間に生存している「よそ者」の主人公には、民族より歴史的「普遍的差別基準として、「洞窟住居時代の原始人」といった比喻を、村人に対して用いているのである。

「醜」「野性」といった要素によって「田舎」や「農民」がある種病気にかったようなネガティブなイメージが補完される点で、「よそ者」と「南小泉村」は類似する。しかしアヒメト・ジェラルの基準は村人が国民意識を共有するかどうかというナショナリストのものであり、かつ彼の貴族的身分によるエリート意識の影響も見られる。これは、Mが単純な「美醜」の区別によって「地方」や「百姓」は支配されるべき、排除されるべき消極的「対象」として想定しているのとは対照的である。Mのこのような態度には、当時の国事や産業化の中心となった「都会」の重要性や、「軍需を基礎とする工業化計画の資金調達のため、農民は情け容赦なく徴税され苦しんだ」¹²⁷事態をもたらした明治政府の「地方」に対する立場との平行な関係が見られる。

II. 6. 中央の特権化手段としての「標準語」

II. 6. 1. 「南小泉村」における「都会人化」の手段として「標準語」

都会の地方に対する優越に触れたが、日本では明治維新以降、言語が国民化や中央化の手段としての役割をはたした。「南小泉村」では伝統的な針灸治療を行って生計を立てている竹屋ダン所「総領」で学生の玄吉という人物が登場する。彼は「都会人化」に失敗した。その理由の一つは、彼の操る東京弁に残る訛りである。彼は村で退屈し、自分と同じ医療関係者のMを尋ねる。だがMの彼に関する最初の印象は次の通りである。

¹²⁷ Anderson, Benedict, *Imagined Communities*, Shoken Books, 1983／ベネディクト・アンダーソン、『想像の共同体』、白石隆・白石さや訳、リプロポート、1996、163頁。

舌の音を強く響かして東京の辯を真似して居るけれど、肝腎の訛が少しも抜けない。セがシェになつたりスがシになつたりする。言葉の尻の御座すが癖らしいが、その又御座すがごだんすと聞こえて可笑しい。(「南小泉村」、30)

近代化を推し進める日本において「言語」というものは「国民」の「精神の鑄型」として利用された。近代化する日本において、共通語の欠如は大きな問題となり、「日本国内で地域ごとに言語が異なり互いに意思疎通を欠くことはしばしば指摘」¹²⁸されるようになった。標準語の必要が明らかとなり、「全国交通が発達し『文明化』が進行するなかで『国中ノ言語モ終ニ一ニ帰』することが必然であると認識」¹²⁹され、「首都の言語」が「標準語と」制定される。「標準語」推進に献身した上田万年によれば、「標準語」は各方言より正しく超絶して、しかも其等の上にある各実在の心髄を蒐集採択し、そして「方言の融和統一を固定すべき者」¹³⁰である。標準語として「東京語」が制定され、東京語はいささか過大に評価されていようが、これまでの『言語多様性』が否定され、「均一化」が支配的になっていく。そして東京語が全国的に共通の標準語として確立されたことによって、「首都」の位置も変わり、首都は「田舎」あるいは他の地方に対しての優位性が強調されることになったのである。

「模範」としての「標準語」は規範となり、その他の言語は「方言」として「標準語」の下位に置かれることとなった。また、「首都」東京の言語が「標準語」に選定されることにより、東京の位置は特権化され、東京のみが中央となり、他はおしなべて「地方」として概括され、その上で東京との「距離」により序列化される。

「首都」東京の優越は、日々用いる言語を通じ絶えず再確認され、「首都」を支える精神史的根拠が醸成されたのである。

「キナカコトバ」としての方言は、規範に近づくために「矯正」すべきものとなり、学校教育現場が直接の「治療所」とされた。すでに一八七二年の学制で「会話」科が設けられるなど、学校教育では会話が重視されていたが、教科書の会話体は東京語が採用され(西邨貞、『幼学読本』一八八六年など)、国定教科書編集にあたっては、「一地方ノ方言ト野鄙ニ渉レル者ヲ避ケ」ることが明示される(『尋常小学校読本論集主旨』八七年)。全国的に、均一的に、制度によって東京語が教室にもちこま

¹²⁸ 成田龍一、『近代都市空間の文化経験』、56頁。

¹²⁹ 同前、56頁。

¹³⁰ 同前、57頁。

れ、授業も「東京ノ中流以上ニ行ハレ居ル正シキ発音及ビ語法」で行うこととした（『尋常小学国語科実施方法要領』一九〇一年）。¹³¹

そこで、「標準語」を訛なしにうまくしゃべれないという理由から、Mにとって玄吉は「都会人化」に失敗した、成田の表現を借りれば完全に治療されていない「病者」なのである。

II. 6. 2. 「よそ者」における言葉の問題

その点、「よそ者」では標準語という問題はほとんど浮上しない。主人公と村人の間にコミュニケーションの問題があっても、これは村人たちの無教育に由来する問題である。つまり、彼らの間に言葉の壁はないが、アヒメト・ジェラルは教育を受けていない村人と政治、ナショナリズムなど抽象的概念に基づく会話を交わすことができないのであった。それに対して「標準語」と「イナカ言葉」の対立、あるいは訛りによる嘲りなどは一切浮上してこない。「よそ者」の次の場面を見てみよう。

その時、トルコ語の人声が流れてきた。(略)「この村には誰もいないのか」(略)変に訛っていて、ガラタ地方の訛りのようにも聞こえる。これがギリシャ人のアクセントだとはっきりとは決められない。この声の持ち主はアルメニア系であるかもしれないし、ユダヤ系かもしれない。トルコ語がこのように歪み、稚拙に発音されるのを聞くと、何とももの悲しい感じだ。まるで残酷で悪戯な手が私を掴み上げ、揺さぶっているようだ。私たちの体の最も敏感でデリケートな部分に爪を立て、傷つけるようだ。(「よそ者」、177)

これは、アナトリアの中部へ進むギリシャの部隊が村に入り、アヒメト・ジェラルの家に侵入する直前の緊迫した場面だが、ここに再びトルコの重層的な社会構造が見られるのだ。言うまでもなく、アヒメト・ジェラルの不満は、言葉をうまく「İstanbul Türkçesi」という「標準語」に合わせて完璧に発音できないことではない。彼は「トルコ」で長い間共存した少数民族ギリシャ人によって「裏切られた」ことに対する悲哀、失望感を表しているのである。

「よそ者」での言語の問題は、「南小泉村」の「東京言葉」と「イナカ言葉」を対立させるアプローチとは明らかに異質である。それではなぜ、「農民」に対して否定的な「よそ者」で、「南小泉村」のような言語に見られる中央と地方の対立が問題に

¹³¹ 同前。

されないのだろうか。

日本の近代化過程における言語改革はトルコの言語改革と様々な面で異質である。例えば、トルコでは共和国創立に合わせて600年来使用してきたアラビア文字システムを廃止し、ローマ字のアルファベットを受容したが、日本は漢字という中国の文字システムを、明治維新以降多少の変更を加えながら現在に到るまで変わらず使用を続けている。もう一つの基本的な相違点は、言文一致運動におけるものである。言文一致運動は双方に見られたが、日本の言文一致は、「書き言葉」を中心にする、すなわち「言」を「文」に合わせる側面が濃厚であった。それに対してトルコの「言文一致」運動は、公定のオスマン語からアラビア語、ペルシア語の語彙的、文法的影響をはずし、民間の言葉を中心にしつつトルコ語の色づけを取り出すという動きであった。つまり「書き言葉」を「話し言葉」に合わせる手法であった。

しかもこの動きは日本と違って、トップ・ダウン式のものでなく、19世紀後半において新聞記者／作家によって始められ、「トルコ人主義」というナショナリズム運動を強化する最重要要因となった。この時代、民間の言葉、「イナカ言葉」は、日本と対照的に、尊敬されるものに変化していったのである。学校やナショナリストの協会などにおいて「純粋な」トルコ語が教えられるようになった。

次の章で取り上げる「支配の手段である言語」は日本の場合「中央化」や「田舎」の「被支配化」・「消極化」の上で重要な役割を果たしたのに対し、「言文一致」の民間言葉を基にする構造によってトルコでは民間を尊重する傾向が出現し、「中央」と「地方」の関わり方は、日本ほどの主客・上下関係によるものではなかった。そこで、Mの「自己都会人化」や「農民」に対する無条件の敵意に対して、「よそ者」には村人は一方では否定的に扱われるが、国民化の上での重要視の色合いも伺えられるものである。

II. 7. ナショナル・アレゴリーとしての「農村小説」

帝国主義は、植民地主義と共に形成したことは周知の通りである。帝国主義の主体は、宗主国のエリート意識に加えて「衛生」「モラル」などの観念によって被植民地を差別化し、これによって上下関係を正当化、固定化した。被植民地の住民を手なずけるべき獣に近い野蛮人として位置づけ、帝国主義の国々はそれぞれ異なる方法で被植民地住民を同化していった。その最も有効な手段の一つが、強制的言語教

育であった。国際的枠組みでの植民地／被植民地と、国内の「都会」と「地方」のかかわりは拡大モデルとミクロコスモス^{マクロコスモス}の関係にある。誤解を恐れずに言うならば、都市と地方の関係を大きく書いたのが、帝国主義なのである。

日本は1868年以降の近代化過程において、欧米の帝国主義に飲み込まれないように、または肩を並べようと、自ら帝国主義を標榜し、東アジアにおいて植民地化政策を軍事的、外交的に実行したのである。200年以上にわたる鎖国によって世界から孤立し、国際政治における未経験、未熟さや、その結果として不安定な自己定義の問題を、「万国公法」など「国際法」の受容、急激な学習と研究によって乗り越えることをはかったのである。「万国公法」による概念である「文明」、「未開」などの西洋的・植民地的概念が、日本国の自己定義や自己価値化の上で適用された。これによって日本は、大日本帝国を自認し、理論的にも実践上も植民地化政策を推進することによって「文明的」宗主国となり、「脱亜入欧」をはかった。他方、西洋化と並行して都市化が進み、東京は一極集中型の中央都市としての地位を徐々に確立し、地方に対して特権的権力を持つようになった。このような日本における西洋理論をモデルにした試みには、西洋の帝国主義国家のように数世紀にわたる外交経験やそれによって紡ぎ出された自己定義の基盤が未熟で、「脱亜」に見られるように自己を他者化し、自己を否定する屈折した方面に展開していったわけである。いずれにしても、日本においても、宗主国としての日本とその植民地との関係と、「中央」としての東京と「地方」の関係の間にも、拡大モデルとミクロコスモスの相が見られるのである。

イギリスとアフリカの植民地関係と、ロンドンとスラムの上記のような関係を東京と「南小泉村」に適用しようとするが、自分は無意識的に、別のアレゴリーの要素となる。もともと都会人でない彼の「田舎」の体験は、帝国主義に到る国際関係の長い歴史を持たない日本の植民地化政策のと類似が見られる。

Mはおそらく、マスメディア・出版物や学校教育で彼に植えつけられた都会・中央に関する「論理上」の「都会人意識」をもって「農村」に最暗黒な場を発見するのである。彼の目的は、「自己定義」することであり、農民を「未開人化」することによって自分の「都会人化」を進めることである。その上で彼の農村や農村を価値づける「衛生」、「健康」、「富」、「美」、「外見上の人間性」、「標準語」など、都市空間、植民地主義、エリート階級に属する要素が基準になる。国の都市化・中央化、

「帝国化」、「資本主義化」と並行した意識を持つ彼は、都会人でなく、貴族でなく、富者でもないが、彼にとってのその理想的観点から「田舎」と農民を見下しているのだ。そういう意味では彼は同じ枠組みでの東京と、国際関係の次元での日本のシニフィアンとして機能するのである。日本の「脱亜」に従って彼も「脱地方」をはかり、「半開」から文明への移行をはかっているのである。

それに対して、最近までの大国の上層階級の軍事エリートであったアヒメト・ジェラルにも、国のあり方と対応する態度が伺える。だがオスマン帝国は600年来継続する帝国であり、しかも地理的にヨーロッパにも広大な領土を所有する国であった。そこでアヒメト・ジェラルには貴族的・エリート意識による農民を蔑視するような態度が見られる一方、他方ではナショナリストである彼には、片寄ってはいるものの、実は「国民」を保護する姿勢も見られるのである。

アヒメト・ジェラルも、自国のアレゴリーとして登場する。すなわち彼は、帝国の首都であったイスタンブールと、救国戦争の中心であったアンカラという二つの都市を内在させた存在であろう。彼の村に対する非情な態度は、イスタンブールの都会人意識からくる部分が多い。特に軍事エリートであるパシャの息子という自負、特権意識が彼をして自己を村人の上位に立たせる。M とアヒメト・ジェラルの相違は、彼が実際に都会の出身者であること、そして自国が歴史的に重要な帝国であるという自己同一性を持つ一方、M は地方出身者であり、西洋を模倣した帝国主義を掲げる日本の薄弱な自己定義を個人に反映させている点である。他方、アヒメト・ジェラルのナショナリズムは、ヨーロッパの圧力や、数世紀にわたる西洋化過程の経験の結果、国家から国民というトップ・ダウンでなく、知識階級から国家への働きかけという、ボトムアップによって形成されたのである。

他方アンカラは、植民地化、帝国主義化に対する戦闘の拠点都市であった。従ってその都市のイデオロギーと自己定義はアンカラの都市化当時から明確であった。アンカラの反帝国主義もアヒメト・ジェラルに反映し、自己定義のため農民を対象化する M と対照的に、彼には農民を把握し定義する努力も見られる。これには、すでに述べたように、言語のあり方の影響が大きい。日本では言が文に一致するが、トルコでは文が庶民の言に一致する。文が中心的であった日本では天皇制が強化する一方、言が比較的重要であるトルコのナショナリスト運動は、帝国の崩壊や革命の背景を提供した。M がまるで被植民地住民であるかのように捉える村人との間に上下関係を築こうとする一方、アヒメト・ジェラルは国民とみなす農民に救国のプ

ロパガンダをする。しかし、そこにはまた、イスタンブールから受け継いだエリート意識と指導者たる士官階級としての自負が濃厚であるというのが、彼の全体像であろう。



第III章「田舎教師」と「よそ者」における戦争と、それに対する「田舎」住民の態度—メディアと教育から見る両国における国民意識の問題

はじめに

戦争という、国民の安全や自由を脅す出来事に直面し、「田舎教師」の「田舎」社会が見せる「国民意識」に基づいた積極的支援的な態度に対して、「よそ者」の農村社会が示す無関心や「非国民意識」的な態度の違いは何に起因するのであろうか。本章ではこの問いに対する回答を探るべく、国民意識のイデオロギーを庶民に広め植え付ける役割を果たすメディアと教育の二つの要素に注目する。メディアと教育の作用を考察し、近代国家の前提あるいは基盤としての「国民」という意識が、「よそ者」の「田舎」社会において形成されない社会構造的な特質を分析する。

近代国家は教育とメディア（報道機関）に関する施策上顕著な共通点を持つようになる。それは、「人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ」るような「価値を実現する活動」¹³²である教育と、「文化やイデオロギーに濃厚に色づけられた」伝達「システム」である¹³³メディアは、どちらもある「主義・思想の宣伝活動の」役割を果たすようになるということである。後に取り上げるトムソンも指摘するように、近代的なイデオロギーの普及を可能にしたのは「新聞産業の拡大と識字率の向上」である。

「よそ者」と、その比較対象として扱う「田舎教師」においても、メディアと教育が重要な要素であることは言うまでもない。どちらの作品でも、「戦争」に関する情報やメッセージはほとんどの場合、報道機関を通じて、つまり新聞などによって伝達されるわけである。他方、両作品においての「田舎」の住民の戦争に対する態度を規定する要素として重要なのは、教育である。

III. 1. 2. 「田舎教師」と「よそ者」に見られる「メディア」と「田舎」住民の相互関係

日露戦争を「田舎教師」の要点の一つである戦争報道というメディアは、日本に

¹³² 『広辞苑 第五版』、岩波書店、東京、2003.

¹³³ 石原千秋、木股知史、小森陽一、島村輝、高橋修、高橋世織、『読むための理論』、世職書房、横浜、2001、334~335頁.

における報道機関の成立や展開過程において重要な役割を果たしたのである。あえて言えば、戦争はメディアの産業化をもたらした要因である。「明治日本の性質を、何度かにわたって、決定的に変える契機となったのは、常に戦争報道であった。明治十年（1877年）の西南戦争に従軍した福地桜痴は、現場に身を置いた記者の位置から戦闘状況を報道する独自の文体を創り出し、新聞における報道文の基礎を確立した」記者である。この報道文によって、「御用新聞として必ずしも、評判のよくなかった「東京日日新聞」は多くの新しい読者を獲得し」読者数を増やした。他方「明治二十七年にはじまる日清戦争」は「政論中心の大新聞と、つづき物や三面記事中心の小新聞との差異をなくさせ」るこのになったのである。それがゆえに「電信という最新メディアと結合した、**戦闘**報道文は、新聞の経営が商売になることを、多くの人々に印象づけ」ることになったわけである。したがって「戦争報道」というのは、概して「新聞というメディアを報道中心的なものに変えていった」¹³⁴わけである。「田舎教師」においても見られるとおり、新聞の戦争報道は、国外での出来事であるがゆえに肉親を兵士として送り出した肉親たちは、夫や息子、兄弟の生死を知る唯一の手段として「電信を使用でき、官報をいちはやく入手でき、特派員を現地に送ることの出来る新聞というメディア」¹³⁵の価値を知った庶民に多大な影響を与えて行ったのである。

III. 1. 2. a. 清三の反戦的の態度の変化

41章において、風邪で床につくようになり、痩せ衰え青白い顔の清三が親友の郁治を見舞う。彼らの会話は病気のことから東京の新聞報道へ移行し、宝探しなどの他愛のない三面記事を経て、日露政府間の満州、朝鮮市場の獲得などをめぐる「日露談話」が話題になる。郁治は交渉の難航具合に触れ、戦争の勃発の可能性について述べる。清三は国家の大問題としてこれらの報道を熱心に追っていた。しかし清三は当初、「そんな大きな戦争を始めてどうするんだろう」と、いささか消極的な構えを見せている。

戦争は次に、明治37年1月1日の彼の日記の中に、日常生活についてのメモに混じって一つの感想として出現する。清三は戦争の危機が徐々に顕在化していることを

¹³⁴ 小森陽一、「変死への欲望―戦死報道と『軍神』神話の成立―」、『文学』、季刊、第5巻第3号、1994、夏、54頁。

¹³⁵ 同前。

次のように書きとめている——「日露の危機、外交より戦期に遷らんとすと新聞紙しきりに言う。吾人のもっとも好まぬ戦争はついに避くべからざるか。」

帝政ロシアと満州、朝鮮をめぐる交渉は行きづまり、日本政府は明治37年2月にロシアとの国交を断絶し、宣戦を布告する。「田舎教師」の44章は、この日露開戦のニュース、つまり旅順での連合艦隊の主力によるロシア艦隊の三隻を撃破、連合艦隊の一部が仁川で二隻のロシア軍艦を排除するというニュースの伝達で始まる。この二つの報道は「急雷のように」人びとの耳を驚かし、紀元節に清三の学校の校門に「日章旗が立てられ」、また「講堂からオルガンが聞こえ」てくる。

東京の騒ぎは日ごとの新聞紙上に見えるように思われた。一月以前から政治界の雲行の速やかなのは、「田舎」で見えていても気がもめた。(中略)湯屋でも、理髪舗でも、戦争の話は出ぬところはない。憎いロシアだ、懲らしてられという爺もあれば、そうした大国を敵として果たして勝利を得らるかどうか心配する老人もあった。子供らは旗を拵えて戦争の真似をした。('田舎教師'、186)

このように、新聞記事は、平常静かな「田舎」空間に忙しない雰囲気醸し出し、その日常を沸き立たす役割を果たしている。旅順と仁川の海戦の情報は「田舎」で交換される。新聞紙上では「二号活字」(サイズ1cm強)がよく見られるようになり、それ以外にもこの戦争に関する「いろいろの計画」や「風説」が連載されるようになる。新聞は「町から町へ村から村へ配達」され、「田舎」社会においても話題や嗜好を形成するようになる。人々は銭湯や床屋での話題から子供の遊び方に到るまで、戦争は一種の熱病のような勢いを以って人々の間に浸透してゆく。

しかし新聞による戦争報道が影響し変化を引き起こしたのは「田舎」の住民よりも、戦争に対して当初冷ややかで懐疑的な主人公により明らかである。戦争勃発の可能性に対して「そんな大きな戦争を始めてどうするんだろう」と反応し、そして危機が徐々に顕在化していることに関して、日記に彼が「もっとも好まぬ戦争はついに避くべからざるか」と書きつける主人公により明らかである。

清三は当初戦争に対し否定的あるいは懐疑的であったが、後で見るように、ついには国のために死ぬことを望むまでに驚くべき精神的変化を遂げることになる。主人公のこの逆転に関して著者はその報道との因果関係に直接触れることなく、この変化が44章から46章にかけて、つまり1904年の冬から春先にかけての短い期間にまるで一瞬にして生まれたかのように実現させている。だが、「旅順仁川の海戦があったから、静かな「田舎」でもその話が到るところで繰り返され」「町から町へ村から

村へ配達する新聞」による戦争報道だけがその要因ではなく、他にもう二つの要因があると思われる。一つ目は、通勤途中に見かける召集されてゆく男たちとそれを見送る関係者たちの光景である。召集令が下り、村役場などで入隊の手続きがはじまり、首都からのこの命令は各戸に伝えられ、二十歳以上の男たちは新兵として補充されることになる。この若い男たちは「父母妻子に別れを告げる」余裕もないほど急ぎで駅に向かう。新兵の「一包の荷物を抱えて急いで国事に赴く姿が続々として見られ」る。そして

交通の衝に当たって町々では、いちはやく国旗を立ててこの兵士たちを見送った。停車場の柵内に町長だの兵事係だの学校生徒だの親類友だちだのが集って、汽車の出るたびごとに万歳を歓呼してその行を壮にした。（「田舎教師」、186）

これは「ネーションとナショナリズムは、『自由主義』、『ファシズム』と同類として扱うよりも、『親族』や『宗教』の同類」というアンダーソンの定義に合致し、国家に属する町長、兵事系と、生徒たちという兵士と直接関係しない人々が親類友だちと共に親族のごとく一体になって「万歳」と歓呼するという、宗教儀式にも似た行為である。清三はこういったナショナリズムによる感激や興奮をとまなう国民の一体化、家族化を目の当たりにし、深く印象づけられ、戦地に赴く兵士は病身の彼にとって妬みや憧れの対象となるのではないかと思われる。

そして二つ目の要因は、学校に漂い始めるナショナリストの雰囲気である。「学校と国民意識」の問題を次の章で詳しく取り上げるが、清三の変化にフォーカスすることにするなら、変化の兆しは学校の場面にある。「敵の浦塩艦隊が津軽海峡に襲来して、商船奈古浦丸を轟沈したという報」に際して、校長は地理を確認するために大きな日本地図を壁にかけ、教師たちが集まるのである。ここで清三は「浦塩から一直線にやってきた敵の艦隊と轟沈されたわが商船とを想像して」長らく地図の前に立ち尽くすのである。この時点で戦争に対する彼の懐疑心が、ナショナリストとしての共感と関心に移行してゆくのがわかる。

メディアによる戦争報道やメディアによる鼓舞^{こぶ}もあったであろう徴兵見送りの雰囲気、学校のナショナリスト的な空間への転換という要素が相まって、清三はそれまでと異質な世界に入っていく。彼を囲い込むこの濃厚な国民主義的な圧迫的条件が創り出した空間は、不可避免的に、戦争・非暴力主義的な立場に立つ彼を變形さ

せ、この病弱の若者から情熱的なナショナリストを生産するわけである。

III. 1. 2. b. 日露戦争の戦争報道の言説について

当時の新聞による戦死者に関する報道という問題に、特に広瀬中佐の戦死やそれ以降の過程の報道に注目して、日露戦争時、国家によるプロパガンダの上で宗教的要素のあり方を分析する。そして、小森陽一の小論「変死への欲望」を利用して、「田舎教師」において頻繁に反復するテーマであり、日本のナショナリズムの構成要素の一つでもある「戦死」の神聖化を、歴史的文脈の中で検討する。特に当時の新聞報道の機能のし方や、「田舎空間」に形成する宗教に絡んだ国民意識の把握をはかる。

＊

日本における戦争報道の言説は「レベルを異に」し、「重層的に交錯する」複雑な構造を持つものである。そして、報道は主に五段階で作用する。第一段階に、官報として報じられる数字を中心にする戦闘について概略的な報道がなされる。次に第二段階は、戦傷者の固有名詞と所属部隊などの情報である。第三段階では、戦場に派遣された特派員から情報が入ってきて、特にめざましい働きをした兵士たちの行動が記述されるのである。次の段階では、詳報に基づいて、戦闘場面の部分と全体が、複数の体験者や目撃者の証言を基にして再構成され、戦闘光景はまるで活劇のように描かれ、死に様が壮絶であるほど情報価値の高いものと考えられる。第五段階では、戦死した兵士たちの履歴、遺族の情報、直筆の遺墨などが掲載されるのである¹³⁶。

この雛形は日清戦争時に確立し、特に第五段階の個人情報に関しては、日露戦争当時までには更に手が込み、兵士や士官たちのプロフィールは前もって準備され、彼らの戦死に際して、調査時間を省いてすぐに掲載にまわせるような手はずが整えられたのである。

これを基に、小森は「新聞報道」というメディアの、当時の影響性や勢力の規模に注目する。1894-95年の日清戦争を新聞読者として経験したり、読者として情報を獲得していた兵士たちは、「自らの戦死や負傷」そして「さらに軍功について、そ

¹³⁶ 小森陽一、「変死への欲望——戦死報道と『軍神』神話の成立——」、54~55頁。

れが新聞に発表されるものであるという」ことをあらかじめ意識するようになっていたという。かつまた、「新聞で報道されるような行動をしないかぎり、軍人としての名誉はもとより」、経済的な面でも、つまり「年金や恩給、昇給その他の履歴を得られないことが」兵士たちに「自覚されてい」て、ある種の社会的圧迫として機能したわけである。そこで、「日清戦争とはくらべられないほどの、おびただしい戦死者を生んだ」¹³⁷日露戦争は、死者数だけでなく、「大規模な報道体制がしかれていた」「地方新聞まで系列化され、戦争報道に英雄として登場することは、地元での名士への道をきり開く」という規準においても「日清戦争と比較にならない」¹³⁸ものであった。

III. 1. 2. c. 広瀬の死について

46章では、語り手の客観性は崩れ、新聞記事からの情報を伝える一方、自分の感想をも表すようになる。まず戦争の進行が伝えられ、そして現状について、見出しの形式での展開を伝達する。「定州の騎兵の突破、軍事公債応募者の」肯定的な景気、語り手が「わが軍」と呼ぶ、日本軍による「浦塩艦隊」に対する攻撃、^{ウラジオ}「旅順口外の激戦」、「臨時議会の開院」、第二次旅順港外作戦と、この闘争の結果として、広瀬武夫海軍中佐の戦死が述べられる。広瀬中佐はその勇敢さと美德から、「軍神」として喧伝されるようになる。ここで、中佐の死は、「壮烈な」つまり勇ましく激しい死に方と定義される。

周知のように、「田舎教師」の46章に登場する広瀬海軍中佐の死は、日露戦争当時大きな話題になった事件である。東郷連合艦隊司令長官の旅順港口閉塞作戦に関する事後報告書の中に、広瀬中佐の戦死の様子が奇妙なほど詳細に記述されていたのである。この官報掲載から、作戦の二日後、三月二十九日にはこのニュースは「一斉に号外で報じられ、翌三〇日にはほとんどすべての新聞に掲載され」ることになる。東郷はその報告で、広瀬中佐が杉野兵曹長を沈没する船に最後まで残って探し、部下の為に死んだ軍人の鑑であるという印象を作っている。また、閉塞作戦終了後、生き残った下士卒たちの証言に基づく「万朝報」の記事によれば、広瀬中佐は「双手を拵げ身を以て下士卒を擁護した」「直後に『巨弾』が広瀬の頭を直撃し、

¹³⁷ 土方美雄、『靖国神社国家神道は甦るか！——天皇制論争』、社会評論社、東京、1986、22頁。

¹³⁸ 小森陽一、「変死への欲望——戦死報道と『軍神』神話の成立——」、55頁。

遺体が海中に『墜落』した」という¹³⁹。しかし、中佐の死後全体指揮を執り、「現場からの報告作成者」である栗田富次郎の報告はこのようないわば「美談」とは一線を画し、広瀬の死を杉野搜索とは結びつけず、またその死の瞬間も単に「即死」としていた。また、彼の死が戦闘中ではなく退避中のものであったことは、言いようによっては「犬死」、無駄な死、とも取れるのだ。

「あることを過剰に表現することが、またもう一つの事実を隠蔽する」という作用がこの事件の「美談化」の表現の裏に働いている。つまり、閉塞作戦が失敗に終わった事実を隠蔽するために、東郷報告は広瀬中佐の死を拡大し、利用したという解釈がなりたつのである。「壮烈な死」の「特権化によってこのような死が犬死であろうはずがない、したがって作戦それ自体も必ず意味があった」というように作戦失敗の事実を曖昧にするのである。

III. 1. 2. d. 従軍記者として「原杏花」^{はらきょうか}

花袋は、文学者原杏花として作中に自身を登場させている。原はまた従軍記者として戦地からの従軍記を新聞に連載している。清三はその「日露戦争実記」を興味深く読んでいるという設定である。

周知のように日露戦争危機感が深まる中、田山花袋は、博文館編集局の『大日本地誌』の編集に携わっていた。日露戦争が開戦すると、博文館は『日露戦争写真画報』を創刊し、「第二軍私設写真班」が編成されると、花袋は別の写真技師とこれに当たり、東京から宇品へ移動、そこから遼東半島の塩太澳に上陸し、金州、南山、得利寺、蓋平、大石橋、営口、海城と転戦して観戦記を送ったのである¹⁴⁰。

彼自身がかかなり原杏花に投影されていると見られるが、ここで注目したいのは、彼のメディアを代表する者としてのイメージである。原杏花の最初の登場は、15章において、清三が世話になり、自身も作家（詩人）である、（田山花袋の實在の義兄、抒情派小説家、翻訳家である大田玉茗をモデルにした）和尚の友人として東京から彼を尋ねに来た二人の一人という形である。

その客は東京から知名な文学者で、一人は原杏花^{はらきょうか}で、一人は相原健二という有名な「太陽」の記者だということが解った。（「田舎教師」、109）

¹³⁹ 同前、55～56頁。

¹⁴⁰ 田山花袋、『田舎教師』（初版1909）、日本文学全集、集英社、東京、1972、436頁。

「相原」は自然文学の代表的な評論家である長谷川天淫と見られ、博文館から創刊された日本の最初の月刊総合雑誌「太陽」の記者として現れる。この二人は、和尚と酒に酔って騒いだり、和尚にお経を読んでもらおうとしたり、詩を吟じたり、本堂の木魚を叩いたりする。原の小説におけるこういった最初のイメージと、48章で従軍記者になった彼のイメージは極めて対照的であり、この対照性はある意味で、戦争による国民意識の発生に起因するものであると思われる。原杏花の変化は清三の目を通してこのように描かれる。

恋愛を書き、少女を書き、空想を生命とした作者が、あるいは砲煙の漲る野に、あるいは死屍の横わるる^{ざんごう}塹壕に、あるいは機関砲の凄まじく鳴る丘の上に、そのさまさまの感情と情景を叙した筆は少なくとも彼の想像をそこにつれていくのに十分であった。三年前にイタリアンストロウの意気な帽子を被って、羽生の山門から入ってきたその人、(中略)第二軍の司令部に従属して、その混乱した戦争の巴渦^{うずまき}のなかに入っているかと思うと、いっそうその記事がはっきりと目に映るような気がする。急行軍の砲車、軍司令官の戦場に赴く朝の行進、砲声を前景にした、茶褐色の禿げた丘、その急忙の中を、水管を肩からかけ、ピストルを腰に巻いて、手帳と鉛筆とを手にして飛んで歩いている一文学者の姿をかれは羨ましく思った。(「田舎教師」、194)

原杏花という存在は、登場こそ少ないが、語りの展開、特に清三の内的世界において重要な役割を果たしている。東京の人としての最初の登場は、身なりからも、変わった奔放な行動からも、別世界に属する人物のような印象を与える。彼は清三が憧憬する「東京」と「文学世界」に属する人物として出現するわけである。(進学のために)東京に行くという夢も文学者になるという望みもかなわず、清三は自分の限界やあり方を痛感し、家族の面倒と地元友人との他愛ない交流に終始する「田舎」生活に満足するように「成長」するわけである。言うまでもないがこの成長は間単には実現せず、迷い悩み、経験を重ねた挙句に遂げられるわけである。しかし、東京や文学世界に対する憧れを諦めた後の「空虚感」を彼はどうやって埋めるのだろうか。彼は「植物学」や「絵描き」などの趣味に傾倒することで埋めようとする。しかし、彼の「空虚感」を埋める最大の契機は日露戦争の勃発ではなかったか。そしてこの転換点において、原杏花が従軍記者として再度登場するのである。

原杏花という文学者は、最初の登場から後の従軍記者へ変化することで、成長、

成熟を表している。彼の変化の要因は戦争である。原は戦争という非常事態によって、浮ついた恋愛小説家から、国民意識を持つ、国民的な使命を果たす「従軍記者」に変化した。あえて言えば、原杏花を（あるいはそれに象徴される作家自身を）神話化するこの部分のナショナリストのメッセージの濃厚さは、「新聞」とは異なる「絵葉書」というメディアを使って伝えられる。原が金州から友人である和尚に宛てた絵葉書は、戦死したある兵士の「死屍の傍に菖蒲^{あやめ}が紫に咲いている」情景を別の従軍画家が描いたものであった。ここにも戦闘の悲哀をロマンティックに演出する意図が見られる。

III. 1. 2. e. 戦争報道によって形成される「田舎」住民の新型共同体

アンダーソンは「出版資本主義が、メディアを通して大衆に影響を与え、新しいタイプのコミュニティ、つまり国民国家を創造させ脳裏に焼きつけ始めたのである」¹⁴¹と述べるが、「田舎教師」において、戦争報道を中心にするメディアによって「田舎」社会の再構成、あるいは新しいタイプの共同体が生成されるのである。小説に登場する共同体は均一的なものであり、社会は全般的にナショナリズムの興奮の雰囲気^{雰囲気}に巻き込まれているのである。

48章で清三の病気が進行し、羽生一行田間の徒歩通勤や自分の面倒を見ることさえ難しくなったので、彼は父母と共に羽生に引っ越すことを決め、父親と一緒に借家を探しに出かける。だがその日は「第二軍は遼東半島に上陸したという公報の来た日」であり、「一週間ほど前の九連城戦捷^{れんしょう}とともに人びとの心は全くそれに奪われ」た様子である。町には「国旗が軒ごとに続き」、「万歳」が聞こえている。興奮が高まった雰囲気では「借家などを教えてくれるものもいな」いほど町中戦争報道に酔いしれている。

そして、「金州の戦、大連湾の占領—第三軍の編成、旅順の背面攻撃」というように、「新聞の見出し」形式での情報がコンパクトに伝えられる。校長を始め学校職員らが戦闘の行方について賭けをするという、市民の報道に対する捉え方が垣間見られる場面である。

「敵も旅順は頑強にやるつもりらしいですな。どうも海軍だけではだめのような。」などと校

¹⁴¹ ベネディクト・アンダーソン、『想像の共同体』、34頁。

長が言った。旅順の陥落についての日が同僚の間に予想される。(中略) 七月の初めといい、あるいは八月にはどんなにおくれても取れるだろうと言った。鶏一羽と鶏卵十五個の賭けをしようということになる。そして陥落の広報が達した日には、休日であろうが何であろうが、職員一統学校に集って大々的祝宴会を開こうと決議した。〔「田舎教師」、193〕

このように、トムソンの言う日常生活の「文化のメディア化」(Mediization of Culture) が明らかに見られ、戦争は「田舎」住民の会話の内容まで決定するようになり、また普段の習慣や考え方に影響を与えるのである。

「田舎」空間、日常生活におけるこういった変化は、言うまでもなく新聞報道によるものである。「田舎」住民は新聞を読むことによって戦争に関する情報を獲得し、戦争の行方や結果について推測したり意見を述べたりする上での知識をインプットする。彼らは近所同志で何種類かの新聞を廻し読みしてもいるのである。

午後の二時ごろにはいつも新聞が来た。戦争が始まってから、互いに異った新聞を一つずつ取って交換してみようという約束ができた。国民に万朝報に東京日日に時事、それに前の理髪舗から報知を持ってきた。〔「田舎教師」、187〕

清三の戦争に対する当初懐疑的な態度が、ナショナリストのメディアの働きかけによる「田舎」空間への軍国主義の浸透と、それによって醸成される一種祭事的な雰囲気の影響を受ける過程を経て変化し、開戦の段階で逆転することをすでに述べた。ここでは「午後の二時ごろにはいつも新聞が来た」という表現から、戦争が始まってからというもの彼が毎日新聞を精読している様子が伺える。他方、学校の仲間の間だけでなく、「理髪舗から報知を持ってきた」からもわかるように、「田舎」町全体に、新聞の貸し借りという形で連帯感が強化されるのである。しかし、実はメディアによって成立する空間は、「田舎」の住民の「考察の自由に対する束縛の役割を果たすのである。ハーバーマス (Habermas, Jürgen) の主張を鈴木健二が簡潔にまとめているように、新聞の「文芸的な公共圏」から「消費文化的公共圏」へ転換する過程の解釈アプローチを借りて説明することができよう。

「親密圏」と呼ばれる小家族による私的な生活圏は液状化して、文化を論議する主体性を失う。「私的性格の奪われた親密領域は、パブリシティによって空洞化され」、文化を消費するだけの大衆へと変える。「文芸的公共圏」はマスメディアの作り出す「消費文化的公共圏」に取って代われ、

自由な討論、対話、論議でさえ「管理され」「ビジネス」に引き取られて、形式化する」。もはや「マスメディアが作り出した世界は、もう見かけの上での公共性にすぎない」。¹⁴²

ハーバーマスは新聞というメディアの欧米での変化に関する分析を行ったのだが、鈴木は、日本の報道機関の展開過程も「欧米に半世紀後れただけで、まったくといっていいほど同じであった。政論新聞の発達も、商業的経営への切り替えも、新聞のコンツェルン化も、日本は驚くほど同じ道程を歩んで」¹⁴³きたと言っている。日露戦争時には新聞事業はすでにこの段階に限りなく近くまで達していたと言えよう。鈴木によれば、開戦前に反対、慎重の立場を取った新聞論調（毎日新聞、万朝報など）も、強硬な開戦論を展開する朝日新聞、時事新報などの売れ行きの好調に押され、次々に開戦論調に転向したという。（一方で、反戦を主張した幾人かの主筆らは、自ら新聞を起こして反対論を展開するという気概を見せたが、ナショナリズム一色に塗られていく世論に影響を与えることはできなかった。¹⁴⁴）ただしその責任を新聞社の商業主義と迎合主義にだけ着せるのでない。日清戦争当時から政府による報道管制は厳しく、政府に楯突くような記事を掲載すればすぐに一定期間の発行停止処分を喰らわされたから、商売を続けるためには言うなりになるしかない、という事情もあったのである。¹⁴⁵

この時期、事実戦争報道を売りにして新聞の売り上げは急増したという。つまり、勇猛でロマンティックな戦争記事が、戦争の行方を知りたいという庶民の欲求をさらにかき立て、購買意欲を煽り、それがまた過剰な戦争報道につながるという循環が成立したのである。しかしその内容を制御する者の巧みな誇張と隠蔽によって、読者がある一定方向へと導かれていることに気づく術としての別の視点が提供されることはなかった。このような社会的背景が、「田舎」町に住む病身の清三という個人とその周辺の人々の行動に反映されていたのである。

「田舎」の一体化は、先述の通り作家自身の登場、あるいは全能全知の語り手の干渉によっても支えられている。これは46章で際立っている。自然主義派に属すると言われる所以である平面描写に拠っていた語りが、ここにきてナショナリストのイデオロギーに傾いた主観性を交えて展開されるようになる。

¹⁴² 鈴木健二、『ナショナリズムとメディア——日本近代化過程における新聞の功罪』、岩波書店、東京、1997、29頁。

¹⁴³ 同前、32頁。

¹⁴⁴ 同前、119~120頁。

¹⁴⁵ 同前、116頁。

語り手は戦争に関する短い情報を次のように伝える。

(中略) 第一軍の出発につれて第二軍の編成、国民は今まじめに戦争の意味と結果とを自覚し始めた。(中略) 号外が来るたびに田舎町の軒には日章旗が立てられ、停車場には万歳が唱えられ、畠の中の藁家の付近からも、手製の小さい国旗を振って子供の戦争ごっこしているのが見えた。¹⁴⁶
(「田舎教師」、190)

語り手は、ここで客観性を崩し、自分の意見を述べるが、「田舎」の一体化を強調する上で、上記の引用でも見る子供と国旗という要素がよく利用されている。「田舎」の子供たちのイメージは、戦争との関連で常に国旗によって描き出されているのである。これは、大人だけでなく、子供の間にも国民意識が浸透し、彼らは自分なりに、「小さい国旗を振って子供の戦争ごっこし」たり、「旗を拵えて戦争の真似をした」(「田舎教師」、186)りして、「田舎」のナショナリストの光景を構成する一要素となるわけである。

また一体化は、薫は48章に「農民、学生、政治家、資本家」らが皆、「挙国一致」し戦争を積極的に支えると発言する。「田舎」では、湯屋、理髪舗^{とこや}など、「戦争の話が出ぬところはない」のである。国民意識は年齢や教養の垣根を越えて、「田舎」空間に普及するわけである。例えば50章では、熊谷から行田に移転し、引越車について移動中に、清三は「長野を外れようとした処で、向こうから景気よく鈴を鳴らして来」る号外壳から買った号外によって、「竹敷を出た村上艦隊が暴雨のために敵を逸して帰着した」ことを知る。車力はこの出来事について「残念ですなア。敵をにがしてしまつて・・・常陸丸ではこの辺で死んだ人はいくらかあるですぜ。佐間では三人まであるですぜ。」(「田舎教師」、197)と遺憾の意を述べている。同じ50章での清三の新しい家の大家の発言はこのような状況をまとめるようである。

「何しろ日本は小さいけれども、挙国一致^{かな}ですから敵いませんやな。どんな百姓でも、無知の間でも、戦争っていえば一生懸命ですからな・・・天子様も国民の後援があつて、さぞお心丈夫でいらっしゃるでしょう。(中略) 日本は昔からお武士^{きむらい}でできた国ですからなア！」(「田舎教師」、200)

このいわゆる「挙国一致」という均一的な空間は肯定的に取り上げられ、この構

¹⁴⁶ 下線は引用者による。

造にあわない要素は一つもないのである。上記の引用は、日本のありかたについて総合的なアプローチであり、国民全体を一致させるだけでなく、歴史的にも対立的な関わり方をもった天皇制と幕府を一致させ、これによってある種の一体像を作り出すのである。しかし、大家をしてこの発言を言わしめるのは、「自由な意見形成のプロセスにおけるメディアムであり」、そしてそれに付け加え「ファクター」¹⁴⁷でもあるメディア、つまり日露戦争の時、盛んに戦争報道を行う「新聞」である。

タルデの次の指摘は「田舎教師」の均一的ナショナリスト空間に相応するのではないだろうか。

現代の政治的な特徴となっている新しくて格段に際立った民族感情（ナショナリズム）・・・・・・を成長させたのは、新聞ではないか？衰退する忠君主義に代わって、民族主義が成長し、現代の愛国心の新しい形になったとしたら、その功績も、この同じ多産で恐るべき力〔新聞〕に帰さねばなるまい。¹⁴⁸

III. 1. 3. 「よそ者」に見られるメディアと「田舎」住民の相互関係— 「田舎」におけるメディアの消極性

前章で述べてきたように、日露戦争を背景にする「田舎教師」において、特に戦争報道を中心とするマスメディアは、主人公が住む行田や勤務地である羽生の日常生活や人間関係に急速に浸透し、ナショナリストの空気を醸成した。それに対して、トルコの救国戦争を背景にする「よそ者」の農村では、メディアは同様な効果を得ていない。少なくとも、救国戦争のプロパガンダを行う報道機関はこれに成功しない。その原因をこの章において考察してゆこう。

III. 1. 3. a. 「よそ者」におけるメディア—オスマン帝国における「印刷」の歴史的背景

一日の何と長く、一月の何と短いことだ。また夏になった。何年の夏だろうかしら。一寸新聞を見てみよう。新聞はおびただしく積もってまるで小さなピラミッドのようになっている。私の上に倒れてきたらきっと下敷きになって窒息するだろう。

それに物凄い埃だ。時には埃に溺れそうになって、全部釜で燃やしてしまいたくなるが、エメテ

¹⁴⁷ 同前、「ドイツ連邦憲法裁判所の規定した定義」、34頁。

¹⁴⁸ 同前、35頁。

イ婆さんはこれらに触ることさえ嫌がっている。(中略) なぜかと言えば、新聞には人の写真などが載っているからだ。またそのせいで、エメティ婆さんはもう何ヶ月も私のところで働いているのに、私の部屋へ入ろうともしなかったわけだ。(「よそ者」、131)

これは、アヒメト・ジェラルの孤独な文化的な側面をよく描いている。近くで戦闘が進行しているにもかかわらず、主人公が住む農村では、彼以外誰にも読まれない「新聞はおびただしく積も」るばかりで、新聞の貸し借りや読みまわしが行われていない。再度引用するが、「田舎教師」では全く異なる空間が見て取られる。

午後の二時ごろにはいつも新聞が来た。戦争が始まってから、互いに異^{かわ}った新聞を一つずつ取って交換してみようという約束ができた。国民に万朝報に東京日日に時事、それに前の理髪舗から報知を持ってきた。(「田舎教師」、187)

「田舎教師」において、「田舎」の住民の間に均一的、連帯的な空間が形成され、他方、当初戦争・非暴力主義的な立場をとった清三のような「異質的な要素」は同化させられ、均一化されるのである。新聞というメディアは、その内容によってばかりでなく、新聞の貸し借りや新聞から獲得した情報の交換という二次的な行為によっても「国民化」を強化するのである。しかしこういった相互作用的一貫性が「よそ者」に一切みられないのはなぜだろうか。

マスメディアは「田舎教師」において言論活動の媒^{メディアム}介であると同時に、原動力^{ファクター}149としても機能するのに対して、「よそ者」では恐怖や不信感の対象、つまり何かしら「憚られるもの」として出現するのである。両作品間に見られるこの相違の原因をまずオスマン・トルコの歴史的背景を通じて考察しよう。

III. 1. 3. b. オスマン・トルコにおける印刷の萌芽

オスマン・トルコにおいては1729年になって初めて、トルコ人によるアラビア文字表記のトルコ語¹⁵⁰の著作物を生産する印刷所が開設されたが、最初の印刷所は15世紀にヘブライ人によって創設されたものである。ヘブライ人は、1495年イスタンブールに、1515年にサロニカに、そして1579年に再びイスタンブールに印刷所を開

¹⁴⁹ 同前、34頁。

¹⁵⁰ 1928年の「アルファベットの改革」まで、トルコ語はアラビア語の文字システムを使用していた。

設した。ユダヤ民族だけでなく、アルメニア人やギリシャ人による印刷所の設立もトルコ人に先立った。オスマン・トルコでは、トルコ人による印刷所の設立が遅れたばかりでなく、その後の進展ももかなり遅かった。そのため期待された近代化や啓蒙の発生も遅れたのである。オスマン・トルコ史の研究者のほとんどは、印刷技術の確立と進展の遅れの原因を常に宗教や国家のイスラム教権威者に因らせているのだが、これは大きな誤謬^{ごびゅう}である。原因は宗教的なものでなく、政治的なものである¹⁵¹。

III. 1. 3. c. オスマン帝国における印刷の発達による混乱

1492年以降にスペイン国王をはじめとして西欧国の反ユダヤ主義の圧迫を受けたヘブライ人の大半は、オスマン帝国に受け入れられ、帝国に避難した。17世紀には、オスマン帝国領内においてカトリック教会派が強力な宗教プロパガンダを行っていたが、これに対してユダヤ人は出版活動を通じて抵抗した。その中で、イズミルの住民のあるユダヤ教徒は、世界の最強のイスラムのスルタンを打倒して世界の支配者になると主張し、ユダヤ人の救済者と自称した。彼に対する信仰は、印刷技術によってオスマン帝国の国境を越え、ヨーロッパ全体に広まっているヘブライ人に熱狂的に支持されるに到ったが、結局ユダヤ教にも、カトリック教会にも不満を与え、オスマン帝国政府に不信感を植え付けることになった。この「救済者」はスルタン自身によって取調べられ、彼は自分に対する容疑を否定し、イスラム教への改宗でこの問題は収拾した。

他方17世紀にイスタンブールの東方正教会の大主教であったルカリスが、自分の宗派においてプロテスタント主義的な改革をはかり、オランダやイギリスからの協力で印刷所が開いたが、この運動も結局、国内外において混乱を引き起こした。他方アルメニア共同体においても、カトリック教会の18世紀においての特権化の結果である宣伝運動が印刷物の普及によって強化し、多数のギリシャ人やアルメニア人がカトリック派に鞍替えし、共同体内に葛藤を生んだ。この「改宗派」の運動は、宣伝を行う印刷所が政府によって閉鎖された以降も続いたのである。オスマン帝国内に発生したこういった宗教的な混乱には、政治的な要因が色濃くあった。そしてこの問題はオスマン帝国国府の支配力の衰微の要因のひとつにもなったのである。

¹⁵¹ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 55~58 頁.

そこで、オスマン帝国国家は印刷活動を強化や権力復活の手段としてでなく、国の宗教を問わずの一体性の堅持に対する危険因子として受け止めたのである。

III. 1. 3. d. 最初の「トルコ人」の印刷者

イブラーヒム・ムテフェッリカは、トルコ人¹⁵²による、トルコ人向けの最初の印刷所の創設者として知られている。それだけでなく、ムテフェッリカは、発表した作品によってオスマン・トルコの近代化や啓蒙運動にも積極的に貢献した¹⁵³のである。印刷所の開設そのものも、西洋化の理想を基盤にしたのである。ムテフェッリカは印刷技術の必然性を表した報告を著し、特にイスラム教徒がキリスト教西洋諸国に遅れを取っているのは、印刷不在による「無知」によると説いた。印刷所の創設を支持した当時のスルタンの承諾により1729年に印刷所が開かれるが、期待された発展を見ることはなかった¹⁵⁴。その一つの理由は、新しい技術である印刷が古い国家制度に従わされ、国の独占になり、ほぼ一世紀にわたってその状態が続いたことである。1860年代に新聞が発行されるようになり、ようやくトルコの印刷は進展を見せるようになり得たのである。また技術的発達を受容されなかったこと、十分な量の紙の生産がなかったこと、十分な数の読者が存在しなかったことなども、印刷の効果を遅らせた要因である。¹⁵⁵

III. 1. 3. e. オスマン帝国におけるマスメディア

軍隊をはじめとして、国全体の近代化を進め、国家だけでなく社会の近代化をも期待していたマフムト二世（1808-1839年）は、非イスラム教の「臣民」を動かす原動力としての新聞の重要性に気づいたのである。イスタンブール（1796年以降）、イズミル（1824年以降）ではフランス語による新聞が発行されていたが、大衆や国の官僚を相手にするものではなく、少数民や外国人向けのものだった。スルタンは、「臣民」を啓蒙し、近代化や国内外の出来事に関して彼らの意識を高めるために、

¹⁵² İbrahim Müteferrika (1670~1745)、トルコ人といっても、彼はもともと、トランシルヴァニア人であり、カルヴァン主義の聖職者になろうとして勉学していた時、カトリック教徒のハプスブルク家に対する反乱に参加し、ついにハプスブルクと同盟関係にあったオスマン帝国軍の捕虜となる。彼はイスラム教に改宗し、イスラム的学問やトルコ語を短期間で習得し、Müteferrikaという、スルタンや高官に直属の高位官僚にまで出世し、スルタンや高官たちと交流した。

¹⁵³ Berkes, Niyazi, *Türkiye’de Çağdaşlaşma*, 50~55 頁.

¹⁵⁴ 同前、56~57 頁.

¹⁵⁵ 同前、61~62 頁.

1831年7月、「Takvim-i Vekayi」（タクヴィーミ・ヴェカーイ）¹⁵⁶を発行した。これは新聞ではなく、政府によって定められた法律や勅令、改革を報告する広報であった¹⁵⁷。そしてその仏訳である「Moniteur Ottomane」は外国人を読者層にした。オスマン・トルコ語文は5000部、仏訳文は300部発行された。こうして「タクヴィーミ・ヴェカーイ」はオスマン・トルコのマスメディアの発育の最初の段階となった¹⁵⁸。

イブラーヒム・シナーシはオスマン・トルコにおいてトルコ人によって発行された最初の新聞「Tercüman- ı Ahval (1861年)」の創立者の一人である。また一年後、自分自身の新聞である「Tasvir-i Efkar(1862年)」を発行した。当初、高位官僚であった彼は、アーリ大宰相^{だいさいしょう}¹⁵⁹と対立し、後に政界と縁を切った。彼は政治に対する不満を表現する手段として、新聞を発刊し、庶民の啓蒙に取りかかったのである。シナーシは、特権的少数による新聞が（トルコ人）庶民には何の役にも立たないことを訴えた。庶民は政治的動向を理解するほどの知識を持たなかった。シナーシは新聞を庶民が理解するような「話し言葉」に近い言語を用いる手段を考え、トルコ語の洗練や言文一致運動の先導者でもある彼の論説や研究は、「トルコ人」としての国民主義の形成に大きい影響を与えた。

III. 1. 3. f. アブデュルハミトの在位の時代のメディアと出版物に対する検閲政策（1876~1909年）

スルタン・アブデュルハミトは、自分や自分の政権の敵と想定したナショナリズムの思想を抑圧するため、国の印刷物検閲事務所を確立した。事務所の検閲官は、報道機関や出版活動に対して非常な圧力をかけた。スルタンを批判することは許されず、大臣に対する批判は内容によっては受け入れられる場合もあった。後述のナームク・ケマルなどオスマン・トルコの進歩主義的・ナショナリストの「裏切り者」の新聞記者・著者や、フランス啓蒙主義の思想家や小説家の出版・翻訳は禁止されていた。新聞の発刊禁止や罰金の処罰が頻繁に課せられた。新聞において使用が禁止される用語・表現のリストまで作成されたのである。¹⁶⁰

¹⁵⁶ これ以前はエジプトで州知事メヒメト・アリパシャによって「Vekayyi Mısiriye」（1829年）発行されていた。

¹⁵⁷ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 260 頁。

¹⁵⁸ Shaw, J., Stanford; Shaw, Ezel, Kural, *Osmanlı İmparatorluğu ve Modern Türkiye*, 65 頁。

¹⁵⁹ トルコ語 Sadrazam, 英語 Grand Vizier。

¹⁶⁰ Shaw, J., Stanford; Shaw, Ezel, Kural, *Osmanlı İmparatorluğu ve Modern Türkiye*, 306 頁。

当時の新聞記者のほとんどは、政界において進歩的な意見が認められなかった結果として、政界から排除されたか、あるいは自らの意志で辞任した官僚たちであった。この「元官僚たち」は、それに対する反発としてメディアの方向に向ったのである。他方、彼らはトルコにおいて「国民意識」の成立や、庶民の啓蒙化ということを目指し、この理想を実現させよう努力したインテリであった。彼らが政府の検閲の圧迫を若干脱したのは、1908年の立憲君主政権の確立以降である。ここで、トルコの国民意識の形成に重要な影響を与えたその記者・思想家の一人を取り上げ、当時のメディアと政府の衝突、圧迫的態度を検証しよう。

III. 1. 3. g. 新聞記者と政府の関わり方の一例

キリスト教的な概念とイスラム教的な価値を融合させようとした新聞記者、小説家、劇作家、思想家であるナムク・ケマル (Namık Kemal) は、先述のイブラーヒム・シナーシと同じ「Tasvir-i Efkar」新聞に論説を掲載した。彼はイエニ・オスマンルラル¹⁶¹というナショナリスト集団の一員として反政府活動に携わっていたが、これが政府の知るところとなり、また、新聞の論説、文学作品や、特にスルタンの兄弟ムラト5世との親交¹⁶²により、数回にわたってイスタンブールから追放された。

1867年に上記の理由で、彼は当時翻訳者として勤務していた「翻訳事務所」から、トルコ東部のエルズルム市の副市長に任命され、事実上の追放が決定した。しかし彼はパリへ逃げ、そこで活動する他のトルコ人ナショナリストと合流する。後に、「記者として活動しない限り」という条件で国に召喚されたが、彼は1871年に新聞発行活動に戻った。発行した「İbret」は一万部というそれまでで最高の発行部数に達し、彼の政治活動に触れないなどの配慮をしたが、新聞は三回にわたって発売が中止され、ケマルは1872年にゲリボル（イスタンブール南部の町）の知事に任命、追放された。彼が著した国民愛をテーマにする「Vatan Yahut Silistre」という劇は、上演直後イスタンブール市民に熱狂的に受け入れられ、道々で彼のためのナショナリストのデモが繰り広げられた。政府はこれを危惧し、上演は処分の対象にならな

¹⁶¹ Yeni Osmanlılar フランス語では Neo Ottomans、「新しいオスマン人」という意味。

¹⁶² ムラト五世は、1876年に即位したが、国の衰退、国内の政権争い、戦争や特権を獲得した一部の西欧国による圧力という政事のストレスで神経衰弱を起こし、3ヶ月余りで退位し、弟のアブデュルハミトが代わって即位した。だがムラトは健康を回復したので再びスルタンの交代があるべきだったが、アブデュルハミトはそれを無視して帝位に座り続けた。彼の独裁的なやり方に官僚の間でも不満が高まったが、より民主的、西欧的思考を持つムラトの即位を支持する知識人らは弾圧された。

かったものの、芝居に関する庶民の反応などを大きく取り上げた「イブレト新聞」は閉鎖され、ケマルはエーゲ海の島に追放されて、38ヶ月追放生活を送ることとなった。

ナームク・ケマルはアブデュルハミト政権の時（1876年以降）、国政の相談役や Kanun-i Esasi憲法の制定委員会の一員となり名誉を回復したが、その後も彼の「民主化」への意欲は衰えず、1877年に再び投獄、5ヶ月にわたって監禁され、その後エーゲ海の島に知事として左遷された。彼は1888年の死亡まで、晩年の11年間に首都に戻れず追放生活を送った。

III. 1. 3. h. 出版物の発展

アブデュルハミトはオスマン帝国において初めてのイスラム原理主義的な政権を確立し、厳格な独裁制を敷いた。にもかかわらず、トルコにおける新聞や出版物は彼の政権の時代に著しく発達した。庶民（トルコ人）が近代的概念¹⁶³や思想を受け入れるようになったのは、イブラーヒム・ムテフェッリカが印刷所を創設してから100年以上経過した1835年以降に出版界が活発化してからである。当時政教分離的な教育を施す学校の確立によって識字率が高まり、多数の出版社が現れ、以降50年間に約3000冊の本が出版された。¹⁶⁴先述のナームク・ケマルによると、「最後の10年間で、新聞を読む女性の数は10倍増加し」、「今や商店主や労働者も新聞を読み、読めない場合は読む人から聞いたりするようになりました。¹⁶⁵詳しくなくとも、国事やナショナリズム、文明の有徳、軍事や戦争に関して意識が高まる一方」¹⁶⁶ だという。

新聞や本の読者数が増えたことは確かだが、専制政権の検閲によって、報道の内容は、文学、思想や特に政治的なテーマを回避する雑報に集中していた。こういった三面記事はほとんどポピュラーな科学の発達などに関するものであった。それにしても、宗教的な書物を読むことがすなわち「読書」であると考えられてきたこの国において、読書行為は非宗教的なものを対象化するように変化したのである。ま

¹⁶³ アブデュルハミトは誇大妄想的な人物で、幾つかの独特な規準によって検閲を行わせた。例えば、彼は、自身の高すぎる鼻のコンプレックスから「鼻」という語、また宮廷が Yıldız（星）という区域にあるから「星」という語、そして兄の名前であるムラトという語の使用を禁じた。他方国外でテロによって暗殺された政治家は、自然死として報道された。Kunt, Metin; Akşin, Sina, *Türkiye Tarihi 3—Osmanlı Devleti, 1600-1908*, 166 頁。

¹⁶⁴ Shaw, J., Stanford; Shaw, Ezel, Kural, *Osmanlı İmparatorluğu ve Modern Türkiye*, 166 頁。

¹⁶⁵ 下線は引用者による。

¹⁶⁶ Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*, 368 頁。

た、トルコ人はようやく理解しがたいオスマン語でなく、庶民の話し言葉で書かれたものを読めるようになった。言うまでもなく、政府の権威を象徴する難解な「書き言葉」を脱したことは、庶民がその権力の限界を把握するという結果をもたらした¹⁶⁷。また推理小説、ヴェルヌ、デュマなどの小説の翻訳者たちは、後にトルコ近代文学を興す作家に育っていったのである。

これら以外の、政府のイデオロギーに対立的な内容の本は危険として禁書とされた。作家カラオスマノールも禁書を読んでいることが暴露され、この時期政府の束縛を受けることになる。彼が高等学校在学時に次のような事件が発生する。

ある日、頭を机にもたせかけてこっそり膝に置いた『Cezmi』を読んでいたら「鋼鉄の手」が後ろから私の首筋を掴んだ。どこへ行けばいいのか。どこへ逃げればいいのか。当時私はまだ16歳にも満たなかったが、他の一部の国々には「自由」という幸福があることをよく知っていた。そこでは誰でも読みたい本を読めるのだ。私もそんな国へ立ち去った。¹⁶⁸

こうして、作家がイズミルの高等学校に通っていた1905年に、アブデュルハミト独裁下の国にあって、禁書を読んでいた彼はに停学処分になる。こうして彼は「言論の自由」の不在という苦い経験をし、当時オスマン帝国の領土であり、パリなどのヨーロッパの都市とともにトルコ人ナショナリスト（Jeune Turcs）の中心地の一つでもあったエジプトで勉学を続けることになった。¹⁶⁹この事件は作家カラオスマノールに大きな影響を与えたと思われる。彼のスルタンに対する恨みは「よそ者」にも垣間見ることができる。

そして小屋の屋根より高く大量の糞が積み上げられる。一方、村の女は新鮮な牛糞の肥料を家の内壁に塗る作業に精を出す。ゼイネップ婆さんの家も昔のアブデュルハミト二世時代の司令官たちのように、この銅色の勲章で壁の端から端まで飾られた。しかもこれが大変に臭い。自然はどこもかしこもテゼキ臭い。（「よそ者」、105）

クーデターを恐れたアブデュルハミトは軍隊の司令官たちの機嫌をとるため、食事を共にしたり、会合したり、またしきりに勲章与えていたのである。

¹⁶⁷ 同前、369~370 頁。

¹⁶⁸ Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, Atatürk, (「アタテュク」) Remzi Kitabevi, İstanbul, 1946、16 頁。

¹⁶⁹ Aki, Niyazi, Yakup Kadri Karaosmanoğlu— *İnsan, Eser, Üslup*, 19 頁。

III. 1. 3. i. オスマン帝国におけるメディアの役割と効果範囲

アブデュルハミト政権下では国内に言論の自由がなかったので、新聞の政治性も、政治新聞も発達しなかった。しかし、諸外国では新聞は政治的なグループの手段として使用され、ヨーロッパ経由でトルコにも届き、そのグループのメンバーや支持者の手元に届いていた。

トルコ人ナショナリストのグループJeune Turcsのリーダーの一人であり、フランスでコントの実証主義運動に参加したアヒメト・ルザは、「Meşveret」を1894年にまず小新聞の形で、そして次にオスマン・トルコ語文と仏訳文の新聞形式で隔月発行した。特にスルタンの専制から立憲君主制への回帰を要求するこの新聞は、トルコ国内やヨーロッパで自由主義的な思想や行動を宣伝した。カフカス・トルコ人であるメヒメト・ムラトも1895年にエジプトで「Mizan」というナショナリストの新聞を発行し、ヨーロッパで活動が続けた。ジュネーヴでは「Osmanlı」紙が発行され、スルタンを批判した。スルタン・アブデュルハミトの娘の夫であるマフムト・パシャは、その境遇にもかかわらずスルタンの打倒という最も極端な思想を掲げてフランスに移り、1901年前後に「Terakki」紙を発行した。ヨーロッパで近代化やナショナリズムの政治活動を行ったこれらの人々の一部は、スルタンの説得によって帰国後官僚の地位に戻ったが、ナショナリストの運動は存続した。しかし全体には、1908年の第二次立憲君主制の確立まで、トルコ国内では新聞が政治化できなかったのである。

III. 1. 3. j. 「よそ者」におけるメディア

「よそ者」のアヒメト・ジェラルは、村で新聞を読む二人の人物のうちの一人である（もう一人は村長）。世を捨ててメヒメト・アリの農村に移って来た彼は、作品の56頁に、「いくら世界と関係を絶ち切ろうと思ったとはいえ、まだ切れたわけではない」と言い、救国戦争や国情についての情報を「たまにイスタンブールの新聞を買」うことによって獲得するのである。アヒメト・ジェラルはある時、元部下のメヒメト・アリ、元兵士のベキル軍曹、サーリー・アーガーと村長を相手に、トルコの逼迫した戦争状況を議論し、彼らの反応を観察するが、彼らは完全に無関心である。自分の部下であって、一緒に戦ったメヒメト・アリさえ、アヒメト・ジェラルの話を「大昔の出来事のように鈍感に聞」くのである。

彼の宣伝的スピーチは更に情熱的、感情的になり、仕舞いにはエピックに変わるが、聞き手たちは無関心である。オスマン帝国の官僚主義的イデオロギーを象徴する村長は、当時の政府の、占領に対する無関心を象徴するように居眠りをし、自分の所有物、物質的利益を優先する地主のサーリー・アーガーは草原で草を食んでいる自分の牛の群を眺めているのである。しかしここで作家が最も注目するのは残りの二人である。なぜならこの二人は元兵士であり、アヒメト・ジェラルは当然国民主義的態度が身についていると考えたからだ。だが「士官殿また戦争が起こるかな」と聞くベキル軍曹は、戦争が継続していることさえ認識していない。そして戦場から帰還したばかりのメヒメト・アリは、「再び兵士にならないように」と神に願うばかりである。

主人公は平凡な農村の生活を送る中で、ある日、イスタンブールの新聞によって第一次イネニュ戦の勝利（1920年1月10日）を知る。このニュースで気分が良くなり、一時勝利の歓喜に酔い、熱狂する。

私は村で人に会う度にこの勝利の話を持ち出したりする。このことだけが話題である。このことを私から聞かされないで済んだ村人はいなかったと言っても過言でない。道ですれ違って背を向けていた女たちでさえ、私を避けることができない有り様だ。メヒメト・アリの母親や妹、妻、弟や特にメヒメト・アリ自身も、私の執拗さにうんざりしていた。

もともと私のことを気遣いだと思い込んでいた村人は、私が完全に狂ったのだと思うようになった。（「よそ者」、56）

これを「田舎教師」48章で清三が父母と共に羽生に引っ越すことを決め、父親と一緒に借家を探しに出かけた日の光景と比較しよう。

その日は第二軍は遼東半島に上陸したという公報の来た日で、一週間ほど前の九連城戦捷とともに人びとの心は全くそれに奪われてしまった。街道にも町にも国旗が軒ごとに絶えず続いた。

「万歳、万歳」（「田舎教師」、117）

「よそ者」では主人公は農民と勝利を祝おうとするが、反応を得られないばかりか、農民は彼の生気を疑い、彼の喜びをさっぱり理解しない。他方、「田舎教師」では、勝利によって日常生活が逆転する。普段の人間関係では、清三の借家の相談に乗ったであろう「田舎」住民は、戦勝に浮かれて彼を相手にしない。マスメディアは「田舎」社会の価値観を相対化する機能を果たしているのである。つまり、「田舎

教師」では、ナショナリストの盛り上がりに参加しないで部屋を探している清三は無視され、「よそ者」の農村では救国戦争の勝利を喜ぶアヒメト・ジェラルは彼を狂人扱いする。それだけでなく、村長は政治的な態度を明示し、ムスタファ・ケマル救国戦争運動を批判し、メヒメト・アリは相変わらず徴兵を嫌っている。

また第一次イネニュ勝利よりほぼ3ヶ月後、トルコの救国戦争において重要な勝利である第二次イネニュ戦争の勝利（1920年4月1日）を、村長が持ってきた短いニュースという形で知ることになる。

「士官殿、士官殿。あなたに町から短いニュースを持ってきてやったよ。どうぞお読みください」

「どんなニュースがあるかね」

「まあ読んでごらんなさい。すばらしいニュースと思われますよ。もう我々は戦争に勝ったようだ」

手が震えながら汚くくしゃくしゃになった紙片をランプに近づけて照らし出す。第二次イネニュ戦争に勝利だ！喜びで胸が躍った。何かの詩文を読むかのように、その短いニュースを心の中で歌うように読む。（「よそ者」、115）

アヒメト・ジェラルはその喜びを村長と分かち合おうと思うが、「彼はすでに^{タカ}ヤツの祈りにに行ったらしい」。前回の勝利のシーンで救国戦争に対して冷やかな態度を示した村長は、今度は勝利を報告する側にある。つまり、彼の救国戦争に対する態度が懐疑あるいは反対から支持へ、急激な転換が発見できるのである。これは後に詳しく取り上げるが、そういう意味で、村長が「救国戦争反対派」であるというこれまで一般に論じられてきた「村長観」は崩される。

救国戦争において、第一次イネニュ戦勝利（1920年1月10日）、第二次イネニュ戦勝利（1920年4月1日）、サカリヤ戦勝利（1921年9月13日）という過程は、トルコが徐々に独立に近づく道程である。だが、この過程において、逆に主人公の歓喜の度合いは徐々に弱まっていくことになる。

これは「田舎教師」の「田舎」町のような一体化、共同体の形成を見ない農村空間に対する彼の失望から来る。彼のナショナリズムや救国戦争支持は変わらないが、国民愛という感情は国民に対する嫌悪に変わり、抽象化するわけである。特に第二次イネニュ戦勝利からサカリヤ戦勝利への過程で見られる変化は、アヒメト・ジェラルだけに見られるのではない。先述のように村長の態度も転換し、この二人の変化は、メディアと関わっているのである。

III. 1. 3. k. 「よそ者」における「新聞」の位置と二つの変化

「よそ者」に登場する新聞は二つに分類される。一つは特に1908年の立憲君主制の確立直後に読者数も発行部数も急増し繁栄したイスタンブールの新聞であり、今ひとつは「Hakimiyet-i Milliye」というアンカラのムスタファ・ケマルの臨時政権の報道機関である。後者の名前は明示されるのに対して、イスタンブールの新聞の名前は明示されない。それ以外の報道機関は、「短いニュース」という公報とアンカラのメディアである。

ここで、新聞の出現を中心にアヒメト・ジェラルと村長の変化を検証しよう。この二人を特に取り上げる理由は、村において彼らだけが新聞を読み国情に注意を払っているからである。しかし二人の変化は質的に異なっている。アヒメト・ジェラルは精神的な変化を示すのに対して、村長は政治的に態度を変えているのがわかる。

＊

アヒメト・ジェラルは勝利を知って、「この重大な出来事」は「平凡なニュースのように報道されたの」とかとし、イスタンブールの新聞に目を通し、「祝賀ムードを求めて探し回る」ものの「なかなか見つからない」。これは、イスタンブールの新聞の戦争に対する態度が消極的であるというイメージを作り出しているとも言える。だが、これはただ新聞の無関心に対する不満とだけでは捉えきれない。歴史的文脈を踏まえて再考察すると、この部分は有意義である。

ムスタファ・ケマルが率いる臨時議会に対して、アメリカのハーバード・コミッションから1919年11月に以下の提案が出される。すなわち、「トルコの借金を占領国が肩代わりし、経済的独立を促進」、「西欧諸国に与えられた特権や通商条約の廃止」、「占領軍の撤退、アメリカによる委任統治」である。委任統治¹⁷⁰以外の条件は、「ケマリスト」の外交上の勝利を意味した。ムスタファ・ケマルは、占領国が1) 彼を議員として承認し彼に免除特権^{immunity}を付与すること、2) ハーバード・コミッションの提案を受け入れること、を拒否すると見込んで、議会の拠点をエルズルムから、よりイ

¹⁷⁰ この条件はすでに、1919年9月4-11日の「スイスの会議」では拒否され、同じコミッションに通知されてあった。

スタンプールとの交通、通信に便利なアンカラに移した。ケマルはトルコ国内外に彼の声を届ける目的で「Hakimiyet-i Milliye (国民による支配)^{ハキミエティミッリエ}」という新聞を1920年1月10日¹⁷¹にアンカラで創刊した¹⁷²。そしてこの日付は第一次イネニュ戦勝利と同日である。イネニュ戦に勝利した祝賀ムードの記事、国民主義的な興奮に飢えていたアヒメト・ジェラルの知らないところで、実はナショナリズムを象徴するケマル・パシャの新聞がアンカラで創刊されていたという事実は、唯作者が暗に読者と分かち合う情報である。「よそ者」では、「国民による支配」は匿名で登場し、イスタンブールの新聞と対比されている。後述するように、93頁にこの対立はさらに具体的になされるわけである。

これに対して、第一次イネニュ戦勝利後、「2、3日を過ぎしに町へ行った村長」は「新しいニュースや意見を持ち帰」る。この「ニュースや意見」は占領軍が農民の宗教的な感情や無知を利用する宣伝である。こうして村長はある意味でメディアの機能を果たしている。

ムスタファ・ケマルの方針は展望が無く、危なっかしくて、またスルタンが彼を支持しないかぎり彼には将来がないのだそうだ。しかも実際はスルタンは大分前に敵国と和平を結んだそうだ。また彼によれば「ヨーロッパ」という女王がいて、「私はあなた達イスラム教徒の問題を全て解決してあげますと言明したそうだ。」「よそ者」、57)

ここには村長の反救国戦争的な態度が明白であり、イスラム復古主義的でさえある。村長は、敵軍はイズミルだけに駐屯していたのに、なまじ救国運動が激しくなったせいで彼らはさらに侵攻して村の近くにまで迫る事態を招いたのだと、ケマリストを非難する。こうしてアヒメト・ジェラルは村長、そしてメヒメト・アリとも対立してゆくのである。そして彼は徐々に内向的になっていく。例えばこの場面の直後にエミネに遭い、一目で彼女に心をうつしてしまうのである。社会的な問題に失敗し、恋愛など個人的な問題に集中するようになるわけである。

対して「田舎教師」はその反対の道程を辿っている。主人公はまず美穂子に恋心を抱き、それに失敗して（恋愛だけではないが）戦争の発生とナショナリストの情熱的な感情の波に乗って、恋と人生の「空虚感」を埋めるわけである。

¹⁷¹ 第一次イネニュ戦勝利と同日である。

¹⁷² Shaw, J., Stanford; Shaw, Ezel, Kural, *Osmanlı İmparatorluğu ve Modern Türkiye*, 413 頁。

また「よそ者」においてイスラム復古主義的な価値を象徴する「シャイフ・ユスフ」は、村長の家で宗教的儀式や演説を行う。彼とアヒメト・ジェラルの激しい対立は避けられないが、これに村長も加わってくる。ゼイネップ婆さんとメヒメト・アリに付いてシャイフに会いに来たアヒメト・ジェラルが彼に挨拶すると、シャイフは横柄な返答を返す。「こんにちは¹⁷³という言葉は「同情」に由来するのだ。お前には私に同情する価値はない」¹⁷⁴というシャイフの敵意に、村長は「申し訳ないですシャイフ様、彼はちょっとよそ者でして」という更なる侮蔑的な言い方をする。この二つの攻撃に主人公は憤慨し、「片腕で、シャイフと村長の顔に一発ずつパンチをお見舞いしたい衝動に駆られ」る。

村人たちと更に疎遠になってゆく主人公は、片思いの相手を考えたり、浮気者の妻ジェンネットにひどい目にあっている、もう一人のアウトサイダー、スレイマンの冒険に関心を持つようになる。

このような伏線が敷かれた上で、元予備役将校のアヒメト・ジェラルと元部下メヒメト・アリの対決を引き起こすことになる入隊の日がやってくる。ここで、まず「田舎教師」から徴兵の場面を見てみよう。

召集令はすでに下った。村役場の兵事係が夜に日を継いで、その命令は各戸に伝達する。壮丁たちは父母妻子に別れを告げる暇もなく、あるいは夕暮れの田舎道に、あるいは停車場までの乗合馬車に、(中略) 一包の荷物を抱えて急いで国事に赴く姿が続々として見られた。(中略) 交通の衝に当たって町々では、いちはやく国旗を立ててこの兵士たちを見送った。停車場の柵内に町長だの兵事係だの学校生徒だの親類友だちだのが集って、汽車の出るたびごとに万歳を歓呼してその行を壮にした。
(「田舎教師」、186)

日露戦争に際した日本の「田舎」町における召集の光景は、アヒメト・ジェラルの村における「しぶしぶ」または「憤り」といった感さえ漂う「入隊」の雰囲気と明らかに様相を異にしている。「田舎教師」の興奮に対して、「よそ者」のシーンは、メヒメト・アリの結婚したばかりの妻の「悲しんで呻いている声」で始まる。そこ

¹⁷³ こんにちは、トルコ語で merhaba という。merhamet は同情、慈悲という意味の語に似ている。

¹⁷⁴ アヒメト・ジェラルの挨拶は「Merhaba」という(トルコの)民族的なものであるが、より宗教的色合いが強い「Selamın Aleyküm」というアラビア語由来の表現もある。アヒメト・ジェラルが宗教者に対して「Merhaba」と言ったことは、彼の「異邦人」という性質を現している。村長は慌てて「申し訳ないですシャイフ様、彼はちょっとよそ者でして」と謝罪するが、それは同時にアヒメト・ジェラルに対して釘をさしているのである。政教分離を信条とするケマリストと、イスラム復古主義のイデオロギー的な衝突と読むことができる。

で「村長や憲兵たち、メヒメト・アリと彼の他に入隊させられる予定の二、三人の男が村長事務室のドアの前に集まって立っている」のである。条件は「田舎教師」のそれに相似するが、「メヒメト・アリの顔は蒼白」であり、元上官さえも目に入らないほど恐怖に引きつっている。この場面で最も驚くべきことは、村長がそれまでのアヒメト・ジェラルや救国戦争に対する態度を一変させたことだ。

二人の憲兵の間に立つ村長は、村人というよりまるで政府の役人のように見える。彼は憲兵に渡された押印した書類に慎重に目を通し、上から下まで精読している。

村長は私に気づくと礼儀正しく立ち上って挨拶し、また憲兵にも立ち上がるように促した。私は椅子を取って憲兵のそばに腰掛けた。（「よそ者」、71）

ここで、アヒメト・ジェラルはアナトリアという「田舎」における都会人の「よそ者」という無価値な存在から、彼も「中に眠っている士官の魂が目を覚ます」と指摘するように元将校としての特権的な存在に移行するわけである。他方、ある意味で、ここでの村長のイメージは「田舎教師」での「夜に日を継いで、その命令は各戸に伝達する村役場」と変わらないようである。「村人」というより「政府の役人」としての村長は、国民意識に満ちているかのように、「間に合えない」と入隊を回避しようと口実を捜し求めるメヒメト・アリを「いい加減言うな」とたしなめ抑圧するのである。

一方、親類たちが万歳を歓呼して息子や夫を戦地に送り出す「田舎教師」に対して、「よそ者」では兵士の妻や母親らはあからさまな反発を示している。これをリードするのはタフな女性であるゼイネップ婆さんである。

ちょうどその時、どこから出てきたのか、突然ゼイネップ婆さんがしっかり背を伸ばし、堂々たる様子で向こうから現れた。そして村の広場にいる人々を威嚇するように睨みつけた。それはまさに仔を守る母狼の凄まじさだ。

だんだん女の数が増えてきて、一人から二人、二人から五人まで増え、グループはだんだん大きくなった。まるで何かの陰謀を企てようとするかのようなのである。（「よそ者」、72）

この危機を沈静させるのは、「中に眠っている士官の魂が」が再起した主人公であり、彼のナショナリストのスピーチが功を奏し、メヒメト・アリだけでなく、他の三人の新兵も納得するようになるのだ。全体としてトルコの「田舎」における

「国民意識の欠如」が^{とりざた}取沙汰されるこの作品において特異な場面である。適切に喧

伝えられればナショナリズムが形成する可能性はアナトリアの農民の間にも見られるのである。だが「近代的」学校教育が成立していない寒村の空間において、この盛り上がりは、徹底して持続的な国民意識には至っていない。後に述べる通り、ここでアヒメト・ジェラルは、戦争という強い刺激的文脈に支えられ、その学校教育の空洞を埋めることに一時的に成功し、「教育者」の任務を果たしていると言える。

主人公は戦争という「災いさえ、私たちを団結させることができなかった」（「よそ者」、193）と言っているが、ここを境に、彼はメヒメト・アリと以前のような部下と士官としての同胞関係を回復している。また村長は、国民意識を持つ市民として行動するようになったのである。しかし彼らはあくまでも個人単位であり、「よそ者」では、「田舎教師」に見られるような召集令が下った直後の国民的一体化あるいは「挙国一致」的な連帯感が生まれることはなく、あくまでも召集を阻止しようという向きが強いのである。

「田舎教師」に見るような、個人的な感情を抑圧した、ナショナリストとしての関係者たちの見送り方は、日清戦争や日露戦争当時までの戦争報道によって作り上げられ一般に受容されたナショナリズムの体現である。つまり「田舎教師」の停車場に集まった親類たちは、戦争に関する情報すでに獲得しているのだ。彼らは新聞の読者として、戦争に関してメディアのプロパガンダの枠組みにのっとって伝達される情報が形成した「意識」を共有しているわけである。

他方、「よそ者」の母親や妻をはじめとする親類たちは、戦争に関して無知な集団である。それで彼らの反応、つまり新兵である息子、夫または親類の男が戦争で死んだり、負傷したり、捕虜にされたり、永らく戻らないという「知識」で行動するのだ。彼らはメディア先導によるナショナリストの「意識」の影響から自由であるがゆえに、個人の不安、怒り、意志などという感情を、「田舎教師」の親類たちのように抑圧しないのである。

「よそ者」の場合は、マスメディアを通じて国情に関する認識を獲得するアヒメト・ジェラルと村長は、入隊の命令を意外とは思わないだろう。だがこの二人には「田舎教師」に見られるような、調和的均一性が見られるのだろうか。村長は、ここで突然態度が一変すると言ったが、実はそれは彼の真の信条の変化ではなく、その場の様子を見て態度を決めるという、日和見主義的な態度を取っているに過ぎない。「よそ者」の入隊の場面で、メディアを通して戦争に関する「意識」を獲得しているたったの二人の人物の間にも、ナショナリズムに基づいた均一性は形成されな

いわけである。

また、アヒメト・ジェラルは、この出来事からしばらくすると、再び「社会的な責任」から、個人的・内向的な世界に戻り、村人に対して完全に無関心になる。例えばサーリー・アーガーのセムシの息子がベキル軍曹の盲目の娘に強姦まがい肉体関係を強制するところを目撃しても、彼女を助けに行かなかった。また、それまで一度も人を殴ったことがなかった彼は、サーリー・アーガーを殴っている。体の悪いサーリー・アーガーの息子が腰の痛みを訴えて、アヒメト・ジェラルのロバを借りられないかと暗に打診すれば、彼は「気付かない振りをする」のである。またベキル軍曹は盲目の娘がサーリーの息子に暴行され、結婚する価値を喪失し、彼女がまだ12歳であることを伝えた時でさえ同情心を動かされない。こうして救国戦争に無関心なベキル軍曹とサーリー・アーガーを彼なりに密かに罰しているのではないだろうか。

他方村長は、徴税人が村に来た場面で、救国戦争に対する肯定的な態度をより強めるようである。アンカラが話題になると、彼はまるでアヒメト・ジェラルを代弁するかのよう、「偉い人は皆はあそこに集まっている」と述べる。

同じ場面で、アヒメト・ジェラルによれば、トルコの知識人は世界最強の国に挑戦しているという。それに対して、そのような「抵抗」を「非現実的」とするイスタンブールの新聞記者が登場させられる。アリ・ケマル¹⁷⁵という反救国戦争的な態度の知識人の出現が次に出現する「国民による支配」と比較される。救国戦争の唯一のプロパガンダ機関であるこの新聞には次のような扇情的な見出しが掲載される。

アンカラの「Hakimiyet-i Milliye」(国民による支配)という新聞は、「占領軍、イスタンブールに悪質行為」という記事を掲載した。また、「ふざけるな占領軍」という見出しの記事もあった。('よそ者'、93)

この新聞は、アヒメト・ジェラルの意見と相応する唯一の報道機関として浮上する。アヒメト・ジェラルはこれで読み取るナショナルの興奮、信仰などの雰囲気と

¹⁷⁵ Ali Kemal (1889~1922) 新聞記者、大学教授、政治家。ダマツト・フェリット政権の文部大臣、次いで内務大臣であった。当時独立戦争を組織していたムスタファ・ケマルに反対の立場を取り、その逮捕を画策。以前から「進展と団結党」や色々な政治グループと争っていた彼は、独立戦争後に暗殺された。

対照をなす農民の戦争に無関心のあり方の間の溝を強く感じる。これは彼の村人の対する不満の増加の種となる。

他方、この新聞の発刊の結果、村長はケマリストが勢力を拡大している現実や、トルコの勝利の可能性を認識し、トルコ人のナショナリストのような行動を取るようになったのである。先述のように、この新聞の創刊日は第一次イネニュ勝利と同日であり、村長の態度の変化はこの戦争以降の過程で明白化するわけである。あえて言うなら、「よそ者」と同時代的な作品で、同じ「田舎」における救国戦争を扱う後述の「緑夜」の「田舎」のイスラム復興主義的な権威者の「日和見主義」的な変化と類似している。救国戦争時の活動のせいで「ギリシャ軍によってギリシャに追放され」た主人公が、「共和国創立の直後に町に戻ると、不思議な様子を目の当たりにする。以前敵と内通していた原理主義者は皆、髭を剃って西洋風の帽子を被り、近代化と共和国の支持者になっている」のである。

そして、先述のように、第二次イネニュ戦争勝利を伝達する短いニュースを持ってくる箇所は、村長の国民意識形成の頂点といってもよい。村長はアヒメト・ジェラルにその「国民的な勝利」のニュースを「まあ読んでごらんなさい」とすすめ、この情報を「すばらしい」という修飾語によって評価する。そして次の、「我々は戦争に勝ったようだ」という表現は、村長の場合は裏表のある「想像」上のものであっても、村においてこの二人の間に仮想的な「共同体」が成立したことを物語っている。

「よそ者」に関する従来の論文では「村長」のこういった変化は見落とされ、彼はただの静的な村人のプロトタイプとして捉えられたのである。従来の論文のほとんどは主人公を基盤にするので、こういった誤読またはネグレクトがあったのだといえよう。

エミネによって二回にわたって「腕のない男」と蔑視され、また同じ評価をイスマイルから受けたことによって、主人公の彼らに対する憎悪は強化され、それが例えば10年ぶりに偶然村に帰還したエミネの父親に対するイデオロギーに名を借りた脅迫的な態度となって現れている。これが個人的な動機に由来する行動であることは、例えば、別の脱走兵であるジェンネットの恋人が完全に彼の関心の外にあり、無視していることから明らかである。

III. 1. 3. I. 宗教的要素

すでに述べたように、「田舎教師」46章において、海軍士官の広瀬武夫中佐の死が出現する。この軍人の死に方は新聞紙上で美化され、作戦中に軍人らしく名誉の戦死を遂げたように装われたのだ。そして彼は「軍神」、「英雄」そして「英霊」へと格上げされ、宗教的な要素によって神話化されたのである。そこで、戦闘中の死は神聖なことであるというメッセージが読み取られる。戦没者が葬られる靖国神社は、こういった戦争の神聖化の過程の中で創り上げられたシンボルである。土方美雄は次のように述べている。

靖国神社は1869年、東京・九段の田安台に東京招魂社として創建され、1879年の改称に際しては、庶民を祀る神社としては「破格」の「別格官幣社」という高い社格と、社領一万石という国家神道の総本山伊勢神宮に次ぐ処遇を得た。数多い明治の創建神社の中で靖国神社だけがこのような厚遇を受けたのは、靖国神社が幕末維新期幕府側・倒幕派の間の熾烈な権力抗争のなかで生まれた「国事殉難者」の招魂の思想に基づく、天皇の軍隊の死者を「英霊」として祀る神社であったということのなかにある。相い次ぐ内戦をから抜き、海外への本格的な侵略に乗り出そうとしていた明治天皇政府にとって、同神社のような、侵略戦争を「聖戦」と美化し、天皇と国家のために死ねる兵士を作り出すイデオロギー装置が、何としても必要だったのである。¹⁷⁶

そこで、国家やメディアは、戦争に対する国民からの支援を得、戦争そのものを正当化する上で宗教的要素を利用するわけである。「田舎教師」で「広瀬中佐の壮烈なる死」の記事を読む「田舎」の住民は、戦争に対する態度を政府と共有し、強化していったと予想される。それに対して「よそ者」はどうだろうか。

イスラム教徒が大多数を占める他の国々と「共和国創立後」のトルコの相違は、その「政教分離」主義である。村を通過する進歩的なトルコ軍の士官たちも、自分たちの主義を吹聴するのに宗教を用いるということは見られない。臨時政府の報道機関である「国民による支配」も、宗教を持ち出すことはしない。宗教的な要素を利用するメディア戦略は、トルコ政府やケマリストの側ではなく、敵軍の飛行機が撒くビラに読まれるのである。このビラを拾った文盲の村人たちは、イマームに読んでくれるように頼むのである。

イマームはたどたどしく読み始める。

¹⁷⁶ 土方美雄、「靖国神社国家神道は甦るか!」、天皇制論争、社会評論社、1986、3頁。

「親愛なるアナトリアの市民よ、ケマルのやくざ集団はもう崩壊している。我々は徐々に全ての都市や町を占領してきた。今はアンカラの方面に進んでいる。決して我々に敵対的な行動を起こさないでください。我々はハリーファに派遣され、あなた方を救いに来たのです。」（「よそ者」、171）

ここではハリーファと呼ばれるスルタンの宗教的なアイデンティティが利用され、庶民は占領をおとなしく受け入れよと諭されている。先にも述べたとおり、この宣伝は「ギリシャのこのプロパガンダは、第一次世界大戦後のトルコの占領ではフランスが1798年にエジプトを占領した時、イスラム教徒に対して行ったプロパガンダを髣髴とさせる」ものである。そして、村人は読み書きできないから、宣伝はイマームを通して村人に伝達される。またメディアの届き方も、村人の興味を引くようである。彼らは空からヒラヒラ落ちてくるビラを拾い集め、進んでイマームに解説を依頼している。そこでイマーム自身が末端メディアの役割を果たしていると言える。ビラのメッセージを読み手としてのイマームが読み上げてそのメッセージは聞き手としての村人に伝達され、伝達作用は最初の発信者であるギリシャ空軍の思惑通り成功するのである。

III. 1. 3. m. 「メディア」としてのイマーム

1830年以前、つまり報道機関が成立する以前、国家はあらゆる勅令や禁令を、区域ごとにあるモスクのイマームを通じて伝達した。国（スルタン）の発するニュースは、全国的にほぼ同時に、夕方（ヤツ）でイマームから人々に告知されるのであった。当時のオスマン・トルコ社会では、トルコ人や他のイスラム教徒の青少年および成人男子はほとんどヤツの祈りに参加していたので、この場を公共の情報伝達に利用したのである。区域のイマームの地位は徐々に固定し、重要度を増した。例えば、近代化の過程でカドゥという法官の地位が衰退した時でも、イマームは権威を保ち続けたのである。1839年のタンズィーマトの改革直前にイマームたちが宗教以外の政治などに関わらないように予防策がとられ、ムフタルと言われた区域長がイマームを監督するように任命された。1829年にムフタルが機能し始めると、彼らがイマームの権威を侵食するようになる。そして1923年の共和国創立と共に、イマームの権威は完全に宗教だけに制限されることになった。

つまり「よそ者」においてイマームがメディアの役割を果たすことは、決して偶然ではなく、歴史的な背景が考慮された結果だったと考えられるのだ。村長もイマ

ームも、この二つの「地位」の歴史的展開に即して作り上げられた人物像と言える。すでに取り上げられた村長の変化は、近代的国家の聖職者の政事への干渉を防ぐという任命を持つ彼が、敵軍に対する連勝にあたり、政治の面でも力を増していくムスタファ・ケマルのグループの展開を慎重に観察し、この新しい国状によって政治的態度を変えるわけである。それに対してイマームは、政治への干渉力はすでに絶たれた人物として描かれるものの、依然若干変形した形で、メディアとして機能するという相関図が立ち現れてくる。

III. 1. 3. n. 「田舎教師」の和尚と、イマームの比較や「よそ者」の農民の出版物に対する迷信

「田舎教師」では、宗教的な要素を与えられるのは戦死者たちだけでなく、「天地万物の主宰者」であり「天の命令を受けて人民をを治める」¹⁷⁷天皇であることは言うまでもない。日本の戦争のプロパガンダは、日本政府によってその国民に対して行われ、敵に対して戦うことを国民に要求する一方、「よそ者」の宗教的宣伝は敵軍によって降伏を促すために使われている。

その上、「田舎教師」の和尚は、イマームと同等の聖職者でありながら、かなり進歩的なイメージを与えられた人物である。山形古城というこの人物は、「文壇に聞こえている名家、新体詩の有名詩人」であり、出家して羽生の「成願寺」に和尚として勤めている。彼は宗教者でありながら、知識のレベルが高く、「書箱には洋書がいっぱい入れられてあり」つまり外国語読解能力のある人物である。しかも、彼は後に従軍記者として活躍する原杏花の友人でもある。

原は和尚に、金州から軍事郵便で「従軍した知名な画家」によって描かれた「戦死したある兵士の死屍の傍に菖蒲が紫に咲いている」絵葉書を送ってよこす。ここから、日本の当時の状況として、メディア・軍隊・宗教の連带的三角関係が伺える。「田舎教師」において「宗教」は戦争を支持する立場を取り、メディアにおいてもよく利用されるのである。

それに対して「よそ者」では、村人の俗信により、出版物は彼らの恐怖心を煽る

¹⁷⁷ 『広辞苑 第五版』

だけのものである。例えば村人たちは、アヒメト・ジェラルが「読書して徹夜する」することに対して不審を抱いている。メヒメト・アリは彼に対して「夜が明けるまで何で書物を読んだりするんです。村人はあなたが呪術でもやってるのかと思うかも知れない」と注意する。またすでに引用した段落でみられるように、エメティ婆さんは新聞に人の写真などが載っているからという理由で、「触ることさえ嫌がっている」のである。家事をこなすために雇われたにもかかわらず、彼女はそのせいでアヒメト・ジェラルの部屋に入ることさえできない。写真への恐怖心は宗教とは直接関係がないが、イスラム教の預言者ムハンマドは、自分の偶像化を予防するために、彼の肖像画を描くことを禁止したのである。そして、ナマズというイスラム教の祈りの時、壁にかけてある絵や写真は裏返される、あるいは見えないところにしまわれる習慣もあり、これも写真・絵という偶像に祈るようなイメージを回避するための行動である。

このように、メディアにおける宗教、聖職者、メディアと戦争の関わり方などは、「田舎教師」と「よそ者」では質を異にしている。「よそ者」では「無知」による俗信的な信仰が出版物に対する偏見的、否定的な態度を引き起こす障害として描かれ、しかも村人の信仰はナショナリズムと無関係で且つ対立的な要素として出現する。これに対して、「田舎教師」においては、宗教はメディアのナショナリスト・プロパガンダを支える役割を果たし、それによって効果的に国民を創造することに成功しているのである。

III. 1. 4. 戦争を正当化する手段としての新聞—国民の支援を目指す新聞と外交的な新聞

日露戦争時の日本では、政府に楯突くような記事を掲載すればすぐに一定期間の発行停止処分を喰らうという政府の厳しい報道管制の下で、商売を続けるためには「政府の言うなり」になるしかないという事情や、戦争を支持する他の新聞の売れ行きの好調に押され、反戦的な態度を取った新聞各社が次々に開戦論調に転向していったことをすでに述べた。つまり「田舎教師」にも頻繁に登場する報道機関は、読者である「国民」に好戦的ナショナリズムを注入し、戦傷、戦死を神聖化し、戦争への身体的、精神的支持を固める役割を果たしたのである。

他方、「よそ者」に登場する「Hakimiyet-i Milliye 国民による支配」は、その名の示す通りケマリス

トの意義を国外やイスタンブールに表明するものであり、その役割は日本のマスメディアとは大きく異なっている。「よそ者」において救国運動のプロパガンダを行う唯一の報道機関¹⁷⁸として、その目的は、「トルコ国内外にケマリストたちの声を届ける」ことである。それに従って「国民による支配」は、世界に自らの態度、意図、法的正当性、軍事的勝利などを発信した。特に占領国であるフランス・イギリス・ギリシャ・イタリアや、米国とソ連政府・議会に対して、目的・意義の伝達、外交上の交渉手段として用いられた。そして、国内的にも、イスタンブール政府、特に（後の段階でスルタンや政府と断交したので）、イスタンブールにいる議員との交渉や、メッセージ伝達手段としても使用されていた。対象とするのは、士官階級、官僚などをはじめとする都会人、知識階級であった。農民などの庶民はほとんどこの新聞の読者として想定されていなかったのである。つまり救国戦争時の「国民による支配」は、日露戦争時の日本の各新聞とは違って、マスメディアというよりは、外国政府・議会、オスマン帝国政府・（当時閉鎖された）議会の議員や知識階級という特権的特定少数の「読者」を対象にした機関紙のような、小規模のメディアであったと言える。

清三の異質的・孤立的な態度が、同質的・社会的な態度に変化するきっかけは、メディアとそれによって形作られた社会空間の中にある。清三の変化の中に、我々はすでにメディア受け入れの土壌ができた「田舎」において新しい公共圏が形成する過程を見るわけである。それに対して、アヒメト・ジェラルがメディアの導入されていない「田舎」空間において、社会性から個人性へとその存在の重心を移行させる様を通して、公共圏の成立し得ない条件を明確に知ることができる。言い換えれば、「田舎教師」では世間話や新聞から獲得した情報の交換によって公共圏が発達するのに対して、「よそ者」では、イマームは文盲（あるいは読み書きのレベルが低い）村人にビラを読み聞かせ、メディウムとして成功する一方、アヒメト・ジェラルはカーヴェで村人に新聞から獲得した情報を伝えようとするが、これに失敗している。彼はなぜ情報の共有に失敗したのだろうか。

The development of mass communication greatly expands the scope for the operation of ideology in modern societies, for it enables symbolic forms to be transmitted to extend potentially vast audiences which are dispersed in time and space.¹⁷⁹

¹⁷⁸ 他にも Yenigün という新聞があった。

¹⁷⁹ Thompson, John, B., *Ideology and Modern Culture: Critical Social Theory in the Era of Mass*

(マスコミュニケーションが発達したことによって、時間と空間にまたがって広がる潜在的に広大な対象に対して様々な象徴が発信されるようになるので、近代社会ではイデオロギーの操作範囲が格段に広がった。) ¹⁸⁰

「よそ者」の農村にはこういったイデオロギーの拡大 (Expansion) も、ナショナリズムというイデオロギーの発達も見られない。言うまでもなく、その最大の要因は、当時の「^{アナトリア}田舎」における識字率の低さである。読み書きの出来ない農村社会においては、読者の大衆は形成し得ず、フェイス・ツウ・フェイスの関係が続いてきたわけである。

While mass communication involves the exchange of symbolic forms, the kinds of communication established thereby are quite different from those involved in ordinary day-to-day conversation. For mass communication generally involves a one way flow of messages from the producer to the receiver. Unlike the dialogical situation of conversation, in which a listener is also a potential respondent, *mass communication institutes a fundamental break between the producer and the receiver*, in such a way that recipients have relatively little capacity to intervene in the communication process and contribute to its course and content. ¹⁸¹

(マスコミュニケーションは様々な象徴をやり取りする一方、そこで確立されたコミュニケーションの種類は通常、日々交されるされる会話に含まれるコミュニケーションの種類とはかなり異なったものである。なぜなら、マスコミュニケーションは一般的に発信者から受信者に対してメッセージが一方通行であるからだ。会話では聞き手が受け取った情報に対して反応することが可能であるが、そのような対話的な状況とは異なり、マスコミュニケーションは根本的に発信者と受信者の間を断ち切ってしまい、受信者はコミュニケーションの過程に介在する隙がほとんど許されず、またその方向性や内容に寄与することができないという状況を生み出すのだ。) ¹⁸²

こうして、メディアの伝達の際、報道機関と読者の間に必然的な上下関係が形成する。この関係において、読者は受身であり、日常生活の会話のように、メッセージを与える主体に対して応答することは出来ない。逆に言えば、読み手の側に「空虚」な、受動的な心理的用意ができていない限り、この種の情報伝達は成立しないわけである。

「よそ者」において、アヒメト・ジェラルはメディアの役割を担い、国状に関する最新情報を村人に伝えようとするが、これに失敗する。その原因は、農民が文盲

Communication, Stanford University Press, Stanford, 1990, 266 頁.

¹⁸⁰ 日本語訳は引用者による。

¹⁸¹ 同前、15頁。

¹⁸² 日本語訳は引用者による。

であるということだけではない。彼らは当然新聞を読むことができないわけであり、新聞というメディアを読むことが、ある意味で読者の消極化、受動化であるなら、村人は、新聞という主体に対して、消極的な受け手・対象となるべく「教育」を受けていないことが、彼の失敗の根本的な要因であるのだ。

鈴木という言葉を借りれば、「公共圏」とは国家と社会の分離の中で両者を媒介するものとして成長してきた社会的空間のことである。マスメディアはそれを構成し、かつそれに影響力を与える有力な装置と位置づけられている¹⁸³。

メディア的役割の担い手としてのアヒメト・ジェラルは、こういった「公共圏」を作ろうとする。この公共圏が成立しなかった一つの原因は、村人が新聞を読むことによってしか獲得され得ない、情報伝達上の「上下関係」の意識を持たないことである。また、フェイス・ツウ・フェイスの関係が続いている村人のコミュニティから離れた存在であるアヒメト・ジェラルはあくまでもよそ者としてその情報網からはずれ、また拒絶されており、さらに彼の操る「国民」などの概念は村人たちの知識の外であるので、彼らは単に消極的な無知というわけではない。積極的に解釈すれば、文盲の彼らはマスメディアの作り出す「上下関係」に組み込まれることを拒否したのである。一方で彼らが受け入れたのは、宗教的権威者であり見知りの「イマーム」というローカルメディアから得る情報であり、また宗教的な要素を利用して彼らの知識に訴えた敵軍のビラの情報であったのだ。

III. 2. 「田舎教師」における学校教育と国民意識形成

1868年の戊辰戦争において、官軍を率いて会津藩に進攻した板垣退助が、旧幕府側に属する会津の農民の戦争への無関心や「非連帯感」に驚く部分が『自由党史』の冒頭で、次のように記述されている。

かの会津は天下の雄藩といわれていたが、その亡びるにあった国に殉じて死んだ者はわずか五千の士族にすぎず、農商工の庶民は皆荷を担いで逃げ出していた。(中略)憂国まごころは自然と生じる。(中略)もし上下が心をつにして協力し藩のためにつくしたならば、わずかに五千未満の官軍どうしてこれを容易に降ろすことができたろうか。けれどもこのように庶民が難を避けて逃げ散

¹⁸³ 鈴木健二、『ナショナリズムとメディア——日本近代化過程における新聞の功罪』、27頁。

り、すこしも世々の君恩に酬いる気持ちがなく君国の滅亡を見て無関係とを感じるだけなのは果たしてなぜか。¹⁸⁴

欧米諸国が日本の政治的独立を奪うために軍隊を動かす可能性があり、その際に国民の大多数を占める被支配階級、つまり農民、商人、工人などが戦うことを拒むという不安があった。¹⁸⁵当時の知識人、官僚、政治家は国民の創出の必要性を認識したわけである。なるほど、軍国の成立の過程で、農民と国家の関わりは順調に進まず、1872年11月の徴兵告諭文中「・・・西人コレヲ称シテ血税トイフ。ソノ生血ヲ以テ、国ニ報ズルノ謂ナリ」の「血税」の語に刺激された農民が、1873~74年に、憲兵令に抵抗して起こした一揆の運動はこれの証左であろう。この一揆は国民皆兵の方針に基づき、満20歳以上の男子を兵籍に編入し兵役につかせる徴兵令が布告された1873年1月の時点でもまだ続いていたのである。この文章は明治初期の日本において、国民意識の創出の上で、学校教育の重要性を認識させるものの一つである。

また、それに対して敵側の連帯感の不足の問題を分析している内容は、トルコ救国戦争の時の、アヒメト・ジェラルの村人の態度を思い起こさずにはいられない。その内容はアヒメト・ジェラルやこの小説に関して著された一部の小論にも通じるところがある。封建制度における上下の隔絶がこの問題の原因として提出されるが、封建制度が成立しなかったオスマン・トルコの「田舎」でも、国民意識の欠陥という問題が見出されるわけである。

福沢諭吉は、次のように支配・被支配階級に分断された社会を憂えている。

もとのこの国の人民、主客の二様に分かれ、主人たる者は千人の智者にて、よきように国を支配し、その余の者は悉皆何も知らざる客分なり。既に客分あれば固より心配も少なく、ただ主人にのみ頼りすぎりて身に引き受くることなきゆえ、国を患うことも主人の如くならざるは必然（中略）なり。国内ことなれば兎も角もなれども、一旦外国と戦争などの事あらばその不都合なること思い見るべし。無智無力の小民等、戈を倒にすることも無かるべけれども、我々は客分のことなるゆえ一命を棄つるは過分なりとて逃げ走る者多かるべし。さすればこの国の人口、名は百万人なれども、国を守るの一段に至ってはその人数甚だ少なく、逆も一国の独立は叶い難きなり。¹⁸⁶

¹⁸⁴ 福田義也、『教育勅語の社会史——ナショナリズムの創出と挫折』、有信堂、東京、1997、14~15頁。ルビは引用者による。

¹⁸⁵ 同前、11頁。

¹⁸⁶ 同前、11~12頁。

福沢の日本の小民に関する分析や、「日本にはただ政府ありて未だ国民あらず」という指摘は、上記の板垣のアプローチと同様に明治初期のこの国において国民意識の確立の必然性に注意を向けたのである。国民意識の確立において学校教育というのは必然的な、しかも唯一といって効率的な手段であった。国民意識形成、換言すれば「国民の創出」の上で、教育は「軍事と経済発展を提供しただけでなく二八〇に分割された藩から、一国家を形成する大きな促進力となり」、「統一された教材の使用と、国語（東京方言を修正したもの）の普及を通じて、学校は民族国家としての一体感を形成するのを促進し、地域に対する忠誠心を国への忠誠心に置きかえる」¹⁸⁷役割を担ったのである。

日本において天皇制軍国主義の確立段階では、日露戦争が一つの大きな契機を提供した。周知のように、明治維新以降、1894~95年の日清、1904~05年の日露戦争を経て、日本は「遅れてきた帝国主義」を開花させていった。とりわけ日露戦争は、10年前の日清戦争に比して費用や死傷者数などあらゆる面で規模が数段拡大し、大きなエネルギーが注入された。この「遅れてきた帝国主義」を基調とする政治的なダイナミズムが国政のあらゆる面を支配し、教育の分野は軍国主義に濃密に包み込まれていったのである。戦時体制下の教育を通じて青少年に対して帝国主義が正当化され、国民意識、軍国主義の浸透が進められるとともに、「戦時体制をバネとして教育内容の画一的「軍国教育」化をはかり、それを恒常化して戦後教育体制に定着化しようとする方針」¹⁸⁸が明示されていたのだ。

明治以降の近代化過程にある日本において、都会が「国民意識形成」の中心であったが、地方の庶民を国民化する必要があった。板垣の観察でも明らかになった「非国民意識」の問題を解決する上で、天皇制軍国主義的な教育が重要であるのは言うまでもない。

III. 2. 1. 学校教育における天皇制と国民意識

挙国一致政策を推進する上で、戦前の学校教育で天皇は父系制度の頂点に立ち、国民は天皇を神として、またいわば国の父として崇め敬うことが徹底された。「田舎

¹⁸⁷ 同前、6~7頁。

¹⁸⁸ 大江志乃夫、『国民教育と軍隊』、新日本出版社、東京、1974、124頁。

教師」の10章において、清三が「授業を始める前に」「卓の前に立って、まじめな調子で生徒に」皇太子妃の出産のニュースを伝える。これは「皆さんも新聞紙上でお父さまやお母さまからすでにお聞きなされたこと」であるが、教師としての彼は、おそらくまだ新聞を読む能力を持たない生徒たちに「皇太子妃殿下^{さだこ}節子姫には去る二十九日、新たに親王殿下をやすやすと分娩あそばされ」たことを、上品な敬語を以って知らせる。ある意味で「人間形成に大きな影響を及ぼす」¹⁸⁹家庭教育と、学校教育は相互補完的に作用しているのである。そして、主人公はこの出産を、「おめでたい」ことだと評価し、「皇室のお栄えあらせらることは、我々国民にとってまことに喜悦に堪えませんこと」であるとして、皇室と国民は分かち難い関係であるという意識を強化している。また清三はこの「喜悦」を「千秋万歳、皆さんの毎日お歌いになる君が代の唱歌にもさざれ石の巖となりて苔のむすまでと申してございますとおり（10章、89）」というように、この詩的な文体に伴うロマン主義的なナショナリズムは、戦争を遂行する上で重要な要素となるのである。

III. 2. 1. a. 戦争とナショナリズムの中心地としての学校

日露戦争の開戦によって、次世代を担う児童生徒に強固な国民的連帯感や帝国戦争支持を植えつける必要性が生じ、学校教育の重要性が認識された。日露戦争宣戦布告の当日 1904 年 2 月 10 日に、文部大臣久保田譲は訓令を発した。

思フニ今回ノ事変タル其ノ関スル所極メテ大ニシテ其ノ結果ハ遠ク我国家ノ将来ニ及ブベシ、是ヲ以テ教育者ハ能ク学生生徒^{クンカイ}ヲ訓誨シテ青年子女ガ国家ニ負フ所ノ責任ハ将来益々重ヲ加フルニ至ルコトヲ知ラシメ、他年此ノ重大ナル責任ヲ尽ス所以ハ修学時代ニ於テ専心一意心身ノ修養ヲ務ムルニアルコトヲ体認セシムベシ、故ニ一勝一敗ノ報ニ接シテ常度ヲ失スルガ如キコトナク、又他日戦捷ノ結果平和ヲ克復スルニ至ルモ国家ノ前途ハ益々多事ニシテ、今日ノ学生生徒ガ成業ノ後国家ニ尽スコト^{イヨイヨ}ノ愈々容易ナラザルヲ深ク覚ラシムベシ¹⁹⁰

他方、明治天皇は久保文相に「軍国多事ノ際ト^{イニド}雖モ教育ノ事ハ^{クチマ}忽ニスベカラズ、其局ニ当ル者克ク励精セヨ」¹⁹¹という指示をしたのである。「田舎教師」では、

¹⁸⁹ 『広辞苑 第五版』

¹⁹⁰ 大江志乃夫、『国民教育と軍隊』、111 頁。ルビは引用者による。

¹⁹¹ ルビは引用者による。

こういった日露戦争当時の学校教育の重要性、教師の役割が明らかである。学校は国家ナショナリズムの中心地の様相を呈している。

日露戦争の勃発時、そのニュースは新聞などのマスメディアを通じて「田舎」空間に浸透する。44章の最初のパラグラフにその状況が記述され、学校が再度天皇制との関係で出現する。「紀元節の日には校門には日章が立てられ」、「講堂からオルガンが聞こえた」のである。オルガンは「君が代」を奏でていたのであろう。紀元節に校長が教育勅語を読み上げ、「君が代」および然るべき唱歌を斉唱することは文部省の義務付けるところであったから¹⁹²、あえて「君が代」の演奏と言わなくともそれと知れる。明言しないことによってかえってその神々しさを増す効果があるとも言えよう。

III. 2. 1. b. 戦争に関して校長の指導的立場と教師たち

学校教育の役割が重要になり、学校はナショナリズム育成の中心として児童生徒に「国民意識」を植え付けるという任務を帯びる教師たちの価値が同時に上がってゆく。「田舎教師」では、特に校長が戦争の展開に精通しているように描かれている。

44章において、戦争勃発直後すでに戦争の話題は学校空間において頻繁に人々の口にのぼっている。校長は学校にナショナリストの雰囲気を作成させ、それを先導する人物として出現する。彼は、「敵の浦塩艦隊が津軽海峡に襲来して、商船なごのうら奈古浦うらじお丸を轟沈した」という衝突の地政学的な位置を具体的にイメージできるよう、「教授用の大日本地図を教員室に懸け」る。これは、老訓導、関さんなどの教員全員の注意を戦争という問題に向けることを目指している。その結果、それまで戦争に対して冷ややかだった清三も、長い間地図の前に立って日本の商船の轟沈を沈思黙考するのである。校長はそこそこで戦争に関する解説的な発言を挿入している。国家によって担わされた責任を意識する彼は、戦争の状況を慎重に読んでいるようである。

¹⁹² 1893年（明治26年）に文部省は「小学校祝日大祭日儀式ニ関スル件」によって、紀元節、天長節および1月1日には、学校職員ならびに生徒は「君が代」ならびに相当の唱歌を斉唱し、天皇皇后の「御真影」に最敬礼し、校長は教育勅語を読み上げまた訓戒を発するなどの儀式内容を規定した。

日露戦争は、小説の背景をなす一方、語りの枠組みの中では、日本軍による「旅順の陥落」が緊張感を生む装置として機能している。作品の結末に「旅順陥落」と清三の死という二つの出来事が相対的に結び付けられ、クライマックスとなるのである。それに先立って、校長は旅順陥落について、「どうも海軍だけではだめですよですな」といったコメントを差し挟み、冷静な分析力を誇示している。また 50 章では清三が大家と旅順について会話しているが、清三は「来月の十五日までにはきっと取れるって校長なども言うんです」と校長の発言を引いている。

さらに教師たちの間では、鶏と鶏卵を種に旅順陥落の日を予想する賭けが行われる。そして彼らは、その日が「休日であろうが何であろうが」「職員一統学校に集って大々的祝宴会を開くことを決めるのである。54 章でいよいよ旅順陥落の日が近づくと、祝賀ムードは否が応でも盛り上がってゆく。教師たちは、その時には休暇中でも「学校に集まって、万歳を唱える」ことを決議する。学校は「田舎」空間で国家による公定ナショナリズムの確立の上で重要な位置を占める機関となり、校長を始めとして教員たちはこの責任を意識しているようである。

III. 2. 1. c. 軍国主義的な儀式と学校の関係

「田舎教師」の 46 章の「卒業証書授与式」の場面では、郡長が卒業の祝辞の演説の中で、生徒たちにメッセージを与える。

「皆さんは記念とすべきこの明治三十七年に卒業せられたのであります。日本の歴史の中で一番だいじな時、こういう時に卒業せられたということは忘れてはなりません。皆さんは第二の日本国民として十分なる覚悟をしなければなりません。」¹⁹³

語り手は、この祝辞は平凡ではあるが、時世が^{かんが}鑑みられる場合、聴衆に強く訴えるものがあつたと言っている。

日露戦争の過程で、軍国主義的ナショナリズムが庶民に植え付けられる中、学校とりわけ小学校が重要視された。だが、国家のイデオロギーを生徒に注入するという教育は、ただ授業を通じて行われたわけではない。この教育は比較的「インフォーマル」な空間での活動へ児童生徒を参加させることによっても実施されたのであ

¹⁹³ 下線は引用者による。

る。そのような課外活動は、子供たちに年少のうちから軍国的な責任を持たせることで彼らに高い国民意識を植え付けることを目的としたのである。このような活動の主要なものは、「田舎教師」にも見られる兵士たちの見送りや戦死者の葬式などの儀式参列である。

44章の兵士たちの見送りのシーンでは、学校生徒たちは「駐車場の柵内に」兵事系、親類友達とともに集まって万歳を歓呼して兵士たちを見送った。

他方、戦争や天皇制軍国主義の普及における学校の特権的な立場を最も顕著に表すのは、49章の戦死者の葬式の場面であろう。主僧のお経、知事代理の祭文の後、小学校の校長が祭文を読む。「続いて親友の教員が、奉書に書いた祭文を高く捧げて、震えるような声で読み始める」が、参加者の中には「小学校の生徒の列」が見えるのである。最初の段階では語り手は生徒の重要性をそれほど強調しないが、葬式の最も重要な部分で、生徒たちは再び登場する。「棺が墓に運ばれる時、広場に集まった生徒は両面に列を正」し、戦死者を「整然として見送」るのである。

こういった儀式への生徒たちの参加は、国家の「天皇制軍国主義」というナショナリズムのイデオロギー注入政策の一環である。例えば1904年10月28日に、文部省は小学校長に「学校長へ訓示及注意事項」を令達した。その「注意事項」には次の一条がある。

軍人ノ送迎、葬儀ナドニ小学校児童ヲ立合ハシミルハ必ズシモ禁ズベキコトニアラザルベク、場合ニヨリテハ却テ進ンデ之ニ加入スルガ如キコト亦コレナキニアラザルベキモ、為ニ授業ニ影響スルガ如キコトナキニ努ムルコト¹⁹⁴

先の葬式に戻れば、清三がこの儀式を偶然目にし、その最後の光景に対して「堪らなく悲しくな」り、原杏花が「軍司令部といっしょに」従軍記者として戦地へ出発する前の儀式について書いた文章を思い起こす。「小学校の生徒は両側に整列して万歳を唱え」、原は心の中に次のように「絶叫」したという。

「^{なんじ}爾、第二の国民よ、国家の将来はかかって^{なんじ}汝らの双肩にあるのである。健在なれ、^{なんじ}汝ら第二の国民よ」（「田舎教師」、195）¹⁹⁵

¹⁹⁴ 大江志乃夫、『国民教育と軍隊』、125頁。

¹⁹⁵ 下線は引用者による。

先の卒業式における郡長の祝辞に通じる内容である。郡長の祝辞の場合、彼の平凡な言葉に、観衆は「時世の言わせる強味と憧憬」を表し、「心を動か」したと言うが、他方原杏花は壮行の見送りの中で、「その時ほど熱い涙が胸に迫ったことはなかった」と言い、一人興奮を噛み締めている。

言うまでもなく、郡長の演説は、国家から生徒たちへのメッセージであり、また従軍記者としての原のテキストは、マスメディアの生徒たちに対するメッセージである。つまり、彼らはいずれ第一国民になるべき「第二の日本国民」である、すなわち、彼らもいずれ国のために命を捧げる兵士になるという共通のメッセージであり、国家の統制の下、マスメディア、学校が連帯して軍国主義のプロパガンダを行っているわけである。

III. 2. 2. 「よそ者」と同時代作品における学校教育の位置

III. 2. 2. a. 学校教育の質

すでに引用した通り、アヒメト・ジェラルがイスマイルと初めて会ったとき、彼に学校を通っているかと問うと、14歳である彼は学校へ行かないことを通常の、しかも必然的なこととして捉えていることがわかる。この質問に驚き、「学校？僕が学校へ通ったら誰がこの家の面倒をみる」と聞き返ししながら、「勉強したい子は村のイマームの家へ行っている」と答えている。農村空間では、都市空間とは違って、学校教育は義務でなく、いわば「暇つぶし」のようなものであろう。彼の発言から、イマームが、聖職者である一方、教育者としても任務を果たすことがわかる。

オスマン・トルコの近代化過程において、小学校は最も発達が遅れた分野である。1824年に、マフムト二世は、初等学校教育を義務化するような勅令を出した。だが、これには、児童が5、6歳で「弟子」として仕事に就くため、イスラム教を習う機会がないという理由であった。その学校はマハッレ・メクテビ（区域学校）と称され、モスクの近くに設立されて、コラーンや祈りに関する知識を教授し、生徒を「この世」でなく、「あの世に」備えるように育てていた。教え方や教育の内容において伝統性を、考察力より暗記力を中心にすること、生徒に恐怖心を植えつける処罰に基づいた教育が行われていった。

小学校が発達しなかった理由は、教師を教育する「師範学校」が存在しなかったことにある。1848年に男性教師を教育する^{ダー - リュル ム ア リ ミ ン}Dar- ü l Mualliminと、1870年に女性教師

ダー・リユルム・ムアッリマト
を教育するDar- ü l Muallimatが創設された。これらの学校は、国の宗教的最高権威者であるシェイヒリユルイスラム¹⁹⁶でなく、文部省に属した。師範学校へ入学する学生は、宗教的学校であるメデレセの卒業生と、政教分離・非宗教的な学校の卒業生とが混在した¹⁹⁷。

小説では、国の「田舎」の一部や都市、町ではすでに近代的政教分離教育が行われ始めたということになっている。言うまでもなく、教師としてのイマームは師範学校の卒業生であるわけではなく、教授法どころか、読み書きさえきちんと学んだ形跡はない。ギリシャ軍の撒いたビラを、村人に「たどたどしく」読み上げるというから、その程度は知れている。また、彼は村の地主の親友であり、しかも「5クルッシュだか10クルッシュの心付けを目指して」敵軍を先導するという、生徒たちにモラルの上でもモデルとは言えないイメージで描かれている。

III. 2. 2. b. 村人の自己表現不足とコミュニケーション不足という問題—村人の無教育の問題

主人公は頻繁に、村人とのコミュニケーションに悩んでいることを強調している。彼の村においてメディアの役割を果たすことに失敗し、救国戦争のプロパガンダを行えないことも、彼らの抽象的な概念に対する無知に由来するのである。洞窟住居時代の人間のように洞穴などに居を構え、家畜とも普通以上に近い彼らの生活空間において、「考える」ということは、怪しからぬ、やってはいけないこととなるのである。またアヒメト・ジェラルは「村人と話しをする時、抽象的な意見を述べようとしても、彼らにわかってもらうことが無理だと悟り、口が利けな」と述べている（「よそ者」、42）。

教養のある自分のような学識者と、村人の知識的な溝を、「教育を受けたイスタンブールの若者とアナトリアの村人との間にある知識の差は、ロンドンのイギリス人とパンジャブのインド人との差より大きかろう」（「よそ者」、53）と、植民地主義的な比喩で表現する。またエミネを「猫のように、自然に近い生き物ではないだろうか」といって、「彼女はワンの猫よりも賢いということはないのだ。彼女の話すこととワンの猫の鳴き声には一向違いはないだろう。」（「よそ者」、119）と、彼一流

¹⁹⁶ Şeyhlülislam, 英語では Sheikh ul-Islam。

¹⁹⁷ Berkes, Niyazi, Türkiye’de Çağdaşlaşma, 230~231 頁。

の独特な差別的な言い方で彼女の形容無知を形容している。

他方、教育を受けていない村人は、考えや感情をうまく言葉に写せないことも小説においてしきりに問題にされる。アヒメト・ジェラルが崇拝する救国戦争の二人の司令官、ムスタファ・ケマルとイスメト・イネニユを見たというメヒメト・アリに、彼らの外見などについて詳しい描写を要求する。だがメヒメト・アリは彼が求めるような情報を的確に伝える術を知らず、平凡なことしか言えない。メヒメト・アリの想像や表現力の貧しさに関して、主人公は「彼ができるだけ具体的な情報を私に伝えられるように、できることならば私の想像力、私の感性、私の舌も口も表現力も彼に貸してやりたい」という。

敵軍の部隊が村に近づくのを目撃した牧童のハサンがこれをアヒメト・ジェラルに伝えようとするが、「ほらあなたがずっと言っていた奴らだ」としか答えられない。「ギリシャ軍」という知識や、「敵軍」という意識がインプットされていない牧童は、より短い文で自分の考えを表現できないのである。

ギリシャ軍兵が、アヒメト・ジェラルの家に入り込み、彼にランプをつけるように指示する場面で、隠れていたエメティ婆さんが、初めて見た懐中電灯に対する驚きのせいで、「ほら、明りなら窓の中にあるじゃないか」という。彼女のこういった無知に対してトルコ語の知識のあるギリシャ兵は「堪えきれないといった様子で、一斉に大声で笑」うのみならず、アヒメト・ジェラルまでも「エメティ婆さんのこの言葉は、実際とてもおかしくて、私も嘔き出してしまいそうだった」と彼女の無知さの可笑^{おか}しさを白状する。こうしてアヒメト・ジェラルが、村人の表現力や語彙の欠如、自己表現不足、そして文化化の基準である「情念や、衝動を抑制」ということができない、つまり文化化していない、という問題の原因を、近代的な教育制度の未発達に見ている。またここでは、少数民族向けの学校で教育を受けたギリシャ人と教育を受けていない農村のトルコ人の相違も顕在化するといえる。

III. 2. 2. c. 教育の画一性

すでに述べたとおり、日露戦争時の日本において画一的な学校教育が行われ、それに軍国主義的な要素が植えつけられていた。天皇、政府、文部大臣、町長、郡長、校長、教員、生徒という、国家から「第二国民」の学生までのヒエラルキーが確立され、この教育によって国家のナショナリストのイデオロギーがトップ・ダウン式

の機構で注入されていた。それに対してオスマン帝国では学校教育はどういった形で作用していったのか。日本の日露戦争当時の教育に見られる画一性は、オスマン・トルコに存在したのかをここで考察しよう。

すでに明らかなように、「よそ者」の^{トボス}場をなす農村では非宗教的な学校は成立していず、読み書きを含めた宗教的教育も実質的に行われていない。あらゆる点で村と疎遠なものとして表象される主人公は、ナショナリズムの植え付けをはじめとして、無知蒙昧の中にある村人の教育に乗り出すのである。

ギュンテキン¹⁹⁸は主人公を「(農民に) 文明的な概念を語り、彼らを日常生活のニーズに制限された空間から別世界に連れて行く」¹⁹⁸人物と捉えている。明言はされないが、アヒメト・ジェラルが村人を国民化する教育者の任務を果たそうとしているわけである。特に元兵士であったベキル軍曹やメヒメト・アリに対して再教育を施そうとしている。

このテーマを次の章で詳しく取り上げるが、ここで小説内の時代におけるオスマン・トルコの学校教育を更に広い角度から検討する上で、「よそ者」に付け加え、学校教育の問題に焦点を集める *Çalılık* (「ミソサザイ」1922)、『*Yeşil Gece*』(「緑夜」1928)、*Vurun Kahpeye* (「あの阿婆擦れを殺せ!」、1926)をも題材として扱う。そうして、国の多民族性、そして特にラジカルなイスラムという条件と教育の相互関係を検証する。また、「田舎」における学校教育のあり方を通じて、ナショナリズムとの関わりを見出すことにする。

*

救国戦争前後のオスマン・トルコをトボスにする「ミソサザイ」の主人公であるフェリーデ(女性)は、高位士官の父親の勤務先(現イラクの)モスル¹⁹⁹に生まれ、6歳の時母親の急死によって彼女だけが親戚を頼ってイスタンブールにやってくる。それまでアラビア語を第一言語としていた彼女は、この歳からトルコ語を習い、そして中等、高等学校はフランス風の学校へ通う。そして突然の決断で、「田舎教師」になるわけだが、アラブやフランス風の文化で育った彼女が、トルコの「田舎」でトルコ人の児童を育てることになるわけである。

このように、オスマン・トルコの学校教育には、国の多民族構造の影響が顕著である。当時、トルコ人の上層階級の子供とキリスト教系、ユダヤ系の少数民族の子供

¹⁹⁸ Güntekin, Reşat, Nuri, “Yakup Kadri Bey’in Yeni Eseri,” 224 頁。

¹⁹⁹ トルコ語では Musul。イラク北部 Tigris 川に臨む市。

たちが共に学ぶ外国風の学校（特にフランス風のイエズス会などの学校）があった。また、ヨーロッパ諸国のオスマン帝国政府への圧力によって様々な特権を獲得した少数民族が、自分の共同体の児童に対する教育を与える学校を設立したのである。

1913~14年にはトルコにはギリシャ系、アルメニア系やユダヤ系の小学校2,596校と、これらに勤務する4000人の教師が存在した。トルコ中部地方の町であり、「よそ者」にも頻繁に登場するスィヴリヒサルSiğirciの町の学校を観察した記者アヒメト・シェリフによれば、アルメニア人向けの初等、中等学校ではかなり質の高い教育が行われているのに対して、同じ地域のトルコ人の（近代的な）中等や高等学校は哀れむべき状態にあると述べる²⁰⁰。そして同じ1913~14年代に外国人たちが所有する小学校は215校、806人の教師が勤務していた。少数民族と外国風の学校両方を含めて約80の中等・高等学校と1600人の教師がいて、彼らは大学も一校所有していた²⁰¹。

しかし、救国戦争時に問題になったのは、学校教育の多民族性というより、むしろイデオロギー上の二元性である。つまり、伝統的なイスラム風の学校と、非宗教的教育を行う政教分離・近代的な学校の二重性で、進歩的ナショナリストとイスラム復古主義のグループの対立が教育にも反映していたのである。

1912年に「Türk Ocağı」という知識人²⁰²を初めとするナショナリストによる大規模な協会が設立され、各都市、学校ごとに支所が開かれた。その設立の目的は、オスマン主義、イスラム原理主義やヨーロッパでの少数民族のプロパガンダに対して、トルコ人主義という概念の下で多数派であるトルコ人を統一させることで帝国の復帰を実現することだった。この協会では市民にトルコ史、トルコ語が教えられ、外国人や少数民族の学校でもトルコ語で教育が行われるよう説得活動が実施された²⁰³。

それと平行して、トルコ人としての国民意識や地方の近代化の普及、庶民の啓蒙を理想とする師範学校の卒業生はアナトリアに向うという傾向が見られた。それは「あの阿婆擦れを殺せ！」や「緑夜」に見られる現象である。

「田舎教師」の清三が「家が貧しく、とうてい東京に遊学などのでき」ないのを「だんだん意識」してきたので、「遊んでいてもしかたがないから、当分小学校にでも出たほうがいいという話にな」り、「月給十一円でいよいよ羽生在の弥勒の小学校

²⁰⁰ Börekçi, Ahmet Şerif, *Anadolu'da Tanin*（「アナトリアにおける《共鳴》」）, Türk Tarih Kurumu, Ankara, 1999、144~146 頁。

²⁰¹ Akyüz, Yahya, *Türk Eğitim Tarihi*（「トルコの教育史」）, Alfa Basım Yayım Dağıtım, İstanbul, 1999、240 頁。

²⁰² その一人は「あの女を殺そう」の作家、ハーリデ・エディップである。

²⁰³ Shaw, J., Stanford; Shaw, Ezel, Kural, *Osmanlı İmparatorluğu ve Modern Türkiye*, 371~372 頁。

に出ることにな」るのである（「田舎教師」、63）。つまり彼は特別な理想や夢を抱いて「田舎」を向かうわけではない。それに対して「あの阿婆擦れを殺せ！」で、主人公アリエ（女性）、また「緑夜」の主人公シャーヒンの場合も、僻地で教職に就くことに何かしらの強制力が働いたとか、または一種の諦めの感覚などは全くなく、それは彼らの強い意志であり、理想の現実のための行為である。二人とも強い情熱や高い希望を抱いて「田舎」に向うわけである。

「あの阿婆擦れを殺せ！」は、主人公アリエが赴く町の住民、特に子供に対する詩的な誓いで始まり、これは小説に伝説的、エピックな雰囲気を与与するのである。この誓いの文というのはただ小説の始まりの文章であるだけでなく、語りの数箇所を繰り返され、小説にある種のリズムを与える。

「あなた達の土を私の土、あなた達の家を私の家とし、
私はこの村の子供たちの母親、
そして光となり、決して何をも怖がらないと、
アッラーの前で誓います。」（「あの阿婆擦れを殺せ！」、1）

他方、小説の始まりの部分には、アリエが「田舎」で教鞭を取る話が次のように語られるのである。

「ここに来る一年前の在学中に、気短かで情熱的なある女性教師が生徒たちに『アナトリアで働きなさい』²⁰⁴と指導したのを、皆が流行と見なし、空想的に議論を行ったののだが、彼女はそれを自分の心に情熱的、肯定的な目的として置いた。卒業証書を受け取るなり、田舎での教職に申し込むために文部省の廊下を歩いていた。（中略）文部省の廊下で、疲れ切った絶望的な表情で、どうしても田舎に送られることだけは避けようと、イスタンブールに口を見つけるためには侮辱をも我慢する女性教師を見て、彼女はその態度を見下した。やっと誰も行きたがらない（・・・）町の学校の教師の口を得、（中略）ハイダルパシャ駅²⁰⁵から列車に乗って向かった。」（「あの阿婆擦れを殺せ！」、2~3）

また「緑夜」には、主人公シャーヒンが師範学校を卒業し、文部省支庁舎で所長に自分の赴任先の変更を求めようとするが、官僚主義で愚鈍な所長は、彼を「田舎」勤務を嫌がってイスタンブールに転勤を求める大半の師範学校卒業生の一人だと思い込み、隣にいる同僚にそれを嘆きつつ、一方的に彼を叱ろうとする。しかし、シ

²⁰⁴ ここで「働く」ということは教鞭を取るということを差すのである。

²⁰⁵ 当時や現在のイスタンブールのも最も大きい駅。

チャーヒンの発言は所長を驚かせることになる。彼は「田舎ではなくて、イスタンブールの学校に働くことが決まったので」、「これが不満なの」だと言う。そして、所長が彼の依頼内容を聞くと、彼は次のように答える。

「私のご依頼はとても単純なものです。どこでも結構ですので、私をイスタンブール以外の田舎の方に赴任させていただけたらありがたいです」（「緑夜」、9）

と言って、「田舎」での勤務を求める。チャーヒンは前にメデレセで宗教的な教育を受けていて、（日本仏教の禅宗などのような）イスラム教の神秘的な瞑想などを含む苦行を行い悟りを開こうとしたが、何年にもわたる経験、考察や観察の結果、宗教的な信仰やイスラム教的な悟りといった重大な目的を失ってしまい、その空白を埋める目的を探していた。それは子供を啓蒙し、原理主義という敵と、教育という武器で戦うという理想であった。

どちらの作品においても、ナショナリストの主人公が対抗するのは二つの敵である。イスラム原理主義者とギリシャ軍。これらの二つは自分の相互利益があるかぎり連带的であるが、この二作品では、原理主義に対する挑戦が焦点となっている。イスラム復古主義の方がより危険だとの認識があったのである。アリエは救国のために戦っているゲリラの恋人を救うため、自分を犠牲にしてダミヤノスと一夜を共にする。これを口実にする町の宗教原理主義者によって彼女はリンチを受ける。他方「緑夜」の主人公はトルコ軍の仕官を手伝ったのでギリシャ軍によってギリシャに追放される。彼は共和国創立の直後に町に戻ると、不思議な様子を目の当たりにする。以前敵と内通していた原理主義者は皆、髭を剃って西洋風の帽子を被り、近代化と共和国の支持者になっている。チャーヒンは不思議なことに敵軍の協力者であるとみなされ、町で孤立する。オスマン敵国のスルタンの時代に共和国時代の教師のように活動した彼は、この状態に不満や失望を感じ、アンカラに行くことにする。

「緑夜」は、学校の問題に焦点を集める作品である。その作中人物のほとんどは「田舎」町の小学校、中等・高等学校の教育者である。チャーヒンが町に来て、隠れていた進歩的ナショナリストたちを発見し彼らを組織する。それまで隠蔽されていたナショナリストとイスラム原理主義者のグループの対立がこうして浮上するのである。彼はメデレセを卒業後世俗的な・非宗教的師範学校に行くが、そこでもま

た、メデレセと無宗教の学校の出身者の間で対立があった。しかし彼はナショナリストのグループに参加するようになる。シャーヒンは町で様々な改革を試みるが、なかなかうまく行かない。例えば国語の授業の名をスケジュールに「トルコ語」と記入すると、教育省に属する町の指導主事は、町のイスラム原理主義者の反発を恐れ、「オスマン語」に戻させたりする。

このように「よそ者」、「あの阿婆擦れを殺せ!」、「緑夜」には「田舎教師」の画一的な学校教育や政治的に均一の空間が一切見られない。トルコの小説に現れる「学校教育」には国の多民族的構造による多様性や、トルコ人としてのナショナリズムを支えるグループと復古主義者であるイスラム原理主義者の相反的二重性が常にその背景にある。また日露戦争当時の日本と違って、トルコでは、国家から生徒までのトップ・ダウン式の関わり方や構成ではなく、比較的「^{bottom・up}下から上へ」の革命的なナショナリズムの動きが組織されようとしているといえる。

III. 2. 2. d. 教育と軍国主義

「繁子はまだほんの子供ではあるが、「少年世界」などをよく読んでいた。」（「田舎教師」、63）

清三の親友、郁治の15歳の妹繁子は、おそらく読み書きできない彼女とほとんど同年のイスマイルと違って、雑誌を読むことができる。「よそ者」の学校へ行かず出版物も読めない少年が、救国戦争に対する支持の形成の上で不可避的である国民意識を獲得できないのは当然である。これは、ハサン、エミネやサーリー・アーガーの息子の場合も同じである。翻って、繁子が読む「少年世界」は、国家によるイデオロギーを宣伝することによってある種の「少年の国民的共同体」の形成に一役かっている。つまりこのメディアは、国家の軍国主義的なナショナリズムを少年に植え付ける補助教育材料として機能していると言えよう。

「少年世界」とは明治28年、巖谷小波が主筆となって博文館より創刊し、毎号少年文学やお伽噺、英雄談を載せて子供たちの間に非常な人気を博した²⁰⁶雑誌であった。成田龍一は「近代都市空間の文化経験」の第三章『「少年世界」と読書する少年たち』で、日清戦争の時期を中心に、「少年世界」に連載された論説や記事など扱い、そこに見られる軍国主義に濃厚に色づけられたナショナリズムの注入のあり方をコ

²⁰⁶ 田山花袋、『田舎教師』、402頁。

ンパクトに検証している。例として挙げられる絵と文で綴る「征清画談」では、「戦争の記述はもっとも強烈に「われわれ」の共同性を創出」し、「各場面を構成する主体——「射撃」し、「占領」し、「突入」したり「撃退」する主体が我軍であり、ストーリーの展開と表現の形態がすでに、「われわれ」意識に貫かれている」のである。日本軍と中国軍の間にも上下・主客関係が作り上げられ、「日本の側は（中略）固有名詞を持つ人物として登場する。」一方で、「中国の側は、固有名詞を持たぬ集合体として、「敵」と一括して描かれる」のである。また「われわれ意識」を規定する上で「人種主義的な偏見と平行し」、他者である「かれら＝中国・中国兵が描かれていく」。そして、「戦闘が終わっても、戦争をつうじての「われわれ」＝「日本人」意識は強調される。（中略）戦争を画期とした区分を示し、戦争をあらためて共通体験として確認もしている。戦争をめぐる話題を拠点として、かくして「われわれ」意識が創出され、煽り立てられ、確認される」²⁰⁷のである。

これは日清戦争の時期の記事であるが、戦時におけるマスメディアの少年に対するナショナリストのプロパガンダを把握する上で重要な観点を提供している。また、少年向けのメディアは、国家の天皇制軍国主義注入の上でまるで教育機関のように働きかけたこともわかるが、「よそ者」と同時代の小説群では、教育と軍国主義的ナショナリズムの関わりはどう作用していったのだろうか。

「緑夜」は、イズミル周辺の原理主義色の強い町の小学校で主任として赴任させられたシャーヒンが町のイスラム原理主義階級に対して戦いを挑む姿を主要なテーマとしている。その上、救国戦争開戦の段階では、彼は自分のナショナリストのイデオロギーに近いケマリストの軍隊「Kuvayı Milliye（国民の軍隊）」²⁰⁸を支持するようになる。彼は生徒たちにも政教分離的、ナショナリストの教育を与えるが、軍国主義の色合いはほとんどアレゴリーの形式で出現する。学校は「城」に、町は（当時まだ救国戦争は無論、第一次世界大戦もまだ開戦していないので、敵軍でなく）イスラム原理主義者に対する「戦場」に、例えられる。

²⁰⁷ 成田龍一、『近代都市空間の文化経験』、116～118頁。

²⁰⁸ Kuvayı Milliye は「ナショナル・フォース」あるいは「ナショナル・パワー」という意味である。多数のコノテーションを持つ。一つは、アンカラにムスタファ・ケマルによって確立された臨時政府の名を指す。もう一つは先述の救国戦争を行う軍隊の名まえである。だがこの軍隊全体は当初、正式的なものでなく、様々の不法な武装集団、「山賊」、つまりゲリラ集団などがこの軍隊と協力して戦ったのである。こういった非正式のゲリラ部隊も同名で呼ばれていた。後でムスタファ・ケマルこれらのゲリラ集団全部を自分が率いる正式の軍隊に一体化させた。だが、これに反対する集団もあって、これらは正式の軍隊によって抑制された。

「あの阿婆擦れを殺せ！」の主人公であるアリエの父親は第一次世界大戦のさなか、イエメン、カフカス、シリアで転戦した末、どこかで戦死した「英雄」であり、彼女はその父親から精神的な強さを受け継いだのである。第3章でギリシャ軍と、ムスタファ・ケマル先導の「国民の軍隊」の衝突が語られる。町全体がギリシャ軍に抵抗を示すが、イスラム原理主義者の一部は「国民の軍隊」に対しても反感を抱いている。教育省は当時のダマト・フェリト・パシャ政権の支持者だけあって「国民の軍隊」をボリシェヴィキと同一視しているのである。アリエは第一次世界大戦後のムドロス休戦条約によるオスマン帝国軍の解散以来、熱心に「国民の軍隊」を支持している。彼女は生徒たちにナショナリストの行進曲^{マーチ}を教え、抵抗の姿勢を示すのである。生徒たちに手旗を持たせ、皆で行進曲を歌いながら行進したりし、庶民にもナショナリストの興奮を広めようと努める。

ある金曜日にその行進をして広場に着くと、そこで金曜の祈りを終えたイマームが群集を前に、革新的な行動や身なりの人々を批判する演説を行うところである。

「国民の軍隊」を目の敵にするイマームは彼女と生徒たちの行進を見ていきり立つが、アリエは恐怖心を抑えて行進を続け、広場の観衆の真中を横断しようとする。イマームは、男性の前で顔を隠すこともせず歌を歌うなど、イスラム原理主義の規律からはずれたアリエを糾弾し、神に「永遠^dの断罪^aを受けた^m者ⁿ（アリエ）に子供たちの教育を任せるのは罪だと主張する。イマームはイスラム原理主義的な言説に基づいて彼女を糾弾し、群集を煽るが、その真意は、「国民の軍隊」に対する敵意なのである。両者の緊張が高まる中、「国民の軍隊」に属するゲリラ集団がやって来て、その場は事なきを得る。

「あの阿婆擦れを殺せ！」で、教師アリエが推し進める軍国主義は、「田舎教師」のそれとは全く別ものである。すでに述べたように、「田舎教師」では軍国主義は、告諭令などによってトップ・ダウン式に児童生徒に注入されるのに対して、「あの阿婆擦れを殺せ！」では、アリエの個人的なイデオロギーが主な原動力となっている。彼女は後で、「国民の軍隊」と更に親密な関係を持ち、献身するわけだが、上記の時点では、彼女の行動は国家の指示によるものでもないし、彼女は何の政治的な組織にも属していない。どちらの小説においても、軍国主義的なナショナリストの教育は学校だけでなくインフォーマルな場でも行われるが、「田舎教師」では、兵士たちの見送りや、戦死者の葬式などの儀式には国家に属する権威者の承認や参加が前提

となる一方で、「あの阿婆擦れを殺せ！」において、当時のイスタンブール政府を支持する教育省の指導主事は、彼女の行動とまったく異なる政治的態度を持っているのである。

III. 2. 2. e. 「よそ者」におけるミリタリズム——教育者としてのアヒメト・ジェラル

「よそ者」に戻れば、すでに言及した通り、元将校であったアヒメト・ジェラルは、移り住んだ農村で、軍国主義的なナショナリズムを教える教育者の任務を果たそうとする。特に、元兵士のベキル軍曹やメヒメト・アリを、救国戦争を援助するように再教育しようとする。

ベキル軍曹は、しかし、すでに兵士というアイデンティティを残していず、国の一貫性を説くアヒメト・ジェラルに対して乱暴に議論を中断したりする有様であった。これに対して、主人公が怒り、彼を「いい加減」にするよう警戒する。そして彼に、兵役という履歴を持っていることを思い起こし、「お前はただの村人じゃなくて、兵役に就いた者だぞ。お前にこのような発言は許されない」といって、軍人の特権性を強調する。だが主人公の次の考察は、ベキル軍曹の教育の挫折の前兆だろう。

兵役！しかしベキル軍曹は敗北した軍隊の兵士であった。彼の繰り返し叩きのめされて損なわれてしまった魂を直して立たせることはとても無理だ。特に敵軍が向こうの丘まで到達した時、彼に叙事詩的な興奮を与えることは、彼にとってとても不条理で筋の通らないことだろう。（「よそ者」、173）

他方メヒメト・アリは、軍の任務を解かれて帰郷した途端に、無知蒙昧の「田舎」暮らしに精神的に戻ってしまい、再び召集されないことだけをひたすら願っていた。しかし再召集に応じて出発する段階で、アヒメト・ジェラルの演説に耳を傾け、兵士の自覚を取り戻すに到る。彼は戦地から休暇で戻った折り、新しい軍隊に国民的連帯感を認め、「昔のように司令官に殴られたり、怒鳴られたり、どひどい目にあうことはな」と報告する。しかし今度は、素行の悪くなってきたイスマイルを「銃剣の銃床で」「思い切り殴」という行動にでる。主人公は、「暴力、殴打が子供の教育上全く有効でないばかりか、必ず子供に悪影響、マイナスの影響を及ぼすことが、この一件で何よりもはっきり証明された」と述懐している。

子供の教育の面でアヒメト・ジェラルが最も希望を抱いたのは牧童のハサンである。主人公はこの少年に精神的な美とともに、形態的な美を見出し、心を通わせようとする。彼の美の特質は、アヒメト・ジェラルの頭にある理想的なトルコ人の若者のイメージに合致するようである。ハサンに対する主人公が抱く愛情や希望は、ハサンが「二、三世代前から彼までは家族で町に住んでいた」、アヒメト・ジェラルのようなアウトサイダーでもあること、さらに彼の父親が戦死しているという「神聖さ」にも起因するのだと思われる。

アヒメト・ジェラルは、彼に戦時ナショナリストとして教育を施そうと試みている。ある時ハサンは三人の脱走兵²⁰⁹に遭遇し、彼らの要求するパンを与え、彼らは立ち去る時自分らを見たことを内緒にしろと彼を脅したことをアヒメト・ジェラルに何気なく話す。

二人とも気が重くなって来る。私は重要な戦闘に負けた司令官のように辛い心地だ。彼はと言えば、石像のようにじっと動かない。（「よそ者」、136）

アヒメト・ジェラルは「脱走兵か。それはいけないな。男は死んでも徴兵を逃げないことだ」と教える。ハサンは「まるで自分自身が脱走兵であるかのようにしゅんとして、足元を見つめた」といい、メンターとしてのアヒメト・ジェラルの言葉を受け止めている様子が伺える。

また、アヒメト・ジェラルは丘の向こうに迫ってくる砲弾の音の距離を測ったり、プロパガンダのビラを撒いてゆくギリシャ軍の戦闘機のことをハサンに説明したり、戦闘に関連した教育を試みるのである。

だが、結局アヒメト・ジェラルは「生徒」ハサンに対する責任を果たさずに終わることになる。サカルヤ戦に敗退したギリシャ軍が撤退する中、規律の乱れた小隊が村を通りかかり、脅迫、強奪、放火といった悪行を繰り返して、小説の結末へとただれ込んでゆくのであるが、その最初の兆候において、牛追いかから戻ってきたアヒメト・ジェラルとハサンが暴徒と化したギリシャ兵に取り囲まれる。片腕のアヒメト・ジェラルは散々なぶられるが、隙を見て包囲を破り、帰宅する。この時彼は、

²⁰⁹ 1920年4月29日に Hiyanet-i Vataniye 法が發布され、占領国に協力したりその他国を裏切ったと認識される行為に及んだものは極刑に処せられることになった。イスタンブール政府のダマト・フェリトパシャのグループは初めてこの法に基づいて追及された。1920年9月11日にこれに追加する法が制定され、この法は当時増加していた軍隊からの兵士の脱走を予防することをも目指した。

こともあろうにハサンをその場に置き去りにするのである。ハサンはこの時に受けた暴行がもとで、アヒメト・ジェラルの家で死亡する。

従来の論文では見落とされたことであるが、ハサンの死にはアヒメト・ジェラルの責任が濃厚である。彼は片腕のコンプレックスに気を取られるあまりハサンに対する責任を怠り、暴徒の中に少年を残して帰るという無責任さを露呈する。ハサンはひどく殴打されて気を失ったまま打ち捨てられたのである。ギリシャ兵たちは、ハサンの連れていた牛の群を好き勝手に分け合うのであった。その日のうちに血まみれで気絶したハサンが見つかり、主人公の家のベッドに寝かされるが、今後はそこへ乱入してきたギリシャ兵たちが、略奪した物品をまとめるためにハサンの体の下からシーツを引き出して奪い、少年は床に叩きつけられ、そこで絶命する。アヒメト・ジェラルは、略奪後タオル一枚残されていない部屋の中で見つけた新聞紙——おそらく救国戦争のプロパガンダを伝えている新聞紙——を小さなハサンの顔にかけるのである。

彼の名前はギリシャ軍に対して「最初の弾丸を発射した」イズミルの新聞記者²¹⁰を思い起こすのである。そういう意味では主人公も指摘するように彼は戦死者であろう。

この静かな表情、この愛らしい表情は、ただこの子だけでなく、戦死した人間にも見たことがある。死んだ人の唇には、緊張ではなくくつろいだ微笑が浮かんでいて、それはとても美しい夢を見ている人の表情のようだ。（「よそ者」、200）

ハサンの暴行現場の描写はされないが、彼がギリシャ人兵士から牛を守ろうと、牧童の責任感をもって頑強に抵抗したのだろうと想像することができる。だが彼のその決意には、「メンター」アヒメト・ジェラルから授かった「国民」としての尊厳を守ろうという意識が同時に働き、メンターの存在を頼りに決意を実行したのでろう。そう仮定すれば、アヒメト・ジェラルが望んだ^{ナショナルソリダリティ}国民の連帯感が彼らの間に形成したと言える。それにもかかわらず、主人公はハサンを見殺しにしたも同然であり、その上ハサンに対する彼自身のネグレクトに気もつかず、彼の死を「神聖化」する

²¹⁰ すでに述べたように、1919年5月14日にイギリス、フランス、アメリカ合衆国の艦隊と共にギリシャ軍の師団がイズミルに到着し、イズミル在住ギリシャ人の群集は彼らを歓喜して出迎えた。イズミルの占領に対して市民の抵抗を呼びかけていた新聞記者 Hasan Tahsin は、5月15日にイズミルのコナック広場での集会の最中に、国旗を掲げたギリシャ軍中尉を狙撃して殺害し、彼はその場でギリシャ軍に殺害された。これはギリシャ軍に対する最初の抵抗運動であった。

だけで済ましてしまった。

III. 2. 3. 国家による制度的なナショナリスト教育と個人的、恣意的な教育によるナショナリズムの注入

「田舎教師」の「田舎空間」で見られるナショナリズムの教育は、天皇、文部大臣、政府など国家の最高権威者の指示に従って実行される。またこれは制度的なものであり、フォーマルな教育を通じて、児童生徒に「第二国民」としての国民意識が植え付けられ、幼い頃から兵士の「魂」が意識化させられる。「兵士の見送り」や、「戦死者の葬式」などへの生徒たちの参加も補完的に制度の中に位置づけられている。こうして天皇制軍国主義は、マスメディアによって大人に、そしてフォーマルやインフォーマルの教育によって児童、少年に、二重的に注入されるのである。

こういった寡頭政治的な教育組織は、「よそ者」や他の同時代作品^{トボス}の場となるオスマン・トルコの「田舎」には見られない。「田舎教師」の制度的な教育に対して、非制度的、恣意的な教育、国家によるナショナリズムの植え付けに対してアヒメト・ジェラル元将校、シャーヒン主任教諭や、アリエ教諭の個人的な教育が散在するだけである。日本の天皇制軍国主義は、幕末以来、日清戦争を経てすでに40年近く培われてきたのであり、「よそ者」等に見られる近代トルコの軍国主義は、「救国」・独立までの一時的、短期的な目的の下に編成されたものであり、むしろ啓蒙化や、近代化、西洋化を阻むイスラム原理主義を抑え込むための新しい文化・教養を「田舎」住民へ移植するようなナショナリズムの方が重要視されていたと言えよう。

第Ⅳ章 終章

「明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰り返している。」

夏目漱石『三四郎』²¹¹

日本とオスマン・トルコにおいて、近代化の動機は共通している。西欧スーパーパワー諸国による圧迫を脱する手段として、近代化は不可欠であった。だが両国において、近代化やナショナリズムの確立、その展開過程はかなり違った道程を歩むこととなり、その結果も畢竟^{ひっきょう}異なったのである。1910年代、一部のトルコ知識人は、日本とトルコの社会的、文化的な共通性を主張していたが、実は両国の歴史的発展過程には、共通性と比較にならないほど甚だしく相違しているのである。

幕末から明治の近代日本の黎明期には、「幕府廃止と天皇復辟はすみやかに行われたが、夷狄を追い払うのはそう簡単にはいかなかった」。藩閥政府がその国内的地位強化のために採用した基本政策の上で、「ホーエンツォレルン家のプロシア・ドイツを意図的にモデルとした世紀半ばの「公定ナショナリズム」が確立された。「一八七二年には、天皇の詔勅により、成年男子の一般教育促進が命じられ」、「一八七三年には、日本は、連合王国よりはるか以前に、徴兵制を導入」²¹²した。これらは日本国家の強化の上で重要な役割を果たした政策の一部である。

他方アンダーソンは、明治政府のこういった「一連の作戦行動」の短期間での成功の要因を三つの要素に分けて分析する。この方法を用いて、1908年の第二立憲君主政権の確立から救国戦争までのトルコを考察してみよう。

民族・文化的同質性

幕府による国内の平定と二世紀半の孤立によってもたらされた、日本人の比較的高い民族・文化的同質性である。たしかに九州で話される日本語は本州ではあまりわからなかったし、江戸・東京と京都・大阪のあいだですら会話によるコミュニケーションには支障があったが、半ば中国語化した表意文字による表記システムはすでに長年にわたって列島全域で使用されており、したがって、学校と出版による大衆の読み書き能力の向上は容易で、論議の対象となることもなかった。²¹³

²¹¹ 夏目漱石、『三四郎』（初版 1908）、筑摩書房、東京、2000、27 頁。

²¹² ベネディクト・アンダーソン、『想像の共同体』、161 頁。

²¹³ 同前、162 頁。

本論文にも指摘したように、オスマン帝国は、ヨーロッパあるいは世界で最も多様な民族集団を抱える国の一つであった。また、ヨーロッパに領土を保有する唯一のイスラム教国であった。だが国のこういった他民族的な構造は、特にフランス革命以降の様々な民族反乱を引き起こし、国の一体性を揺るがし始めたのである。国家は長らく、継続的な反乱の抑制で失血し、第一次世界大戦の終わりまでには広大な領土を失った。1918年の国の面積は、数世紀前からの植民地の面積はもとより、現在のトルコ共和国の国土よりも小さかったのである。

その上、オスマン帝国の最も古い領土であるアナトリアにおける他民族性も、国の近代化やナショナリズムの確立の障害となった。ヨーロッパ諸国が宗教的共通性を口実に政治的な動機で支持した帝国内キリスト教少数民、アルメニア人やギリシヤ人はかなり商業的な力を掌握し、それぞれの民族社会においてブルジョワ階級やナショナリズムを形成した。第一次世界大戦の時には、アルメニアはロシアと協力して独立国を建国すべく反乱を企てた。また救国戦争に乗じて、ギリシヤ民族はギリシヤ軍をはじめとする占領軍と組んで、西アナトリアで独立のギリシヤ国建国をはかった。他方現在のイラク、シリアやサウジアラビアなどを含んだアラビスタンと称された地域では、イスラム教徒であるアラブ民族もイギリスと協力し、第二次世界大戦時、オスマン帝国に思いがけない衝撃と損害を与えた。

第一次世界大戦の終了後、イスタンブールが占領され、ムスタファ・ケマル総監がスルタンとの絆を断ち切り占領軍に対して抵抗運動を始めた、その要は士官グループからなるナショナリストの「団結と向上党」であり、イスタンブールには西洋中心主義的な政権が確立された。トルコ人としての国民意識に基づくナショナリズムはこの過程において固定化した。「団結と向上党」はオスマン帝国のあらゆる民族をトルコ国家の下で再び団結させ、統治することを想定していたようである。また、少なくともアナトリアのキリスト教徒や、アラブ民族に支えられたと想定していた権威者がいたが、第一次世界大戦以降の段階で、同党を支持していたのは唯一トルコ民族だけであった明白化したのである。

言語の問題

オスマン・トルコでは、国家の言語はオスマン語であった。これはアラビア語とペルシア語に影響を受けたトルコ語であった。しかしオスマン語は余りに難解だったため、1850年代以降、この言語によるコミュニケーションが問題となった。国内

では、1) 国家と庶民、2) マフムト二世時代の世事と宗教の相違、3) 「よそ者」に見られるような一部の学識者と無知な群集の間の溝、4) 外国語意識および西洋的思想と東洋的な考え方の間の相違という4つの溝が発生した。²¹⁴

オスマン語の基礎はトルコ語でありながら、官僚や軍人の中でトルコ人以外の者も多くいたので、アラビア語、ペルシア語、ギリシャ語やスラヴ語由来の言葉や表現、またトルコ語の文法に相容れないルールによって不自然な人造の宮廷・軍隊の言葉となった²¹⁵。これは書き言葉であり、それに対して純粋のトルコ語はラーヤー²¹⁶の言葉だが、イスラム教徒とキリスト教徒が共存する地域では、キリスト教徒もこれを使っていた。1789年のフランス革命とともに、この様相は様変わりし、独自の言語で教育を与える少数民族の学校が成立したが、この運動はトルコ語に対するというより、東方正教会の宗教的言語に対する反発からであった。²¹⁷

イスラム法や、哲学など宗教の研究が行われるメデレセのオスマン語にはアラビア語の影響が大きかった。こういった民衆に理解されない宗教的な言葉は、本来のイスラムから離れ、迷信など原始的な信仰をもたらした。印刷機の伝来にもかかわらず、多言語によるクラーン出版に反対したメデレセ²¹⁸は、神聖言語と規定されたアラビア語からトルコ語への翻訳をも否認した。これによりクラーンを読解できる者の数を制限し、結果、迷信的な信仰の強化されたのである。

官僚政治や文学の言語としてのオスマン語にはペルシア語色が強く、この言語の習得には非常な労力が必要であった。また西洋化とともに伝来する新しい概念を表す言葉が導入され、それらの概念の規定や、オスマン語の再整理といった作業が徐々になされた²¹⁹。こうしてオスマン語は国家（メデレセ、文芸や官僚）の言語としてのみ機能し、庶民には通じなかった。日本でも「書き言葉」が問題になったが、全国的に「半ば中国語化した表意文字による表記システム」によって、また徐々に整えられた教育制度の普及に伴って、公共圏が整備されていった。だがトルコでは、国家の言語は数世紀にわたって様々な面で、国家と大衆の断絶の一要因として立ち

²¹⁴ 同前、254 頁。

²¹⁵ 同前、255 頁。例えばインドに位置したモンゴル帝国が宮廷や軍隊の言葉として作ったウルドゥー語と類似する。

²¹⁶ トルコ語で、Reaya, オスマン帝国の臣民。

²¹⁷ 同前、256 頁。

²¹⁸ クラーンは 1874 年に印刷技術の伝来の 146 年以後に出版されるようになった。

²¹⁹ 例えば civilization, culture, société などのフランス語から来た言葉に相当する概念や語も、19 世紀後半の知識人の時代にさえ存在しなかった。

はなかったのである。

オスマン帝国における言語の問題は、既述のイブラーヒム・シナーシの「話し言葉」を「書き言葉に」一致させる、トルコ語の洗練の試みによって解決されはじめた。つまり庶民の話す言葉が新聞や文学で使われるようになり、これはトルコ人としての国民意識を強調するナショナリスト運動に多大な影響与えたのである²²⁰。

王朝の古さ、民族的同質性

天皇家の万邦無比の古さ（日本は、その記録された歴史の全時代を通して単一の王朝が王位を独占してきた唯一の国家である）、そしてそれが疑う余地なく日本的なものであること（ブルボン家、ハプスブルグ家と対照せよ）、これによって、公定ナショナリズム発揚のために天皇を容易に利用することができた。²²¹

1299年に建国されたオスマン帝国は、日本ほど古くはなかったが、救国戦争の時点で600年以上の歴史を持つ一大帝国であった。オスマン帝国のスルタンは一夫多妻制度に基づいてハレムに多数の妻を抱え、外国人の「奴隸」が多数を占めた。従って、スルタンの妻や母親はフランス、イタリア、スラヴなどの外国人であった。こうして帝国を統治するオスマン朝はケマリストによる革命まで綿々と継続したのである。国家の官僚や軍人にも同様に外国出身者が多かった。その上、アラビスタンの征服や、スルタンにハリーファの称号が利用されることになって以来、イスラミックなアイデンティティが強調されるようになった。1908年の立憲君主制の確立以降期において、トルコ主義のナショナリストたちは、オスマン帝国政府を「トルコ政府」、スルタンを「トルコのハーン」、軍隊を「トルコ軍」と呼ぶようになったが、これは西洋中心主義者や、イスラム原理主義者の知識人グループには受け入れられなかった。要するに、スルタンの明白な混血性、他民族からなる官僚階級、スルタン・ハリーファとしてイスラム教の指導者であることなどの要因は、ナショナリストが「トルコ人」というアイデンティティを取り出すことを困難にしたのである。

「夷人」の侵入に対する国防的連帯感と、国際的規準に基づく国防の確立

夷人が突然、一挙に脅迫的に侵入してきたため、大多数の政治的意識をもつ住民は、新しい国民

²²⁰ またこれに関してベネディクト・アンダーソン、『想像の共同体』、130 頁、注 23 を参照。

²²¹ ベネディクト・アンダーソン、『想像の共同体』、162 頁。

的枠組みで構想された国防計画に容易に結集することができた。ここで強調すべきは、こうした可能性が、西洋侵入のタイミングは——一七六〇年代ではなく一八六〇年代であった——によるところが大きかったということである。というのは、このときまでには、ヨーロッパの主要部では、「国民共同体」が、民衆的ナショナリズムにもとづくものも公定ナショナリズムによるものも、すでに半世紀にわたって存在していたからである。実際、国防は、いまや「国際的規範」となりつつあるものに沿って編成することができたのだった。²²²

オスマン帝国がヨーロッパに最初の特権を与えるのは、国の衰退期ではなく、逆に16世紀、国の最盛期においてであった。フランス政府と親密な関係を持ち、軍事的な面でも協力したスレイマン一世²²³は、両国の友好の印として1535年にフランス人に商業的特権を与えたのである。これは恣意的な行動であり、繰り返すが、オスマン帝国は当時世界最強のスーパーパワーであった。当時のスルタンは、この「プレゼント」が、将来国の「アキレス腱」となり、国勢衰退の種となることは、予想だにしないだろう。

特に19世紀に至ると、ヨーロッパ諸国商業的特権は、外交的、商業的な不平等特権に発展し、これは軍事、外交、経済面でオスマン・トルコの衰退に拍車をかけた。そして20世紀初頭、第一次世界大戦を契機に、トルコは大帝国から実質的にはヨーロッパの植民地となる危機に直面した。

トルコにおける「夷人の侵入」は、1860年代の日本と違い、長期にわたる継続的なプロセスであった。トルコに民衆的ナショナリズムの運動による国民共同体が形成し始め、政権も運動を支持したが、帝国の全ての民族を統治するという非現実的な目標を掲げたため、政権を支持するのはトルコ民族だけであり、他の民族グループからは支持を取り付けていないという実情認識が遅れたのである。だがトルコも日本と同様、タイミングには恵まれたと言える。例えば、1917年のボリシェヴィキ革命は帝政ロシアの崩壊をもたらし、東アナトリアでの建国を求めるアルメニア民族とトルコへの侵攻を進めるロシアの協力という危機は消滅した。また、ボリシェヴィキ政府が、三国協商が戦前に計画していたオスマン・トルコ分割に関する文書を国際的に発表したことによって、オスマン・トルコ政府は外交面で比較的有利な足場を獲得した。これはナショナリストたちの目を覚まし、救国戦争運動の基盤を

²²² 同前、163 頁。

²²³ Kanuni Sultan Süleyman, フランス人によって「Süleyman le magnifique」と呼ばれた。

提供することとなった。そしてソビエト連邦は救国戦争時に外交や軍事面でケマリ
ストを援助する唯一の国となった。

宗教的要因

アンダーソンは、明治以降の日本の西洋化による経済、産業、軍事的「成功」を
もたらした三つの要因を指摘したが、その他にも日本の独特な宗教に対する態度を
見落とすわけにはいかない。そもそも神道および仏教は、中近東に発生したユダヤ
教、キリスト教、イスラム教と同列の宗教の範疇に入るのかどうかは議論されるこ
ところである²²⁴。そこには、信仰が政治の障害となるところが薄いという特徴が見ら
れる。日本では8世紀にはすでに神仏習合によって宗教の面で比較的均質性を保つこ
とに成功し、ヨーロッパの暗黒時代のような宗教的信仰による政治体制の危機とい
う事態に陥ることはなかったのである。そこで、宗教の合理化、世俗化、デミステ
ィフィケーションなど、暗黒時代以降のヨーロッパの発達において不可欠の要素が、
日本では必ずしも必要ではなかった。科学的進歩、ナショナリズムの確立などにお
いて、宗教は障害とはならなかったのである。ヨーロッパが宗教と世俗の妥協点
を見出す作業において数世紀にわたり甚だしいエネルギーを消耗した経験を繰り返
すことがなかったため、日本では明治政府を「成功」に導くパワーを損失せずに済ん
だのである。

オスマン帝国においては、宗教は帝国末期まで国家の権力や支配の手段として操
られていた。だが、イスラムは自分なりの法律や哲学を持ち、国の文化、政治、経
済の面で近代化に様々な議論や葛藤をもたらした。キリスト教あるいは無神論と結
び付けられる西洋化や科学的進歩はそのような背景で遅れたのである。そして特に
宗教的共同体意識を要求するイスラム原理主義と、20世紀初頭に最盛期を迎えたナ
ショナリストの間に対立が起こった。救国戦争時のトルコでは、「よそ者」に見られ
るように、宗教は政府や占領軍のプロパガンダに用いられ、ナショナリストにとっ
ては障害になったのである。

ドイツのナショナリズムとフランスのナショナリズムから見た「南小泉

²²⁴ Alan Watts は、*The Way of Zen* において、仏教の起源である道教、ウパニシャッド哲学、ヨーガなど
は宗教ではなく、個人的な way of liberation であると主張する。(Watts, Alan, *The Way of Zen*, Penguin
Books, London, 1990)

村」、「田舎教師」の日本と「よそ者」のトルコ

日本とトルコの根本的な相違は、文化的、民族的、宗教的同質性と、重層性、多様性にある。日本とトルコのナショナリズムも、相反的である。日本では「国民（ネーション）と国家（ステート）、国民と民族が一体・同一のものとする認識」²²⁵される国民意識が確立した。日本のナショナリズムはドイツのそれと類似するものだった。鈴木は次のように述べる。

ドイツや日本ではその勃興期において、またその後においてもネーションと人民は同一ではなかった。（中略）「遅れてきた帝国主義国家」ゆえの必然的結果だったからかもしれない。うちに社会主義者、カトリック勢力、ポーランド人少数派のみの“帝国の敵”を抱えていたドイツは、ナショナリズムを国家統合の最大の武器として利用し、国民の名において国内の他者を抑圧し、対外的には膨張を要求した。²²⁶

それに対して、フランスのナショナリズムの「ネーション」は「革命と自由の概念であり、人類的なものを内に含み、内政的には自由を、外政的にはヨーロッパを意味」²²⁷している。

ドイツの「国内の他者」を抑圧する政策と似通った政策を、日本では政府が農民に対して実行した。政府は農民に対して徴税や徴兵によって兵士を求めることは「血税一揆」が起こったが、これは政府によって抑圧された。そこで国家と農民の間に主客関係が形成し、同じことは農民を対象化し自分と彼らの間に距離を置くMの態度にも見られる。Mは農民をドイツのポーランド人、社会主義者などのように他者化する。それに対してドイツや日本と違い、「遅れてきた帝国」でないトルコのケマリストのナショナリズムは、むしろフランス風のものであった。すなわちそれは、革命と自由の概念を核とし、国民と共に占領国や、後にはスルタンに対して戦いを挑むプロセスであった。国民は国の基礎と想定された。アヒメト・ジェラルは、Mのように農民との間に故意に距離を置くのではなく、彼らに近づこうとする。アヒメト・ジェラルは、農民を国民とみなし、彼らを喜んで戦場へ向かうよう説得する。Mのアメリカから帰郷した文一と築く寡頭政治的な立場を築くことに対して、彼は村人と接して反政府的なプロパガンダを行う。

²²⁵ 鈴木健二、『ナショナリズムとメディア——日本近代化過程における新聞の功罪』、16頁。

²²⁶ 同前、18頁。

²²⁷ 同前。

日露戦争を背景にした「田舎教師」では、文化的（特に宗教的）、民族的に同質な社会構造において、学校教育とマスメディアを媒体にナショナリズムの公共圏が速やかに形成する様子が見られる。この圧倒的に同質的空間では、反戦的であった清三も、戦時ナショナリズムの熱狂に心を奪われ、国のために尽くすことを熱望するようになるのだった。アヒメト・ジェラルのナショナリズムは、ロマン主義、民族主義というより、現実主義で文化に基づくものであるが、国の重層的構造の一部としての農村の同質的空間は彼を受け入れない。

こういったふさわしい同質的空間でスムーズに築かれたドイツ風トップ・ダウン式の寡頭政治的公定ナショナリズムの日本では、清三が病死した時、国軍は帝政ロシアに対し勝利を向っていて、世界の新しい「東洋帝国」としての位置を固めていくのである。一方で、アヒメト・ジェラルが国の寒村でボトムアップ式のナショナリストの共同体を築くのに挫折し、行方不明になった時、国は占領軍に対して救国過程において重要な勝利を獲得し、占領軍の払拭や、600年来の東洋皇帝の打倒と共和国の創立の段階に近づいているのである。

参考文献

一次資料

1. 田山花袋、『田舎教師』（初版 1909）、日本文学全集、集英社、東京、1972.
2. ヤークプ・カドリ・カラオスマノール、『よそ者』（*Yaban*）、デヴィリム・チェティン・ギュヴェン訳、（未刊）、2001.
3. 眞山青果、『南小泉村』（初版 1907）、明治文学全集、筑摩書房、東京、1907.

一次資料（外国語文献）

1. Adivar, Halide, Edip, *Vurun Kahpeye*（初版 1926, 「あの阿婆擦れを殺せ！」）, Özgür Yayınları, İstanbul, 1993.
2. Güntekin, Reşat, Nuri, *Çalıkuşu*（初版 1922, 「ミソサザイ」）, İnkılap Yayınları, İstanbul, 1993.
3. Güntekin, Reşat, Nuri, *Yeşil Gece*（初版 1928, 「緑夜」）, İnkılap Yayınları, İstanbul, 1995.
4. Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Ankara*（初版 1934, 「アンカラ」）, Birikim Yayınları, İstanbul, 1981.
5. Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Milli Savaş Hikayeleri*（初版 1947, 「民族解放戦争物語」）, İletişim Yayınları, İstanbul, 1990.
6. Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Yaban*（初版 1932, 「よそ者」）, İletişim Yayınları, İstanbul, 1995.

二次資料（日本語文献）

1. 大江志乃夫、『国民教育と軍隊』、新日本出版社、東京、1974.
2. 石原千秋、木股知史、小森陽一、島村輝、高橋修、高橋世織、『読むための理論』、世織書房、横浜、2001.
3. 加藤周一、『日本文学史序説』、平凡社、東京、1979~1980.
4. 柄谷行人、『終焉をめぐって』、講談社、東京、1995.
5. 柄谷行人、『日本近代文学の起源』、講談社、東京、1988.
6. 小森陽、『構造としての語り』、新曜社、東京、1988.
7. 小森陽一、『小説と批評』、世織書房、横浜、1999.

8. 小森陽一、『ポスト・コロニアル』、岩波書店、東京、2001.
9. 鈴木健二、『ナショナリズムとメディア——日本近代化過程における新聞の功罪』、岩波書店、東京、1997.
10. 田山花袋、『一兵卒の銃殺』(初版 1917)、岩波書店、東京、1955.
11. 田山花袋、『第二軍従征日記』(初版 1905)、定本花袋全集、臨川書店、京都、1993~
12. 1995.
13. 土方美雄、『靖国神社国家神道は甦るか！——天皇制論争』、社会評論社、東京、1986.
14. 夏目漱石、『三四郎』(初版 1908)、筑摩書房、東京、2000.
15. 成田龍一、『近代都市空間の文化経験』、岩波書店、東京、2003.
16. ひろたまさき、『日本近代思想体系 22、差別の諸相』、「日本近代社会の差別構造」、岩波書店、東京、1990.
17. 福田義也、『教育勅語の社会史——ナショナリズムの創出と挫折』、有信堂、東京、1997.
18. 保科眞一、『トルコ近代文学の歩み』、叢文社、東京、2001.
19. 眞山青果、『眞山青果全集』、第1巻 - 補巻5、講談社、東京、1975~1978.

二次資料（外国語語文献）

1. Ahmad, Aijaz, *In Theory—Classes, Nations, Literatures*, Verso Books, London, New York, 1992.
2. Aki, Niyazi, *Yakup Kadri Karaosmanoğlu—İnsan, Eser, Üslup*（「ヤーakup・カドリ・カラオスマノール——人間、作品、文体」）İletişim Yayınları, İstanbul, 2001.
3. Akyüz, Yahya, *Türk Eğitim Tarihi*（「トルコの教育史」）, Alfa Basım Yayım Dağıtım, İstanbul, 1999.
4. Anderson, Benedict, *Imagined Communities*, Shoken Books, New York City, 1983／ベネディクト・アンダーソン、『想像の共同体』、白石隆・白石さや訳、リブロポート、東京、1996.
5. Banarlı, Nihat, Sami, *Resimli Türk Edebiyatı Tarihi*,（「トルコ文学史絵本」）MEB, Ankara, 1983.
6. Berkes, Niyazi, *Türkiye'de Çağdaşlaşma*（「トルコにおける近代化」）, Yapı Kredi Yayınları, İstanbul, 2003.

7. Börekçi, Ahmet Şerif, *Anadolu'da Tanin* (「アナトリアにおける《共鳴》」), Türk Tarih Kurumu, Ankara, 1999.
8. de Volney, Comte Constantin François, *Considérations sur la guerre des Turcs avec les Russes*, Paris, 1788-1789.
9. Kudret, Cevdet, *Türk Edebiyatı'nda Hikaye ve Roman*, (「トルコ文学における短編小説および長編小説」) İnkılâp Yayınları, İstanbul, 1970.
10. Kadri, Yakub, *Terrra Matrigna*, Scalero, A. (trad.), Mondadori, Milano, 1941.
11. Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Atatürk*, (「アタテュク」) Remzi Kitabevi, İstanbul, 1946.
12. Karaosmanoğlu, Yakup Kadri, *Der Friemdling*, Max Shcultz (übersetzung), A.H. Payne, Leipzig, 1940.
13. Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Un Roman Turc de Yakup Kadri Karaosmanoğlu, Yaban* Besnillian, Mireille (trad.), éditions Cent pages/Unesco, Paris, 1982.
14. Karaosmanoğlu, Yakup, Kadri, *Yaban: l'étranger*, Ferda Fidan (trad.) Centpages/UNESCO, Paris, 1989.
15. Kunt, Metin; Akşin, Sina, *Türkiye Tarihi 3—Osmanlı Devleti, 1600-1908*, (「トルコの歴史 3——オスマン帝国 1600～1908 年」), Cem Yayınevi, İstanbul, 1993.
16. Mantran, Robert, *Storia dell'Impero ottomano*, Argo, Lecce, 1999.
17. Moran, Berna, *Türk Edebiyatına Eleştirel Bir Bakış I*, (「トルコ文学への批評的な眼差し (1)」) İletişim Yayınları, İstanbul, 2001.
18. Mutluay, Rauf, *50 Yılın Türk Edebiyatı*, (「過去 50 年トルコ文学」) Türkiye İş Bankası Yayınları, İstanbul, 1973.
19. Mutluay, Rauf, *100 Soruda Çağdaş Türk Edebiyatı*, (「100 問で分かるトルコ文学」) Gerçek Yayınevi, İstanbul, 1973.
20. Necatigil, Behçet, *Edebiyatımızda Eserler Sözlüğü*, (「国文学人名辞典」) Varlık Yayınları, İstanbul, 1992.
21. Said, Edward W., *Orientalism*, Penguin Books, London, 2003.
22. Shaw, J., Stanford; Shaw, Ezel, Kural, *Osmanlı İmparatorluğu ve Modern Türkiye*, (「オスマン帝国と近代トルコ」) E Yayınları, İstanbul, 1983.
23. Thompson, John, B., *Ideology and Modern Culture: Critical Social Theory in the Era of Mass Communication*, Stanford University Press, Stanford, 1990.
24. Watts, Alan, *The Way of Zen*, Penguin Books, London, 1990.
25. Yakar, Aytakin, *Türk Romanında Milli Mücadele*, (「トルコ小説における民族解放闘

争) A.Ü.D.T.C.F. Yayınları, Ankara, 1973.

雑誌論文など（日本語文献）

1. 岡田英雄、「『田舎教師』のモデル：明治三十年代の青年像」、『文化と教育』巻1第8号、1950.
2. 勝又正直、「地図の上の主体：田山花袋作『田舎教師』を読む」、『社会学評論』、第49巻第1号、1998.
3. 柄谷行人、「日本精神分析再考」、『文学界』、51(11) 1997.
4. 亀井秀雄、「田山花袋『田舎教師』——地方/文学青年の創出」（明治の小説がいま新しい<特集>）、『国文学 解釈と教材の研究』、第39巻第7号、1994.
5. 小森陽一、「変死への欲望——戦死報道と「軍神」神話の成立——」、『文学』、季刊、第5巻第3号、1994.
6. 瀬沼茂樹、「『破戒』と『田舎教師』」、『新日本文学』第8巻第4号、1953.
7. 高橋春雄、「真山青果『南小泉村』論」、『国文学 解釈と教材の研究』第12巻第9号、1967.
8. 千葉貢、「花袋『田舎教師』考——パトリオティズムの具現」、『花袋研究学会々誌』第14号、1996.
9. 「特集・真山青果」、『文学』、第28巻第6号、1960.
10. 富田鉄之助、『真山青果と前進座』、『文学』、第28巻第6号、1960.
11. 永井聖剛、「『田舎教師』・三人称を生きる読者——ある同時代読者の読みをめぐる」、『日本文学』第49巻第6号、2000.
12. 橋本直久、「『南小泉村』と『土』——農村小説の写実態度」、『国文学攷』、第28号、1962.
13. 長谷川泉、「真山青果・『南小泉村』——現代文の鑑賞」、『国文学：解釈と鑑賞』、第20巻第12号、1955.
14. 福田恒存、「解説」、田山花袋、『田舎教師』、新潮社、東京、1997.
15. 和田敦彦、「読む<田舎教師>テキスト群と読者——<記号>への奉仕」、『日本文学』第46巻第6号 1997.

雑誌論文など（外国語文献）

1. Altunya, Hüseyin, “Yabancı Olunan Bir Konunun Romanı: Yaban”, (「未知なる問題

- をめぐる小説としての「よそ者」) *Türk Dili*, Sayı: 306 Mart, 1977.
2. Binyazar, Adnan, “Türk Romanının Bugünü”, (「トルコ小説の今日」) *Milliyet Sanat Dergisi*, Sayı: 234, 1977.
 3. Duru, Kazım, Nami, “Yaban”, (「よそ者」) *Ülkü Dergisi*, Sayı: 3, 1933.
 4. Güntekin, Reşat, Nuri, “Yakup Kadri Bey`in Yeni Eseri”, (「ヤークプ・カドユリ氏の新しい作品に関して」) *Hakimiyet-i Milliye Gazetesi*, 1932.
 5. İleri, Selim; Doğan, Mehmet, H., “Türk Romanında Kurtuluş Savaşı Özel Sayısı”, (「トルコ小説における民族解放戦争・特集」) *Türk Dili Dergisi*, Sayı: 298, 1976.
 6. Sevük, İsmail, Habib, “Yaban”, (「よそ者」をめぐって) *Cumhuriyet Gazetesi*, Sayı: 5704, 5714, 1940.
 7. Toprak, Burhan, Ümit, “Köylü ve Münevverler”, (「村人を知識人」) *Varlık Dergisi*, Sayı: 4, 1933.
 8. Tör, Vedat Nedim, “İşte Bir Roman, Yaban”, (「これは本物の小説だ——「よそ者」について」) *Kadro*, Sayı:16, 1933.

辞典、百科事典など

1. 磯田光一 (他 編集)、『新潮日本文学辞典』、増補改訂新潮社、東京、1988年.
2. 『広辞苑 第五版』、岩波書店、東京、2003.
3. 『日本大百科全書』、『日本大百科全書』+『国語大辞典—スーパー・ニッポニカ』CD-ROM Windows版」、小学館、東京、1998.